
アヤカシ 地獄録篇

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヤカシ 地獄録篇

【Nコード】

N4059U

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

平凡な男と大妖怪・羽衣狐の新たな物語。

一ノ怪：京の妖（前書き）

最近、作品の主人公に名前をつけないのが、自分の中で流行ったり、なかったり……。

はい、そんな訳で（どんな訳だよ？）第二部スタートです。

どうでもいいけど、掲載早いな、オイ。大丈夫か？

一ノ怪：京の妖

京都に大きな屋敷が一つある。

テレビでよく見る大富豪の屋敷を想像していただければ、概ね間違いはない。建物は大きく、庭は広く、金持ちである事を誇示するような屋敷だ。

ただ、強いて他の富豪屋敷と違う点をあげるなら、雰囲気だろう。何と言うか、ちょっと近寄りがたい空気が漂っているのだ。立派な屋敷の存在感とは別に、何かありそうな感じがするのだ。

しかし、外から見たのでは、“何かありそう”と感ずるだけで正体までは解らない。

その“何かありそう”な屋敷の一室に、『俺』は居た。

*

今は、午前六時である。会社に出勤するオヤジや学校に登校する学生が、ぼちぼち目を覚ます時間だ。

ソコは、屋敷の一室で、一言で表すなら『黒』だ。床や天井、壁、カーテン、室内の全てが黒一色で塗りつぶされている。ココで殺人を起こして血を飛ばしてもバレないんじゃないかね？と思う位に真っ黒である。部屋の主の趣味なのか、徹底的に漆黒の空間が出来上がっていた。

真っ黒に統一された部屋には、これまた黒く大きなベッドが置かれてある。

「あっ………！ はっ………羽衣、狐………！」

黒いベッドの中で、『俺』は顔を赤くさせ、息を荒げていた。

『俺』を紹介するのに、多くを語る必要は無い。

地味でヘタレ。コレで充分である。だが、まあ、一応本作品の主人公なので、もうちょい説明を加える。簡単に言えば、顔を『銀魂』のツツコミ役の新八よりワンランクダウンさせ、更に地味度を上げたのが『俺』と言う男である。え？ 『銀魂』を伏せ字にしなくていいのかって？ 同じジャンプ作品なのだから、細かい事は気にしない方向でお願いします。

そんな地味な『俺』は、赤い顔で息を荒くして悶えている。

原因は、彼の後ろにあった。

「ふふ……感じておるのか、人間？」

黒髪美人の羽衣狐はしろもぎつねが、後ろから彼の耳元で囁く。

艶やかな黒い長髪に底が見えない黒の瞳、対照的に透き通るような白い肌の美人である。

彼女こそ、この漆黒の部屋と屋敷の主にして、京都に巣くう妖怪の長である大妖怪・羽衣狐だ。そう、屋敷を包む近寄りがたい雰囲気おきの正体は、彼女達『妖怪』なのである。転生妖怪である羽衣狐は、今も山吹乙女と言う女性の肉体からだに憑依している。

あつ、ちなみに『俺』は普通の人間だからね。

人間の『俺』と妖怪の羽衣狐が、一緒のベッドに入っているのだ。しかも、羽衣狐が『俺』の背中にピッタリとくっついている。

羽衣狐は妖艶な笑みを浮かべ、『俺』の耳に甘い吐息をかける。

「ほれほれ、ココをこうされるのが、好きなんじゃない？」

「うっ……ああっ！ や、やめ……！」

黒の掛け布団の中で、何やらモゾモゾと動くと、『俺』は目を固く閉じて悶えた。

どうやら朝っぱらから、羽衣狐が『俺』の『息子』を責めているようだ。

「女子おなこのような声を出しおって……男として、情けないとは思わぬのか？ 逆に女子に責められて感じおって……この変態め」

軽い言葉責めをしながら、羽衣狐は『息子弄り』を続ける。

「ちよっ……誰か、来たら……あくっ……！ ホント、もうダメ……！」

「気持ち良さそうに感じておるくせに、何を言っておる？ それに、妾わいわはまだ満足しておらぬ。まだまだイジメ足りぬ……お前一人だけ満足する事は許さん……！」

ベッドの中から逃げられず、『俺』は羽衣狐から責められ続けた。この場面から察せられる通り、二人はそういう関係である。種族を超えた、異色のカップルだ。偶然の出会いをキツカケに、二人は共に行動するようになり、やがて互いに想い合う仲となった。まあ、その間に羽衣狐に弄られ続けたせいで、『俺』は若干“M”になっってしまった。ただ、彼の名誉の為に書いておくと、苦痛で感じる程の重症ではない。あくまで、『受け身』なだけなのだ。

結局、『俺』は羽衣狐の成すがままにされ、昇天するまで弄られた。

*

朝の触れ合いと言うには、一方的過ぎる行為を終えた後、羽衣狐と『俺』は部屋を出て通路を歩いていった。

やや『俺』より前を歩く羽衣狐は、黒のセーラー服、黒のタイツと上から下まで黒づくめの格好をしていた。彼女程、黒が似合う者は居ないだろう。黒い服を着こなすと言うより、黒を身に纏うと表現した方が正しい。黒そのものが、彼女の衣のようなモノだ。

対して、羽衣狐の後ろを歩く『俺』は、無地の白いシャツにジーパンと言う、何とも面白味の無い地味な服を着ている。

ぶっちゃけた話、この二人は全く釣り合っていない。羽衣狐は、異性同性問わず虜にする神秘的で妖しい魅力を感じるが、『俺』からは何の魅力も感じない。いや、地味と言う特徴とも呼べない特徴があるが、お世辞にも羽衣狐とお似合いのカップルには見えない。二人で街中を歩いた時も、周囲の男共から嫉妬と憎悪の視線を受けていた。何であるな美人にあんな地味な奴が？ と言う不満の声が聞こえてきそうだった。

そういう意味でも、二人は異色のカップルである。

俺みたいなダメ男を好きになるなんて、随分と物好きな女だと『俺』本人も思った程だ。今でもちよっと思ったりする。でも、納得出来る部分もある。

「羽衣狐……今朝も容赦無しっすね……」

「ふふふ、人聞きが悪いぞ。妾は、お前が望む事をしてやっただけだぞ？」

振り向かずには答える羽衣狐の声は、機嫌が良さそうな感じだった。羽衣狐にとって、『俺』は恋人でありイジメ甲斐のある相手なのだ。

『俺』が顔を僅かに顰めると、やや前を歩く羽衣狐が止まった。黒の長髪を靡かせながら振り返り、笑みを浮かべた羽衣狐と向かい合う。

歩きを止めた『俺』に、羽衣狐が近寄る。手を伸ばし、距離が縮まってドキドキする『俺』の顎に、指を添えた。漆黒の瞳が、『俺』

を見上げる。

「妾の責めは気に入らんか……？」

妖艶な笑みで、羽衣狐が問い掛ける。

訊かれた『俺』は、顔を真っ赤にして戸惑っていた。羽衣狐の口から甘い吐息が、顔にかかって興奮が増していた。

「い、嫌じゃないです……」

「そうか」

恥じらいながら答えた『俺』の言葉に、羽衣狐は満足そうに笑った。

羽衣狐も楽しんでいるが、やられてる『俺』も快樂を得て喜んでいるのだ。完璧に、変態の沼にハマってしまったている。悲しいが、羽衣狐の調教によってもう手遅れだ。まあ、本人が良いと思ってるなら、構わないだろう。

しばらく歩いて、二人は広間に入った。長テーブルの上には、二人分の朝食が用意されている。

「お姉様、おはようございます」

広間に入ると、一人の少女が羽衣狐に挨拶をした。

「狂骨か、お前も早いな」

羽衣狐は、ニコリと笑った。

挨拶してきた少女は、狂骨と言って羽衣狐の配下の一人である。

背は低く、長い黒髪を後ろに束ねた可愛い少女だ。特徴は、蛇のような瞳と手に持つ髑髏である。

「おはよう」

「おはよう、人間」

『俺』が挨拶すると、少女は羽衣狐の時と変わって少し素っ気ない感じで返した。

羽衣狐を慕っている故に、彼女の恋人である『俺』を嫌っているのだ。たまに喧嘩をする時があり、全て狂骨が制している。当たり前である。だって、狂骨も妖怪なんだから。

挨拶を済ませて、羽衣狐と『俺』は席に着いて料理を食べる。富豪の家だけあって、料理の味は一流である。正直、庶民の『俺』には勿体ない位だ。

朝食を済ませると、羽衣狐は広間を出て玄関に向かう。これから学校に行くのだ。とくに夏休みは終わり、学校は始まっている。階段を使って一階に降りると、玄関前に一人の男が立っていた。

「闇の聖母様、おはようございます」

男は、しょうけらと言う妖怪だ。綺麗な長髪で、妖怪なのに首から十字架を提げて神父服を着ている。そして、羽衣狐をマリアと呼んで崇拜しているのだ。京妖怪の中でも変わり者である。

「今日は日差しが強いので、こちらの黒のレインコートを着て行きましょう」

「いや、おかしいでしょ！　せめて日傘にしましょうよ！」

何処からともなく黒のレインコートを用意したしょうけらに、『俺』は声を上げた。

イケメンでクールな感じのしょうけらだが、ちょっと残念な事に中身はアホである。

「雨も降ってないのにレインコートなんか着たら、絶対に不審者だと思われますよ。しかも黒だと、色的にも危ない感じですよ」

「レインコートならば、全身を守る事が出来るだろう。それにマリア様の衣装の色は、黒以外あり得ないのだ！」

「すみません。誰か頭のネジを持ってきて下さい。それと、しょうけらさんに敬語使うのやめていいですか？」

さすがの『俺』も、しょうけらのアホっぷりに顔を顰めた。

しょうけらのアホは例えるなら、九兵衛に過保護な東城歩的なアホっぷりである。

「ささっ、マリア様。早速このレインコートを着て」

言いかけたところで、羽衣狐の尻尾ピンタがしょうけらの顔を叩く。いや、叩くと言うより、薙ぎ払うの方が正しいな。

しかも、薙ぎ払った羽衣狐の顔が、恐ろしいまでに無表情だった。どうやら、彼女もしょうけらのアホなまでの過保護っぷりを、ウザがっていたようだ。

羽衣狐は、壁に叩きつけたしょうけらを一瞥して言った。

「ウザい」

あっ、本音が出ちゃった。

一部始終を見ていた『俺』は顔を引きつらせ、狂骨は感動して目をキラキラ輝かせている。

そんな二人に顔を向けた羽衣狐は、穢れ無き素敵な笑顔になっていた。

「では、行ってくる」

「い、いつてらっしゃい」
「いつてらっしゃいませ、お姉様」

二人に見送られ、羽衣狐は屋敷を出ていった。
玄関の扉が閉まると、しょうけらが倒れたまま呟いた。

「ふふ……マリア様……。今日も強く、美しい……！」
「アンタもう死んじゃえば？」

たまに意見が合う『俺』と狂骨だった。

変わり者の人間とアホな妖怪、その他諸々の妖怪が集まった京妖怪の集団　羽衣狐連合軍は、今日も元気であった。

ちなみに「らせんの封印が再び施された京都にどうして羽衣狐達が居るの？」と言う質問には、「ギリギリ結界外の京都の街に居るの」とさせていただきます。つまり、アレです。深く考えないで下さい、と言う事である。

*

「おはよう」
「おはよー」

天気の良い空の下で、生徒達が挨拶を交わしている。

学校の正門前は、登校してくる生徒達の声で賑わっていた。ココは、金持ちの女の子だけが通える、所謂お嬢様学校と言う所だ。

そんなお嬢様学校の教室に、羽衣狐の姿があった。

退屈だ。

周囲に気付かれない程度の溜め息をつき、羽衣狐は思った。

余興の一環として学校に入学して通っているが、もう飽きてしまった。周りで騒ぐクラスメイトの話にも、まるで興味が無い。

こんな所に来るより、屋敷で『俺』をイジメてる方が楽しい。実に有意義な時間だ。

人間をイジメておると、妾まで興奮してくる……！ 今朝の事を思い出すだけで、もうたまらぬ！

いつの間にか、羽衣狐は興奮して頬を赤くしていた。『俺』は、相当のお気に入りなのだ。

しかし、と羽衣狐は思考を切り替えて落ち着く。

憑依している体の主である山吹乙女が、現代の学問に興味があるので、通わない訳にはいかない。

仕方がない、と諦めた時だった。

「ねえねえ、明日クリスマス・イヴだよね！」

「あたし、彼氏と一緒に過ごすんだ〜！」

近くの席で会話をしている女子生徒の声が、耳に入ってきた。

クリスマス・イヴ？

羽衣狐の片眉が、ピクリと反応した。

そして、会話を盗み聞きした羽衣狐は、ニヤリと笑みを浮かべた。彼女は、新しい『遊び』を見つけた。

*

人物紹介。

- ・『俺』。
- ・身長：168cm。
- ・性別：男。
- ・所持品：地味な眼鏡。
- ・趣味：寝ること。ダラけること。
- ・情報：本作の主人公。偶然京都を訪れて、羽衣狐と出会い、良組との戦いに巻き込まれる。

性格は面倒臭がり屋で、かなりの臆病者。本人もダメな奴だと自覚しているが、その性格故に改善出来ずに難儀している。しかし、羽衣狐と出会い、配下の京妖怪達とも接する内にちよつとずつ変化している。ついでに羽衣狐のイジメのせいで、変態への道を歩み始めてしまったが、本人は諦めてる様子。

京都の街中で出会った羽衣狐に一目惚れして、戦いが終結した後恋人となった。

・畏(?)

『逆境の閃き』。もしくは『瞬間の閃き』。

普段はまるで冴えない自堕落男だが、追い詰められた状況になると打開策を閃く。主に記憶の引き出しの中から、バトル漫画の戦術を出して利用している。しかし、羽衣狐の余興で鬼の相手をした時に自分の急所を見て『急所狙い』を思い付いたり、弑條城で塵地蔵と対決した時に地の利を活かした独自の閃きを発揮するなど、全く自力が無い訳ではない。

・羽衣狐。

・身長：162cm。

・性別：女。

・所持品：黒のセーラー服。黒の鞆。

・趣味：『俺』イジメ。

・情報：本作のヒロイン。転生を繰り返して、現代に復活した大妖怪。人の体を依代にしており、現在は山吹乙女と言う女性に憑依している。全身黒づくめが特徴で、見る者を魅了する美しさを備えている。弑條城での戦いではリクオを圧倒し、まだまだ技の手数を残しているようで実力はいまだ未知数。

気分屋なところがあり、京の街中で偶然出会った『俺』をさらったのも、暇潰しの『余興』に過ぎなかった。

身内の妖あやかしに対しては寛容で、人間を激しく嫌悪している。しかし、余興として側に置いていた『俺』が自分が妖怪と知っても好きである事を知ってからは、人間の中で唯一彼に心を許すようになった。想いを知った最初の頃は、余興の一環として恋人となったが、後に『俺』と想い合い、本当の恋人となって付き合いだした。

・畏。

二尾の鉄扇。

普段は鞆の中にしまっており、鉄の扇。巨大化が可能で、広げて攻撃を防いだり、相手を薙ぎ払う武器にもなる。

三尾の太刀。

尻尾の中にしまってある日本刀。土蜘蛛の暴走を止める際に、一度『俺』に貸した事がある。

四尾の槍“虎退治”。

尻尾を槍のように突いて、相手を攻撃する。

五尾の刃“鬼殺し”。

刃のような切れ味を有する五本の尻尾を振り、相手を細切れにする。

一ノ怪・京の妖（後書き）

前作と同じく、質問受け付けてます。
よろしければ、どうぞ。

二ノ怪：冬の夜（前書き）

今回、最後の方がヤ・バ・いです。
次回から真面目にいくので、ご勘弁を。

二ノ怪：冬の夜

クリスマス・イヴ。

仲むつまじい恋人が、愛を囁き合う聖夜である。しかし、クリスマス・イヴをそんな素敵な日と思えるのは、あくまで恋人が居る者だけである事を忘れてはいけない。

モテない男子にとって、クリスマス・イヴなんて日はいらないと考えている者が大半だと思われる。もうね、いつそ燃えて灰になれっつて感じですよ。街中で堂々とイチャつくバカップルなんて見た日にゃあ、普段の三割増しの憎悪が芽生えるっつてもんである。いくら心の中で、「クリスマス・イヴなんて廃止！ 廃止！ 廃止！ 廃止！」なんて訴えても誰かに届く訳もなく、勿論願いが叶う訳も無い。

モテない男は、毎年クリスマス・イヴと言う苦い日を味わう悲しい定めなのだ。

この負のスパイラルから脱出する方法は、二つしかない。

一つ目は、もう人生と言うリングでボロボロになって、今にも倒れそうな自分にタオルをブン投げる事だ。

それが嫌なら、二つ目 何とかして恋人を作ろう。そうすれば、毎年辛く苦しかったクリスマス・イヴがキャットホーな日に早変わりである。

そして、今宵のクリスマス・イヴ。彼女居ない歴を二十年以上更新してきた、ある男が、奇跡的に出来た彼女と一緒に、初めて桃色のクリスマス・イヴを過ごす話である。

陽は沈んでいき、空は夕焼けから夜に変わろうとしていた。街には沢山のイルミネーションが飾られていて、夜になれば輝きを増すだろう。

駅の入り口に居るのは、『俺』と羽衣狐である。京都では無く、別の街に来ている。クリスマス・イヴと言うイベントがあると耳にした羽衣狐が、京都を出た他の街で時間を過ごそうと言ってきたのだ。断る理由など無いので、『俺』も素直についてきた。

今日も羽衣狐は、黒一色のセーラー服姿だ。黒一色の服装など珍しくないが、やはり羽衣狐の存在感は大きく、周囲の人達の視線が集まるのに時間はかからなかった。あつという間に注目を集めた羽衣狐は、もうその場の中心になっているようだった。

ソレに引き換え、隣に立っている『俺』は相変わらず地味な格好をしていた。クリスマス・イヴだから、それなりに決めようと言う考えが無かったのだ。ぶっちゃけ、服装なんてどうでもよくね？と服装にルーズな男なのだ。

当然、周りの目から二人は全く釣り合っておらず、一緒に居る事を怪訝に思う人が殆どだった。

「では行くぞ」

「は、はい」

そんな周囲の視線を、あまり気にしないようにして、『俺』は羽衣狐の横を歩き出す。

イルミネーションが飾られ、クリスマス・イブ一色となった街中を羽衣狐と並んで歩く『俺』は、内心ドキドキしていた。今まで何度かデートをしてきたが、クリスマス・イブを彼女と過ごした経験が無いので、緊張しているのだ。街中のイブ雰囲気の影響か、普通のデートとは違う空気に戸惑ってしまう。

ヤベー、何かスゲー緊張してきた……！アレ？ クリスマス・イブって、何するんだっけ？

緊張し過ぎて、軽くパニックっていた。

今日いきなりクリスマス・イブと一緒に過ごそうと羽衣狐から誘われたので、普段のデートのようにプランを立てていなかった。

大丈夫なの？ 俺、今回何にも考えてないけど、大丈夫なのか？

不安を募らせる俺の隣を歩く羽衣狐は、いつも通りの様子だ。しばらく街中を歩くと、羽衣狐は一つの店の前で立ち止まった。

「まずは、ココに寄るぞ」

ハア、と頷いて入ったのは、アクセサリーショップだった。店内は明るく、ピアスやら指輪やらネックレス等、色んなアクセサリーが明かりを受けてきらびやかに展示されている。

アクセサリーに興味が無い『俺』も、何となく手に取って見てみる。形も様々で、同じ種類のアクセサリーでも値段が全然違う。安い物で1500円位で、高いと軽く10000円を超える。

しかし、と『俺』は思った。羽衣狐が、こういう店に来るのは意外だ。普通の女子と違って、アクセサリーには興味が無いと思っていた。

意外に思っていると、

「人間、妾はコレが欲しいぞ」

「どれですか？」

羽衣狐に呼ばれ、『俺』は商品に目を向けた。

げっ……！

値札を見て、『俺』は驚愕して目を見開く。

なんと、値札に記されてる値段は、二万五千円だった。

買えるかアアアアアアアア！

金額を睨みながら『俺』は、内心にシャウトした。財布の中にある全財産は、僅か三千円なのだ。今までのデートで少しずつ消費していき、オマケに働いてないので増える事は無く、所持金は三千と僅かな小銭だけと言う経済状況だった。

困った笑顔で金額と向かい合ったまま、『俺』は固まる。いくら羽衣狐の願いでも、コレは金銭的に無理がある。迷った末、勇気を振り絞って『俺』は断る事にした。

「すみません。コレはちよつと……無理です」

「まあ、お前の財布の中身では無理であるうな」

「知ってんじゃない！ 俺の破産的経済状況知ってんじゃないっすか！」

声を上げる『俺』を見て、羽衣狐がクスツと笑った。

や、やられた〜！ そうだよ……俺と付き合ってるこの人が、俺の経済状況を知らない訳無いじゃん。今のは、俺がアクセサリーを買えないのを知ってて、あえて高いモンをねだってきたんだ。俺の困った反応を楽しむ為に！

隣で笑う女狐の隠された目的に気付き、『俺』は悔しそうに歯を食いしばった。

「ココには冷やかしと時間調整で入っただけじゃ。別にお前に高い買い物など求めておらん」

「ですよ〜」

店内で冷やかしなんて言う羽衣狐の大胆さに、『俺』は苦笑いを浮かべる。

その時、ふと気になる言葉を引っ掛かり、店の外に出て尋ねた。

「あの、時間調整って？」

「実は、この近くのレストランを予約しててな。今のは、それまでの時間潰しだ」

レ、レストランだと!?

何回もデートを重ねてきたが、レストランでの食事はした事が無い。金の無い『俺』がデートプランを立ててきたので、食事は全てマックやファミレスで済ませている。

そして連れて来られたのは、いかにも高級感溢れる高級レストランだった。綺麗な装飾が施されており、天井にはシャンデリアがあり、店内を豪華な感じで照らしている。庶民の『俺』だけでは、決して足を踏み入れ無そうな店である。

店の雰囲気緊張してる『俺』を入口に置いて、羽衣狐が店員さんと話をしている。それから店員さんに案内され、二人は席に着いた。

「妾も初めて来たのだが、なかなか良い店じゃのう」

「そ、そうっすね」

羽衣狐に答えた『俺』は、店内を見回した。

バリバリ高級感漂うレストランの中には、オシャレをしたカップルの姿が何組も見える。と言うか、カップルしか居ない。皆オシャレをしているのに、庶民的でラフな格好をしている自分が酷く場違いであると悟って、居辛くなる。

「こんな事なら、もっとちゃんとした服を着てくるんだった、と『俺』は心中で後悔するのだった。

そんな『俺』とは対照的に、羽衣狐はまるで緊張した様子は無い。それどころか、セーラー服で高級レストランに居ると言うのに、まるで違和感が無い。高貴な雰囲気溢れる羽衣狐は、セーラー服でも自然と高級空間に溶け込んでいた。いや、一体化してると言っても良い。

「さて、何を頼む？」

「え？ えっと……そうですね……」

店の高級感に圧されて、『俺』は難しい顔でメニューを見る。高級レストランで二人つきりで食事なんて、クリスマス・イヴらしいシチュエーションじゃないかと思った。場の独特の雰囲気、『俺』は完全にあがっていた。もう何を頼んだらいいのか分からなくなって、結局全部、羽衣狐に選んでもらった。緊張で少しぎこちない動きで、『俺』は羽衣狐と食事をした。すると、羽衣狐が笑いを零した。

「ふふ。緊張などして、可愛い奴じゃ。こういう場所は初めてのようだな」

「え？ ええ、まあ……」と食事の手を止めて答える『俺』。
「なに、周りなど気にせず二人で食事を楽しもうではないか」

ニコツと笑う羽衣狐を見て、『俺』は少し気が楽になった。彼女の笑顔を見ると、何だか安心する時がある。強くて綺麗で、安心感を抱かされる要素があるのだ。

*

食事を終えて、外に出ると既に暗くなっていた。夕方の時よりも、街中に飾られたイルミネーションは明るく綺麗だった。高級レストランを出た二人は、再び街中を歩いていた。

「それで、次は何処に行くんですか？」
「着いてからのお楽しみだ」

行き先を尋ねるが、羽衣狐は教えてくれなかった。

まあ、この答えは予想出来ていた。面白い事が好きな羽衣狐の事だから、行き先は黙っていて、着いたら驚かせようとか、そんな魂胆だろう。

納得はするも、やはり気になる『俺』は考えた。アクセサリーシヨップ、高級レストランと続いて次に行く場所は、何処なのか？

ココまでは、割りと普通の人間と変わらない思考だが、相手が羽衣狐だと何を選ぶか解らない。

うーん、と思考を働かせていると、不意に手に冷たい感触がした。考えを中断した『俺』が、見下ろすと手を握られていた。

相手は勿論、羽衣狐だ。こちらを少し見上げ、笑みを向けてくる。

「恋人とは、このように手を繋ぐものなのだろう？」

「ま、まあ、はい」

不意を衝かれた感じで、『俺』は恥ずかしくて視線をそらした。実は、デートは何回もしてきたが、こうして手を繋いで歩くのは、今宵が初めてなのだ。

羽衣狐からの恋人らしい行為に戸惑い、恥ずかしくなったが、『俺』も手を握り返した。冷酷な大妖怪だからか、彼女の手は少し冷たいが悪くない。寧ろ、心地好い感触がする。

夜になると気温が下がり、吐く息が白くなるほどの寒さだった。

『俺』も寒さで、空いてる手をポケットにしまう。隣の羽衣狐の様子を、チラツとかがう。自分や周りの人達と同じように白い息こそ吐くが、まるで寒がってる様子は無い。流石は、京の大妖怪だ。しばらく歩いて、羽衣狐が一つの建物を見上げた。

「最後はココに入るぞ」

「えっ!？」

驚く『俺』は、目を見開いて固まった。

何故なら、羽衣狐が最後に選んだ場所は、ラブホだったのだ。

マジっすか……！？

顔をひくつかせ、『俺』は動揺する。途中まで普通のデートコースだったが、最後にとんでもないサプライズが待っていた。

動揺する『俺』の手を引っ張り、羽衣狐はラブホの中に入っていた。

*

ラブホに入った『俺』は、部屋のベッドに腰掛けていた。

大きなダブルベッドに腰を落としてる彼の後ろから、ジャージと言うシャワーの音が聞こえてくる。連れの羽衣狐が、シャワールームで体を流しているのだ。

マジで……？

待たされてる『俺』は、現状が信じられないと言った顔をしていた。視線を横に向けると、羽衣狐が脱いだ黒のセーラー服や下着が、椅子にかかっている。ラブホと言う初めての異空間に居るせいかな、普段以上にムラムラしてきた。

マジなんだな……。つか、羽衣狐ってまだ学生だろ？ 中身は大人でも、身体は子供の域なんだしさ……。あれ……？ 俺、何か大事な事忘れてない？

異空間で落ち着かず、思考が鈍った頭で思い出そうとするが、全然出てこない。

その時、背後からドアが開く音が聞こえた。

「やはりシャワーを浴びるとサッパリするのう。身体も暖まる」

シャワーを終えた羽衣狐が、戻ってきた。

タオルで濡れた黒髪を拭く羽衣狐は、あられもないバスローブ姿だった。そのまま固まってる『俺』の横を通りすぎ、正面に移動した。

「待たせたのう」

「い、いえ……」

ヤッベー、と真つ赤な顔で『俺』は思った。

羽衣狐の裸は見慣れてるハズなのに、妙に緊張してきたのだ。それに、普段は黒しか纏わない羽衣狐が、白いバスローブを羽織っているので、新鮮な感じだった。

でも、やっぱり黒が似合うな、と思ったのは落ち着いてからである。

「今度はお前が浴びてこい。サツパリして気持ちよいぞ」

「は、はい」

『俺』は逃げるように、シャワールームに入った。

ラブホに来てから、何だか変な気分になっている。初めてのラブホに、『俺』は脅威を感じた。

羽衣狐が使ったシャワールームを何気に堪能して、『俺』も着替えて出た。バスローブは何か恥ずかしいので、着てきた普段着の方だ。

「さて、互いにシャワーを済ませたところで、本番といくかのう」

言つや否や、羽衣狐は羽織っていたバスローブを脱いだ。

羽衣狐が白い素肌を晒した瞬間、何故か『俺』は背筋をピンツと伸ばした。緊張のせいで、完全に固くなっていた。

そんな『俺』の様子を可笑しく笑い、羽衣狐が歩み寄ってきた。

ドキドキと心臓が張り裂けそうな想いで、『俺』は突っ立って待つ。

目の前で止まると、羽衣狐は顔を近付け、キスをしてきた。手を『俺』の頭に回して、離さないように掴んでる。当然、互いの体は密着して、羽衣狐の柔らかい膨らみを服越しに感じる。

羽衣狐……舌使いが上手すぎる……！

羽衣狐の舌は、『俺』の舌に絡んでヌリヌリと舐めるように責めてくる。舌の根元を舐めたり、敏感な部分を的確に舐めたりと刺激を与えてくるのだ。

責められ続ける『俺』は、興奮が高まり、いつの間にか緊張が薄れ、羽衣狐を抱き返した。

何秒かして、二人は唇を離した。

「緊張は解れたようじゃのう」

「どうやら今のは、『俺』の緊張を解すキスだったようだ。」

「人間……」

羽衣狐が、『俺』の胸に顔を埋めた。

「今日は、楽しかったか？」

「は、はい。楽しかったです」

『俺』はすぐに答えた。

たまに弄られたり、慣れない高級レストランに入ったが、ソレも全部含めて楽しかった。相手が羽衣狐だから、楽しめたのだ。

「そっか。妾もだ」

胸に顔を埋めたまま、羽衣狐は続けた。

「別に妾は、アクセサリーなる物や高級な料理など要らぬ。ただ、傍にお前が居てくれれば、それで良い……。妾はそれだけで満足……幸せじゃ……！」

「俺も、羽衣狐と一緒に、その……幸せです」

言っつて恥ずかしくなったが、嘘ではない。本当である事を証明するように、羽衣狐を力一杯抱きしめた。すると羽衣狐が、顔を上げた。

「では、本番の本番といくかのう」

「ほ、本番の本番？」

「このような場所に来たら、やる事は一つしかなかるう？」

ああ、まあ、そうだなと『俺』は思った。

ココはラブホなのだから、そういう事をするのは当然だ。

「そ、そうっすね。じゃあ、山吹さんから出て……」

「何を言っている？ このままでゆくぞ」

「え……？」

脳が言ってる意味を理解出来ず、『俺』は呆然となる。

ややあつて、『俺』は苦笑いで口を開いた。

「あの……このままっつて言っつのは……？」

「山吹の身体のままやる、と言っつ意味だ」

「いや、待てエエエエエエ！」

ホテルの中だと言っつのも構わず、『俺』は全力でシャウトした。

「いやいやいや、何言ってるんですか貴女!? そんなのダメに決まってるでしょ!」

「心配いらん。ゴムとやらは、ちゃんと用意してあるぞ」

「そういう問題じゃねーんだよ! 山吹さんの身体で、その……やるのが問題だって言ってるんです!」

動揺して声を上げた事で、息が荒くなる。山吹の意識は生きてるから、今の会話も聞かれてると思うと、物凄く恥ずかしくなってきた。

それもこれも、全部羽衣狐のせいだ。

羽衣狐は、いつも『俺』の斜め上をいくのだ。

『俺』の訴えを聞いても、羽衣狐は全く動じず、笑みも崩れない。

「ああ、そちらの方も心配はいらんど。山吹も、相手がお前なら構わないと言っていたからな」

「マジっすか!?!」

目を丸くして、『俺』は驚きの声を上げた。

いや、いくら俺が恩人だとしても、ソレはダメでしょう!

もっと自分の身体を大切にしましょうよ!

心中で『俺』が叫ぶと、羽衣狐は続けてとんでもない事を言った。

「妾の身体は妾のモノ、山吹の身体も妾のものじゃ!」

「最低のジャイアニズムっすね!」

『俺』が叫んだ直後、羽衣狐の背後から何かが飛んできた。飛来してきた物は、『俺』の手足を掴んで、近くのダブルベッドに倒した。

「うう……何、があ!？」

見ると、四本の金色の尻尾が『俺』の手足を縛って拘束していた。手足の自由を奪われた『俺』は、ベッドに縛り付けられる形になった。

尻尾の先には、腕組みをして妖しい笑みを浮かべる羽衣狐が居た。

「反論は許さん」

「あの……拒否権は……?」

「ある訳なかるう」

「ですよー」。

この瞬間、『俺』の逃げ場は完全に失われた。

「お前も、この身体でやってみたいと思っていたのだから?」

「う……!」

否定出来なかった。

山吹の姿で出会った羽衣狐に一目惚れしたのだから、否定出来ない。

羽衣狐はベッドの上に乗し、拘束して寝かされてる『俺』の前に立った。

妖艶な笑みで『俺』を見下ろし、羽衣狐は片足を動かした。

「お前も、心の底ではこういう事を望んでいたのだから? 変態」

「うあっ!」

『俺』の体が、ビクツと震えた。

羽衣狐の素足が、『俺』の股間を踏んでいるのだ。ズボンの上から、素足で上下に『息子さん』を擦って弄っている。

「くう……ああ、あつ……！」

羽衣狐のイジメを受け、『俺』は喘ぎ声を出して悶える。

ヤ、ヤバい……！ き、気持ち良い……！

調教されている『俺』は、しっかり感じていた。

感じてる『俺』を見下ろして、羽衣狐は見下すような目で言った。

「ふふ……変態のお前には、お似合いの姿ではないか」

すると羽衣狐は、『俺』の股間から足をどかした。

息を荒げ、興奮で真っ赤になった顔で『俺』は、羽衣狐を見上げた。

「は、羽衣狐……？ 何で、やめるんですか？」

「何だ？ もっとやってほしいのか？ そういう時は、何と云うのだ？」

羽衣狐が意地悪く言つと、『俺』は恥ずかしそうに顔を逸らし、小さく呟いた。

「い……イジメて下さ……」

「声が小さくて聞こえん」

「イジメて下さい！」

恥も何もかも捨てて、『俺』は大きな声で求めた。

彼の言葉に、羽衣狐は満足そうに笑顔を浮かべた。

「ふふ、素直な子は好きじゃぞ」

要望通り再び足を『俺』の股間に置いた時、思い出したように言った。

「ちなみに、今のお前の叫びも山吹に聞かれておるからの」「あああああああああああああああああああああ！」

羽衣狐の残酷な追い討ちに、『俺』は苦悩して叫ぶしかなかった。結局、この日は『合体』までやりました。

拜啓、お父さん、お母さん、ついでに弟よ。
幸せなクリスマス・イブと引き換えに、僕は人間ひととして大事な何かを失いました。

二ノ怪：冬の夜（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： 時光 火流那さんからの質問。

『質問です、羽衣狐の武器？的な物は原作には全部は出てきませんでしたか？』

赤夜叉「アイディアが出れば、出していきたいと思ってます」

投稿者： 白い奇術師さんのシロさんからの質問。

『質問です、クリスマスというイベントですが名無しさんは羽衣狐さんにクリスマスプレゼントを買ってあげるんですか？後これ僕からのプレゼントの超強力殺虫剤どう使うかはご自由に。しかし…若いつてのはいいね〜。』

俺「貧乏人の俺には、プレゼントなんて物を買う金が無いんです…」

狂骨「働きなさいよ、クズ」

俺「うう……。あつ、殺虫剤は一応いただきます。あのアホに効くか分かりませんが……」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

三ノ怪：悪魔の誘い（前書き）

「お前で良い。余興として、妾を楽しませるがよい……！」

あれから時は流れ

「どうすればいい……？ どうすれば……？」

「頼むから早くしてくれ！ 時間が無いんだ！」

「約束します……！ 今度こそ負けないっ……！」

おかえり 負け組諸君

『俺』 羽衣狐 地獄堕ち決定

蘇りを果たしたければ

地獄のゲームをクリアせよ

「敗者は墮ちるだけだ……！ 地の底の底にな！」

「あの番犬は俺の自信作だ。アレの手にかかれば、何人たりとも外には出さないっ……！」

「そうですね……」

敵は地獄の支配者・閻魔大王

「アンタ、新入りかい？」

「貴様は……！？」

「アイツも、ココに堕ちてるのか……？」

堕ちた負け組が挑む

地獄脱出ゲーム

「コレが地上に帰れる最後のチャンスだ……」

「泣いても笑っても、コレが最後の一戦だった……」

「では、ゆくぞ」

「始めよう……！」

新たな頭脳バトル

立ち塞がる強敵難敵

地獄からの使者『一鬼』

「お前達の実力、器量を量る本番はこの後だ……」

「発想を変えよう！」

因縁深き大敵『山本五郎左衛門』

「あんのガキヤ……よくもワシの“目”を潰してくれたなあ……！」
「アイツだけは、俺の手で倒したいんす……！」

地獄の番犬^{モンスター}『ケルベロス』

「戻ってくれ、土蜘蛛！」

「闘いは、力が強いだけじゃ決まらない。ソレを証明してやる……！」

人生を

その手で取り戻せ！

アヤカシ 地獄録篇

三ノ怪：悪魔の誘い

大学を卒業した後も就職せず、自堕落な生活を送り、家を追い出された平凡な男が一人居た。

その男は、ある日、偶然訪れた京都の地で一人の少女と出会う。黒を身に纏った、謎の少女だった。黒の少女の正体は、この世を闇の世界に造り変えようと企む古の大妖怪・羽衣狐^{いにしえ}。

彼女との出会いをキツカケに、男は非現実的世界に誘われる。陰陽師の使命、奴良組の因縁、京妖怪の宿願、京都の地で、様々な思惑が交錯する。

そして、幾多の死地を潜り抜け、ついに男は出会う。

闇の世界の魔王になると、地獄の底より甦った伝説の主・安倍晴明！

だが、しかし、晴明のあまりに強大な力の前に、男は闘わずして敗れた。男は、魔王にならんとする晴明の力を、思い知らされた。

こうして、京都での闘いは幕を閉じた。敗北と言う苦い結果を残して……！

そして、時は流れ　。

*

自分の部屋に引きこもり、『俺』は物凄く落ち込んでいた。

今日は、クリスマス・イヴの翌日のクリスマスだ。世間は賑わっているが、『俺』の気持ちは穏やかではなかった。

原因は、昨夜のラブホでの一件だ。羽衣狐の一方的な責めに屈し

て、勢いで『合体』までしてしまった。その時は、これ以上ない位に気持ち良くて最高の一時だった。しかし、時間が経つにつれて冷静になっていき、自分がとんでもない事をした事に気付く。経緯はどうあれ、リクオの親父さんの元妻とやってしまったのだ。羽衣狐は、山吹もしてもいいような事を言っていたが、直接本人に確認した訳ではないので、真偽は曖昧である。

羽衣狐が用意したゴムを使って、最悪の事態は回避出来たとはいえ、やった事実は揺るがない。

一時のテンションに身を任せるとロクな事にならない、と言うのは本当のようだ。

現に『俺』は、イヴの明けた今までずっと苦悩していた。悩み疲れて寝た事は寝たが、起きたら昨夜の出来事を思い出してまた悩むと言う負のロンド状態である。

やっちまった。山吹さん姿の羽衣狐に会うのが、超気まずいんですけど……。

身体の主である山吹の意識はあるので、昨夜の事は全部知っている。だから、彼女に会うのが物凄く気まずく恐いのだ。

謝るしかないよな……。

諦めたように溜め息をつき、『俺』は重い腰を上げた。

謝って許してくれるとは思えないが、いつまでもグジグジと引き籠もっているのも限界がある。この息苦しさから逃れる為には、とりあえず謝る事だ。そう、結局は自分が楽になりたいが為の行為なのだ。

ああ、何て嫌な奴なんだろう俺って、と思うのだった。
自己嫌悪を抱きながら扉を開くと、

「あ

丁度、廊下を歩いていた羽衣狐と顔を合わせた。
思わず『俺』は、反射的に扉を閉めてしまった。

無理無理無理無理！ やっぱ無理！ メチャクチャ気まずいわアアアアア！

扉を背にいて、『俺』は内心にシャウトした。いざ気まずい相手と顔を合わせると、逃げてしまうのが臆病な人間と言うモノである。

「あ、あの、私です！ 山吹乙女です！」

ええええええええええええ！？ まさかの本人登場！？ 余計に会い辛いわアアアアアアアアアアア！

扉の向こうから山吹が名乗って、またも『俺』はシャウトした。羽衣狐でさえ会い辛いのに、ココで本人登場はきつ過ぎる。まだ心の準備も整っていないので、顔を合わせられない。

臆病な俺は、面と向かって謝れないので、扉越しに土下座をした。

「あの……昨日の夜は、すいませんでした！ その、何と言いますか……こんな事言ったら失礼なんですけど、羽衣狐に上手く言いくるめられた感じで、妙にテンションが上がって……いや、言い訳しても勿論八割程俺が悪いですから！ 非は僕にあります！ 本当にすいませんでした！」

他の誰かに聞かれたらとか、そんな心配をする余裕など無かった。ただ、自分と山吹の為に謝らずにはいられなかった。自分の愚行で、山吹の身体を穢してしまったのは事実なのだから。ちなみに、残りの二割は羽衣狐である。

勢いに任せる『俺』の謝罪は、エスカレートしていった。

「本当にすいませんでした！ あの、なんでしたら、死んでお詫びを……！」

「い、いえ！ そんな事しないで下さい！ それに、貴方が謝る事は無いんですよ！」

「え……？」

今まさに窓から身投げしようとして、窓の手すりに足をかけた『俺』は動きを止めた。

「あの……大事な話があるので、外に出ませんか？」

あくまで山吹は、優しく穏やかに声をかけるのだった。

*

屋敷を出た『俺』と山吹は、人気の無い小さな児童公園に居た。

まだ昼間だと言うのに、遊んでる子供一人の姿も無い寂しい場所だ。だが、二人っきりで話がしたい山吹にとっては、寧ろ都合だった。

山吹は、羽衣狐が普段着ている黒のセーラー服姿だった。羽衣狐だけでなく、山吹も今の恰好を気に入っているようだ。

誰も居ない静かな公園の真ん中で、山吹と『俺』は向かい合っている。

正面から向かい合う『俺』は、内心ドキドキしていた。今まで何度も思ってきたが、やはり山吹は羽衣狐とは雰囲気が別人である。相手を威圧するような冷たい空気が無く、ただおしとやかで温かい雰囲気的女性だった。

妙な緊張感もあって、『俺』の手の平は汗でびしょ濡れになっていた。先に沈黙を破ったのは、山吹だった。

「実は、貴方が謝る事は無いんです。いえ、寧ろ謝らなければいけ

ないのは、私達の方です」

「どういう事なのか解らず、『俺』は怪訝そうに片眉を上げた。すると、山吹は衝撃の事実を明かした。

「あの式條城での戦い以降、私の身体の中で、私と羽衣狐は一体化していったのです」

「え……？」

言ってる意味をすぐに理解出来ず、思わず顔が苦笑いになる。

山吹は続ける。

「私が同じ妖あやかしであるからか本当のところは解りませんが、完全に私の中で同化したようで、もう二人に分かれる事が出来なくなつたのです。羽衣狐は、人間の身体に憑依して転生を繰り返してきました。ですが、今まで妖に憑依した経験がありませんでした。なので、このような現象が起こる事も予想もしてなかつたのです」

「え……えええええ！？」

目を見開いて声を上げ、『俺』は動揺を露にする。

「コレが事実なら、『俺』にとつてまさにアンビリーバボーな事である。」

「ちよつ……ちよつと待って下さいよ！ え？ 同化つて事は、つまり、その……一心同体つて事ですか？」

「はい」

「いや、はいつて……聞いてないですよ、そんなの！？」
「じめんなさい」

山吹は頭を下げ、『俺』に謝罪した。

「本当なら、異変に気付いた時に話すつもりだったのですが、羽衣狐が『しばらく黙っていて、後で驚かせようぞ』と口止めされまして……」

「あんの女狐え……！」

黙っていた理由を聞いた『俺』は、怒りに拳を震わせた。

羽衣狐の悪戯心のせいで、どれだけ深く悩み苦しんだ事かと腹の底から怒りが湧き起こってくる。

「その羽衣狐は、どうしてるんですか？」

「今は私の中で眠っています。昨夜は疲れた、と」

「ぶっ殺っ！」

思わず『俺』は、空に向かって物騒な言葉を叫んだ。

ひとがマジで苦悩してる時に、よくもグツスリと眠れるものだな。羽衣狐の大物っぷりに、『俺』は激しく怒りを燃え上がらせる。

そんな『俺』に、山吹はもう一度頭を下げた。

「本当にすいません。私達が黙っていたせいで、貴方に苦しい思いをさせてしまいました」

「いやいやいや、山吹さんが謝らないで下さい！ 山吹さんは全然悪くないです！ 悪いのは、羽衣狐です！」

あの女狐！ マジで一回ヤキ入れてやる！

その時、ふと『俺』は引っ掛かりを憶えた。羽衣狐と山吹が、一心同体になったのは解った。

しかし、だからと言って『俺』が謝る必要が無い理由にはならないのではないだろうか。

疑問を抱いた『俺』は、本人に訊いてみる事にした。

「あの、お二人の今の状態は解りました。でも、それでも僕が謝らない理由にはならないと思うんですけど……。だって、山吹さんの意思も確認しないで、その……行為に走ったんですから……」

後半は言葉を選びながら、『俺』は視線を逸らした。

もう胸中は、罪悪感やら自己嫌悪やらで一杯でモヤモヤしていた。

『俺』の疑問に対し、山吹は薄らと頬を赤らめて答えた。

「羽衣狐が、羨ましかったのです」

「う、羨ましかった？」

はい、と一つ頷き、山吹は続けた。

「妖の身でありながら、人間ひとから沢山愛されてる羽衣狐を羨ましく思ってたんです。私も人間が好きですから。だから、私も一緒に感じたかったんです。温かい人間の温もりを……。あの夜、羽衣狐が貴方なら構わないと私が言っていた、と言ってましたよね？ アレは、羽衣狐の嘘じゃなくて私の本心なんですよ？ 久しく忘れていました……誰かに抱だかれ、包つつまれる温かみと喜びを。とても心地良かったです」

最後に山吹は、嬉しそうな笑顔を浮かべた。

彼女の笑顔を見た瞬間、『俺』は心臓を刺されたような痛みに襲われた。穢れ無き山吹の笑顔に、胸を痛め、直視出来ずに顔を逸らしてしまう。

ま、眩し過ぎる……。！ 俺みたいな人間のクズには、山吹さんの笑顔は眩し過ぎる！ って言うか、山吹さん俺の汚い部分知らないで言ってるんじゃないの？ うわっ、何か罪悪感が……。！

ダメ人間を自負する『俺』にとって、今の山吹の言葉は心に突き

刺さる槍のようだった。

でも、まあ、山吹が昨夜の一件を怒っていないと分かっただけでも、大分心の不安は楽になった。

まあいいか、と心中でまとめた時だった。

「危ない！」

突然、山吹が声を上げながら『俺』を庇うように抱き、そのまま地面に倒れる。咄嗟に山吹は体を捻り、『俺』が地面に衝突しないように庇った。

『俺』はすぐに体を起こして、自分を庇った山吹に顔を向けた。

「や、山吹さん！？ 大丈夫ですか！？」

「だ、大丈夫よ」

笑顔で答える山吹だが、腕にかすり傷を負っていた。傷口から血が出て、黒のセーラー服をより一層濃くしていく。

腕の傷を見て、『俺』は表情を曇らせた。

「す、すいません。俺なんかの為に……」

「別に貴方のせいじゃないし、かすり傷だから平気よ。それよりも……」

励ますように言うと、山吹は後ろを向いた。

つられるように、『俺』も視線を追った。

すると、ソコには鬼が居た。全身が青白く、額に二本の角を生やし、片手には黒光りしてる大きな金棒を持っている。口を開いて鋭い牙を覗かせ、息を吐く。

「何だ、コイツ……？」

突然襲撃してきた鬼を見て、『俺』は声と体を震わせた。
初めて羽衣狐に会った時、余興として配下の鬼の相手をさせられた事があった。だが、目の前に居る鬼は、その時の鬼とは迫力が違った。禍々しさが強く、殺気に満ちている。

「グオオオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げ、鬼が金棒を振り上げて再び襲い掛かってきた。

二人を潰そうと、金棒を振り下ろし、『俺』が目をキツく閉じた時だった。

ボンツ、と何かが爆ぜる音が耳に入ってきた。恐る恐る目を開け、『俺』は驚愕仰天した。目の前に、自分達を襲おうとしていた鬼が立っていた。しかも、頭を失くした状態だ。頭部を失くした首から、ビュビュツと黒い血が噴出している。残された身体はグラグラと揺れ、やがて支えを失くしたように背中から地面に倒れた。

「妾^{わが}とこ奴を殺そうとは、身の程を知れ……！」

不意に、傍から聞き覚えのある冷たい声が降ってきた。

顔を上げると、山吹では無く、金色の尻尾を出した羽衣狐が立っていた。

「羽衣狐！」見た瞬間に『俺』は弾んだ声を上げ、涙目になる。

「無事か、人間？」

「は、はい！ありがとうございます！」

そうか、と『俺』の無事を確認して羽衣狐はニコツと笑った。

しかし、その笑みもすぐに消えた。

公園に、新たな鬼が現れたのだ。一匹二匹ではなく、十数体の鬼

が瞬く間に公園内に集まり、羽衣狐と『俺』を囲んだ。皆、金棒やら斧やらを持って武装している。

完全包围された状況でも、羽衣狐は動じずに居た。

「こ奴等、京の妖で無ければ奴良組の者でも無いな」

「じゃ、じゃあ何なんですか？」

「妾にも解らぬが、敵である事は確かだ」

余裕の態度を見せる羽衣狐に、新たに二体の鬼が襲い掛かる。

しかし、鬼の攻撃が届く事は無かった。

どこからともなく大きな蛇が地を這って現れ、一体の鬼の顔目掛けて跳び、両の目玉を食いつぶした。そして、もう一体は背中から槍のような得物で貫かれた。口からは血を吐き、得物を引き抜かれた傷口からも大量の出血をして地面に伏した。

「汚らわしい鬼が、羽衣狐様に近寄るな！」

「マリア様の前に平伏すがいい、下等な鬼共よ……！」

「狂骨！ しょうけらさん！」

公園に現れ、鬼を不意打ちで返り討ちにしたのは、狂骨としょうけらだった。

「羽衣狐様〜！ ご無事ですか〜！？」

「うおおおおおお！？ がしゃどくろまで来たアアアアアアアア
!?!」

木々をバキバキ倒しながらやってきたがしゃどくろを見上げ、『俺』は驚きの声を上げた。

しかし、途中から乱入してきた狂骨達や巨体のがしゃどくろを前にしても、青白い鬼の軍は少しも気圧された様子は無い。戦意も禍

々しい殺気も失っていなかった。

全く怯まない鬼の軍を見て、羽衣狐は口元を歪めた。

「命知らずの愚か者共め……！ 妾に牙を向けた事を後悔しながら、あの世に逝くがいいっ！」

*

ココは、羽衣狐達が鬼と対峙している公園から少し離れた、ビル
の屋上。

風が吹く人気の無い屋上に、一人の男が佇んでいた。肩まで届く
黒髪は綺麗にセットされ、端正な顔立ちで不敵な笑みを浮かべてい
る。黒のスーツをキツチリと着こなし、若者とは思えない威厳のよ
うな風格を漂わせている。

両軍の戦闘が始まった児童公園を見下ろし、男は一人口を開く。

「羽衣狐の配下の妖怪か……。フンツ、どうでもいいあんな奴等は
……それよりもこっちだ」

僅かに目を動かし、視線を羽衣狐と『俺』に向けた。

「大王様が目を付けられた二人……！ フフフ……中鬼こんのはまだ序の
口だ……お前達の実力、器量を量る本番はこの後だ……。特に人間
の方……見せてもらおうか……！ 逆転の気質を、な……フフフフ
フ！」

「武條城での戦いを終えた『俺』を、再び悪魔が誘う。
第一試練 『蟻地獄』！」

三ノ怪：悪魔の誘い（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ミスターサーさんの姫さんからの質問。

『まず主人公の事を色々否定してから質問するわぁ…
働かないとダメじゃないの…』

てな訳で質問、就活してる？

バイトぐらいしてるわよねえ？』

俺「……してないです。バイトもしてません」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

四ノ怪：砂の獄

今、児童公園はとんでもない事になっていた。

普段なら無邪気な子供たちが戯れる場である児童公園が、とんでもなくバイオレンスな状況になっていた。いや、バイオレンスを通り越した惨劇が起こっている。

公園で話をしていた山吹と『俺』を、謎の鬼が襲撃した。追撃を仕掛けようとした鬼だったが、山吹の中の羽衣狐が目覚めて返り討ちに遭ってしまう。しかし、安心したのも束の間、周辺に潜んでいたと思われる鬼の群れが公園を占拠して二人を取り囲む。その時、ひそかに二人の後をストーカーのように尾行していた狂骨達が乱入して、羽衣狐一派と鬼軍団が衝突した。

しかし、まー強いです。

羽衣狐一派は、メチャクチャ強いです。

数では鬼の群れが上回っていたが、個々の戦闘力は羽衣狐一派が圧倒的に上回っていて、戦況はほぼ一方的な展開となっていた。羽衣狐が金色の尻尾を一振りすれば、数体の鬼の頭やら腕やらがゴミクズのように宙を舞い、狂骨が蛇を走らせれば鬼の目玉は喰われ、身体の内から喰い破られる者もあり、しょうけらが光れば相手は視界を封じられ、その隙にデカイ十字架型の武器で腹等を容赦なくブツ刺され、がしゃどくろが相手を喰らおうと大きな口を開けばすり抜けられ、何気に参戦していた白蔵主が大きな棒を振り回せば鬼の頭は爆弾のように破裂した。鬼神の如き強さで、羽衣狐一派は鬼の屍を公園に作っていった。

目の前の凄惨な光景に、一人戦えない『俺』は、吐き気を我慢出来ずに胃の中のモノを地面にぶちまけた。

き、気持ち悪い……！ 何で平和な公園で、こんな酷え場面見なきゃいけないんだよ！？ 俺が何をした？ 何か悪い事しましたか！？

疑問を抱く『俺』は、顔を伏して目の前の現実から目を逸らしていた。

やがて、肉を潰し骨を砕く耳障りな音が止み、『俺』は恐る恐る顔を上げた。ソコには、死屍累々と地面に倒れている鬼の屍があった。絵にすれば、モザイク必至の光景である。胃の中のモノを吐き尽くした『俺』は、もはや吐く事すら出来なかった。

「む、いかん。思わず皆殺しにしてしまったから、誰が差し向けたのか訊けぬではないか」

大量の返り血を浴びた羽衣狐は、酷く冷静な態度をしていた。鬼の死体を見渡す羽衣狐の目は、ゴミを見るように冷たいモノだった。そんな羽衣狐に、駆け寄る二人が居た。

「いけません、羽衣狐様！ 汚らしい鬼共ゴミの汚水が付いてます！ このタオルをお使い下さい」

「いいえ、マリア様！ このしょうけらが、優しく丁寧に拭いて…」

狂骨が白いタオルを差し出し、しょうけらは自分が直接拭こうとするが、ココで羽衣狐の尻尾ピンタが放たれた。勿論、吹っ飛ばされたのはしょうけらだけである。

「ありがとう、狂骨」

タオルを受け取り、狂骨に対しては笑顔で礼を言った。

その時、大きな影が一同を覆った。皆の視線が、一斉に影の元に向けられた。公園の中に、先ほど鬼よりも巨体の鬼が立っていた。土蜘蛛並の巨体の青白い鬼は、身の丈程もある金棒を構え、一同を潰そうと勢いよく振り下ろす。

京妖怪達は、左右に跳んで金棒の一撃を避ける。

『俺』を抱えた羽衣狐が、狂骨達と反対側に跳んで地面に着地した瞬間、異変が起きた。

「なっ!?!」

「にい!?!」

自分達の足下を見た二人は、驚きの声を上げた。

二人の足場の地面が、沈んでいつてるのだ。円の形に土の地面は砂のように崩れ、窪みが生まれ、中心にいくほど底は深くなっている。円の端に居る羽衣狐と『俺』の足が沈んでいく足場にハマリ、中心に引き込まれていく。まるで、獲物を捕えて逃さない蟻地獄のように。

自分達の置かれた状況に、『俺』は取り乱す。

「ちよっ……何ですか、コレ!?! 何がどうなってるんですか!?!」

「騒ぐな人間! 無闇に暴れれば、早く沈むだけだぞ!」

冷静な羽衣狐は、『俺』を制して落ち着かせる。それから、『俺』を放さないように腕を回して、シツカリと体を掴み抱えている。

取り合えずは暴れるのを止めた『俺』だが、依然として不安な気持ちには払えずにいた。

「って言うか、コレってアレですよ? 蟻地獄ですよ? しかも、馬鹿デカインですけど……!」

「ああ。しかも、ただの蟻地獄では無いようだ」

「どつという事ですか?」

見れば、羽衣狐が表情を険しくさせている。いつも余裕のある笑みを浮かべてる羽衣狐が、こつという顔をする時は本当にヤバい時だ。

「この蟻地獄は、どうやら敵の畏おそれのようだ。ただの砂でない、妾めかけの尻尾も掴まれて抜けぬ……！」

僅かに覗く金色の尻尾が、力を入れて小刻みに震えている。

しかし、砂から抜ける気配が無い。中で何かに掴まれてるようで、ビクともしない。

『畏の世界』。これは、通常の畏とは違う特殊な種類である。その妖怪の領域に入ったら、無条件で規則ルールに従わなければならない。能力によっては、通常の畏よりも厄介である。

蟻地獄にハマったら、羽衣狐の力でも脱出は不可能のようだ。要で畏の象徴とも言える金色の尻尾が使えなければ、脱出も反撃も出来ない。中心に近付くにつれて、足から徐々に体が砂に沈んでいく。

考える……！

ジワジワと恐怖心が広がる中で、『俺』は思考を働かせた。

考えるんだ……！ マジで何か考えねーと、マジで死ぬって

コレ！ だって、あの羽衣狐が手も足も出ないような状態なんだぞ！？ マジヤバいって！

軽く取り乱しながら『俺』は、現状を確認して脱出方法が無いか探る。

自分は特に何も持ってないし、羽衣狐は尻尾を封じられた同じような状態だ。周りはサラサラとした砂ばかりが広がっていて、脱出に使えるような物とかは何も無い。

だあああああ！ ちくしょう！ と『俺』は頭を掻き乱す。迫り来る恐怖とイライラが募って、この事態の原因であるモノを睨んだ。怒りの形相で睨む先は、蟻地獄の主が潜んでる中心部だった。

テメーのせいで、俺の平穏がぶち壊しだよ！ コノヤロー！ 死んでくれよ！ マジウゼーから、死んでくれよ！

怒りに任せて、心中で姿見えぬ相手を激しく罵倒した直後だった。ハッ、と閃き、熱が冷める。

怒りの形相も、発見に驚く顔に変わった。

「あああつ……！ そうだ、そうだよ！ 発想を変えよう！ 発想を変えればいいんだ！」

「どうした？ また何か閃いたのか？」

自分の発想に興奮する『俺』に対して、羽衣狐は冷静に尋ねた。だが、その顔は笑顔で、『俺』が何を閃いたのか興味を持っていた。羽衣狐に見下ろされる形で、少し照れながら『俺』は案を出す。

「はい。あの、アレです。ココから抜け出そうとするのを、やめましょう！」

「抜け出すのをやめる？」 僅かに首を傾げ、羽衣狐は目を細めた。

怪訝そうな羽衣狐に、『俺』は頷いて言った。

「俺達が抜け出せないのは、このデカイ蟻地獄にハマってるからです。それで、このデカイ蟻地獄を作ってるのは中心に居るハズの巣の主です。だから、ソイツをぶつ殺しましょう！ 攻めに行くんです！」

敵の領域に入ったら、逃げようとするのが普通である。

しかし、今回のように敵の領域から抜け出せない状況で逃げようとするのは、得策ではない。そう考えた『俺』は、発想を変えた。あえて攻めに出て、元凶を潰しての脱出方法に変えたのだ。

『俺』の提案を聞いた羽衣狐は、背筋が凍る素敵な笑顔を浮かべた。

「なるほど……それは、なかなか良い案じゃ。ココから抜け出す事ばかりに意識が向いて、相手そのものを思考に入れていなかった。

だが……ふふふ、そうと決まれば巢にコソコソ隠れている子虫を潰すとするかのう……！」

恐エエエエエエ！ 殺気に満ちた冷たい笑みの羽衣狐、超恐エエエエエエ！

抱えられてる『俺』は、間近で羽衣狐の笑みの迫力を受けて顔を引きつらせる。

そして、ビビる『俺』はやっぱりと羽衣狐に言う。

「あ、あの〜」

「何だ？ まだ何かあるのか？」

「その、そんなに殺^やる気満々だと相手にモロバレなので……ちょっと工夫しません？」

策を聞いた羽衣狐は、ニヤリと面白そうに笑った。

*

ククク、終わったな羽衣狐さんよ、と蟻地獄の主は心中で呟いた。京では最強の名を欲しいままにしてたらしいが、俺様の巢にハマつちまえば無力と化す。俺様の巢は、蜘蛛の巣と同じで、ハマつちまえば二度と出られない。巢の主に喰われるのを待つただけだ。

巢の中心に位置する砂の中から、二人の様子をうかがう。こちらに背中を向け、上に這い上がろうと必死になってる羽衣狐の姿が見えた。もう一人の『俺』は、羽衣狐に抱えられてるのか姿が見えない。が、まるで問題ではない。

あーあ、京の大妖怪ともあるう羽衣狐が、随分と情けないじゃねーか。ぶっっちゃけ、お前、尻尾使えなきゃ大した事ねーだろ。ま、

俺様の所に来たら瞬殺だな。

無様に足掻き、底に沈んでいく羽衣狐の背中を見つめて、蟻地獄の主は構えた。羽衣狐の背中を襲って、一瞬で決めようと言う肚だ。そして、羽衣狐の背中が、蟻地獄の主の間合いに入った。

蟻地獄の主は、歪んだ笑みを浮かべた。勢いよく砂の中から姿を現し、鎌のような鋭利な両手の刃を羽衣狐の背中に突き刺そうとした。

しかし、刃は羽衣狐の背には刺さらなかった。

ドスツ、と音を立てて刃が刺したのは、砂の壁だった。突き刺さる寸前で、羽衣狐は回転しながら身を低くして、二本の刃をかわしたのだ。

え？ と呆ける蟻地獄の主の顔に、羽衣狐の手が伸びて掴まれた。

「かくれんぼは終いじゃ、巢の主よ……！」

ニヤリと口元を歪め、羽衣狐は笑う。

敵に背を向けていたのは、油断させる為の罠だった。こちらの狙いを悟られないように殺気を抑え、相手が襲ってくる一瞬の隙を衝く為の布石だったのだ。

羽衣狐の胸には、離さないよう抱かれてる『俺』の頭が埋まっていた。

襲撃に失敗した蟻地獄の主は、顔が見る見る青ざめていき、滝のように冷や汗を流す。

「随分とおぞましい妖^{あやかし}じやのう……！」

羽衣狐が捕まえた蟻地獄の主は、全身が茶色で、顎は縦に割れて気持ち悪い口をしている。もしも『俺』が見ていたら、「気持ち悪っ！」と全力で拒絶してるだろう。

顔から笑みを消して、羽衣狐は氷のように冷たく、刃のように鋭

い殺気と畏を放つ。

「妾達を畏に嵌め、仕留めようなど百年早いわ、下種めっ……!!」

次の瞬間、金色の刃が蟻地獄の主の身体をバラバラに切り裂いた。羽衣狐の畏に気圧され、蟻地獄の主の畏が断ち切られたのだ。その結果、羽衣狐の尻尾は自由になった。

蟻地獄の主を斬り殺した羽衣狐は、『俺』を抱いて跳躍し、巣から脱出した。

「人間、もう大丈夫だぞ」

着地した羽衣狐は、胸から『俺』の頭を外して声をかけた。

しかし、『俺』は返事が出来なかった。胸の谷間に長く挟まれて、窒息状態になった『俺』は気絶してしまったのである。白目を剥き、ビクビクと痙攣している。

「少しやり過ぎたかのう」

申し訳ないと思いつつ、痙攣する『俺』を見て可愛いとS的感想を心の底で抱く羽衣狐。

その時、前方から拍手の音が聞こえてきた。

即反応した羽衣狐は、拍手の主を見た。

「お見事です。まあ、これくらいはクリアしてただかなければ、困りますがね」

拍手をしながら現れたのは、黒のスーツを着た一人の男だった。ビルの屋上で、羽衣狐達の戦いを傍観していた男だ。

『俺』を腕に抱く羽衣狐は、現れた謎の男をねめつけて、問う。

「何だ、お前は？ 先ほど始末した鬼共や巢の妖の仲間か？」
「申し遅れました。私は貴方達の迎えに参りました、一鬼いっきと言います。以後、お見知り置きを」

爽やかな笑顔で名乗る一鬼は、どこにでもいる好青年のようだ。
そんな彼の笑顔を見て、羽衣狐は顔を顰めた。今の睨みには、多少の畏も含めていた。しかし、目の前に立つ一鬼はまるで動じていない。

笑顔を絶やさず、一鬼は続ける。

「普通、あのような状況になれば『逃げる』事が頭を占め、思考口ツクがかかって攻めの動きに考えが至らない。身動きが取れなければ、何も出来ない……まずは脱出……抜け出て反撃を……と考えるばかりで、最も効率的な手段を見落とす……。その点、貴方達は口ツクを外して正しい選択をした。お見事です」
「貴様……我々を試したのか？ 何が目的だ……？」

睨みを緩めず、羽衣狐は問うた。

口の端を僅かに吊り上げ、一鬼の笑顔が若干変化した。

「先ほども、申し上げたハズです。貴方達の迎えに参りました、とね……」
「何だと？」

羽衣狐が目を細めた時だった。

突然、浮遊感が体を襲った。足下の固い地面の感触が無くなり、足は宙に浮いた状態になる。顔を下げ、足下を見れば穴が出来ていた。真つ暗な穴は、底が全く見えない。

「何っ!？」

成す術も無く、『俺』を抱えた羽衣狐は穴の底へ落ちて行く。まるで、見えない力に引つ張られるように、底へ、底へと落下する。

暗闇の底に落ちていく二人を見下ろしながら一鬼は、口元を歪め、爽やかとは正反対な悪人のような笑顔を浮かべた。

「結果は合格です。招待しますよ……貴女の息子が千年間居た、地の底に……!」

一鬼の前で穴が消えた時だった。

大きな塊が倒れ、公園に地響きがした。見れば、巨体の鬼が血まみれになって倒れている。呼吸をしておらず、完全に絶命していた。

「羽衣狐様!」

巨体の鬼の向こう側から、狂骨達がやってきた。駆け付けた狂骨達を、一鬼は笑顔で迎えた。

「これはこれは、羽衣狐の配下の京妖怪の皆さん」

「貴様、何者だ!？」

「羽衣狐様と人間をどうした!？」

敵意剥き出しで問うてくる白蔵主と狂骨に、全く怯まず、堂々とした態度で一鬼は答えた。

「あの二人は、私がある場所に招待しました」
「招待、だと?」

しょうけらが怪訝そうに目を細めると、一鬼は足下の地面を指差した。

「人も妖も還る、地の底……地の獄……地獄にね……！」

*

気が付けば、『俺』は何処かも分からない場所に居た。

ソコは、酷く殺風景で、とても人が居そうな場所では無かった。荒野のように枯れ果て、荒れた灰色の大地に草木が一本も見えない山々が周りに見える。寒気を感じる不気味な空気が漂い、この世の終わりのような光景だった。

目を覚まし、その場に立ち尽くす『俺』は周囲を見渡して顔を引き攣らせる。

「え……？ 何処ココ？ 羽衣狐は……？」

見知らぬ場所に一人残された『俺』は、不安を禁じ得なかった。いかにも何か出そうな場所で、不安に胸を締め付けられる。もう今にも、近くの岩陰から不気味な声が聞こえてきそうな感じである。とにかく、超恐い場所である。

ココが何処なのか確かめる為に移動するべきか、それとも下手に動かず羽衣狐や狂骨達が見つ付けてくれるのを待つべきか、悩み出した時だった。

「おや？ 見ない顔だな。お前さん、新入りかい？」

突然背中から声をかけられた。

四ノ怪：砂の獄（後書き）

地獄に堕ち、衝撃の人物との遭遇を果たす『俺』。

そして、共に堕ちたハズの羽衣狐は……！？

出逢うハズの無かった二人が出逢い、逆転を狙った地獄での大勝負
劇が幕を開ける！

感想・質問は、引き続き募集中です。

五ノ怪：地獄の番犬

ヤベーよ、マジ殺されるよ、と『俺』は思うのだった。

何でか解らないが、目の前に死んだハズの山吹乙女の元夫にして奴良組二代目総大将・奴良鯉伴が居るのだ。んで、どうして『俺』がヤバいと思っっているのかと言うと、理由はクリスマス・イヴの一件に戻る。山吹本人の同意もあつたとは言え、仮にも妻だった女を抱いてしまったのだ。もし、万が一その事を元夫である鯉伴に知られてしまえば、殺されてしまうんじゃないかと不安に思っっているのである。しかも、山吹の身体の中には羽衣狐が憑依している。同盟を結んだ奴良組のぬらりひょんやリクオは、羽衣狐の所業を一応許しているが、鯉伴はそうではないハズだ。

そういう事で、色んな意味でヤバい状況なのだ。

「えええええ！？ 地獄？ ココ、地獄なんですか！？」

「ああ。人も妖も等しく還る場所だ。俺もココに堕ちて、それなりに長く経つな」

現在、『俺』は鯉伴と共に地獄の地を歩いている。

鯉伴から自分達の居る所が、地獄である事を知った『俺』は、驚きこそしたがイマイチ実感が沸かなかつた。公園で謎の鬼に襲われ、その後羽衣狐と一緒に巨大な蟻地獄にハマリ、反撃を試みようとしたところまでは覚えている。だが、その後 反撃をしようとしたところから地獄に堕ちるまでの間の記憶が、スッポリと抜けているのだ。理由は、羽衣狐の胸の谷間に顔を突っ込まれ、息が出来ずに意識を手放してしまったからである。

なので、自分が死んだ実感がイマイチ沸かず、ショックを受けるよりも困惑の方が大きかった。

困惑顔の『俺』に、鯉伴は軽い口調で話しかけてきた。

「まあ、堕ちちまったもんはしょうがねえさ。こうして逢ったのも何かの縁だ、仲良くやろうぜ」

ハア、と『俺』は頷いた。

『俺』を氣遣っているのか素なのか、鯉伴は明るく軽い感じに声をかけてくる。最初は受け答えに戸惑っていた『俺』だったが、会話を続ける内に気持ちも楽になっていった。ただでさえ、重苦しい空気が漂う地獄と言う場所に居るのに、二人の間まで息苦しかったら更に気分が落ち込んでいた。

初対面なのに気兼ね無く話しかけてくる鯉伴に、『俺』は内心感謝をする。

しかし、だからと言って、ずっと気楽にはいられない。

周囲をチラチラ気にしながら、『俺』は口を開いて小さな声を出す。

「あの、すみません。さつきから、凄く見られてるんですけど……。目からビームが出そうな程、メツチャメンチ切られてるんですけど……」

実は、先ほどから沢山の地獄の住人に睨まれてるのだ。岩の陰やら丘の上やら様々な所から、人間や妖怪が遠目で睨んでる。

『俺』一人だったら、完全に腰を抜かして泣いていただろう。

周囲の睨みを受ける中でも、鯉伴は全く動じた様子は無く、相変わらず飄々としている。

「なに、心配いらねえよ。周りに居る連中は、俺に一度ノメされてるから、俺の側に居れば襲われる事はねえさ」

「は、はあ……」

言われて『俺』は、恐る恐る周囲を見渡した。

確かに、連中は睨んでるだけで、襲い掛かってくる様子が無い。何かを警戒してる感じで、顔を恐くしている。警戒の対象は、鯉伴だろう。睨んでくる連中の中には、悪人面でメチャクチャ強そうで怖い人間や妖怪が見える。

そんな奴等に、鯉伴は勝ってきたのだと言う。

話を聞いただけで、実際に戦つてるところを見た訳ではないが、流石は元奴良組の二代目総大将だなと思った。

「奴良さんつて、強いんですね」

「まあ、喧嘩は強い方だな。あと、俺の事は鯉伴って呼び捨てでいいぜ」

「は、はい」

何と言つか、鯉伴はフレンドリーな感じの男でもあった。

「実は、ずっと探してたのさ」

「え？」

不意に声をかけられ、『俺』は顔を向けた。

鯉伴の顔から笑顔は消え、何か決意のようなモノが秘めた険しい表情に変わっていた。

「俺あ、ある奴に殺されて地獄ゴクに墮ちた。だが、ソイツ自身は悪かねえ……俺が許せねえのは、ソイツを利用して俺を殺させた黒幕だっ……！」

だから俺は、この地獄から這い上がって、黒幕ソイツに落とし前つけなきゃいけないんだ。俺を殺りてえなら、殺りにくればいい。そういう世界に身を置いてたから、覚悟は出来てた。だが、俺の大切なモンを利用して、手を汚させた事だけは絶対に許せねえ……！」

語る鯉伴の顔と声には、明らかに怒りの感情がこもっていた。自分を殺した者に対する単純な怒りではない。

大切なモノを利用され、汚された怒りに満ちていた。

彼の顔には、『俺』にも見覚えがあつた。弐條城での戦いで、羽衣狐を庇ってリクオの刀を背中に受けた時だ。斬られて『俺』が死んだと思つた羽衣狐が、怒りを露にした時も同じ顔だった。

直接山吹を操っていた麿地蔵は、『俺』と羽衣狐によつて死んだ。しかし、黒幕である安倍晴明は生きている。

そう、過去の因縁は、まだ終わっていないのだ。

「俺は、どうしても地獄から出なきゃならねえ。その為には、お前さんの力が必要なのだ」

「は？ 何で俺なんすか？ って言うか……え？ 地獄から出る方法があるんですか？」

色んな疑問が飛び交つて、『俺』は訳が分からなくなる。

「ああ。ただ、俺一人じゃとても無理だ。一人でも強え奴の協力が必要だね」

「だから、どうして俺なんですか？」

『俺』が尋ねると、鯉伴は急に足を止めて振り向いた。

笑みを浮かべ、鯉伴は断言するように言った。

「お前さんが、“強え奴”だからさ」

「え？ ええっ？」

「一目見て思つた……コイツは“強え”ってな。妖怪のように力は無えが、底に何かあるのを感じた」

何言つてんだ、この人？ と『俺』は思った。
鯉伴は真剣のようだが、『俺』は信じられなかった。また土蜘蛛のような勘違いする奴が出た、と言う風にしか思わなかった。

「いや、それは買い被りと言うか、勘違いですよ。俺は別に……」
「謙遜するねえ。それとも自覚が無いのかい？ なに、俺の見る目は確かだ。自信持ちな」

笑いながら鯉伴は、再び歩み出した。

先に進む鯉伴の背中を見て、『俺』は溜め息をついた。もう否定するのも面倒だった。俺を凄い奴だと思ってるなら、勝手に思えばいいぞ。

そう思った『俺』は、鯉伴から離れたら危ないのを思い出して、慌てて後を追った。

*

しばらく荒野を歩いて、鯉伴が歩みを止めた。

「ココだ」

辿り着いたのは、崖の上だった。かなりの高さで、落ちたら即死だろう。

崖の下も荒野が広がっていた。

ただ、先ほどの荒野とは少し光景が違った。

「うっ………!!」

その光景を目にした『俺』は、目を見開き、ドツと汗を流した。崖下に広がる荒野に、一匹の悪魔が居た。生暖かい息を吐く三つの犬の頭、真っ黒な毛に覆われた戦車を上回る巨体、鎌のような鋭く太い爪、蛇の頭部を有する尻尾。圧倒的な存在感と死の気配を纏った悪魔が、大きく口を開いて、咆哮を上げる。

その咆哮の衝撃は、離れている『俺』達にも届いた。

「うおっ……！」

ビリビリと衝撃を受け、思わず両腕で顔を覆った。

隣に立つ鯉伴は、片目を閉じた険しい顔で口を開いた。

「奴が、地獄から抜け出る為に突破しなきゃならねえ最大にして最強の関門だ……。死者の行く手を阻み、希望を喰らう魔物……！」

この地獄の番犬にして、頂点……。ケルベロス……。地獄の番犬・ケルベロスだ……！」

姿を現す、地獄の狂気が生んだ究極の殺戮モンスター。

ケルベロス……。地獄の番犬・ケルベロス！

五ノ怪：地獄の番犬（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： 勇往邁進さんの作品のラングさんからの質問。

『どうも、ラングだ……早速だが主人公、戦うために修業はしているか？

してないなら俺が修業相手をしよう……無論、手加減無しだがな』

俺「いや、修行なんてしてないよ？俺はバトル漫画の主人公じゃないし、ただの人間だし……どっちかと言うと、俺、頭脳派なんだからジミたいな。なので、修行はお断りします。全力で！」

鯉伴「おいおい、それでいいのかい？」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

六ノ怪：衝撃の同盟

地獄の番犬・ケルベロス。

三つ首の超大型犬モンスターは、大気を震わせる咆哮を上げる。開かれた大きな口からは、獲物を喰いたい食欲に駆られて、唾液をダラダラと出している。

そんな危険度マックスのモンスターに挑む、愚かな挑戦者が数名居た。妖怪と人間が、それぞれの武器を用いて、果敢とは言い難い無謀な攻撃を仕掛けている。しかし、彼等の攻撃は、ケルベロスに何のダメージも与えていない。蚊に刺された小さな赤い腫れ程度の傷さえ、負わせずにいた。

無謀な挑戦者の蚊以下の攻撃を受けきったケルベロスは、低い唸り声を出し、充血したような紅い目で睨んだ。その瞬間、挑戦者一同の動きが止まった。ケルベロスの圧倒的な畏を受け、顔は蒼ざめ、体は金縛りにかかったように動けなくなった。

次の瞬間、ケルベロスが動いた。異常に発達した四本の脚力で地面を蹴り、目にも止まらぬ速さで動き、一瞬で五人の挑戦者を噛み殺した。ケルベロスの後ろには、上半身を失った五人の哀しき挑戦者の屍が残っていた。

ケルベロスは、曇天のような暗い空に向かって吠えた。地獄の王者の空腹は、まだ満たされていなかった。

*

「な………何ですか、アイツ………？ メチャクチャ強いじゃないですか………！」

離れたら崖の上から見ていた『俺』が、冷や汗を流した蒼い顔で言った。

その隣には、笑みを消して真顔になっている鯉伴が居た。表情は変わっているが、相変わらず片目は閉じたままだ。

「言つたる？ この地獄の番犬にして王者……。奴を倒す事が出来れば、地上……。現世に生還して、晴れて自由の身になれるのさ」
「勝てば自由つて……」

話を聞きながらも、『俺』は下に広がる荒野に立つケルベロスを凝視していた。

「そもそもいるんですか……。？ その、あの化け物に勝つて地獄を出れた人が……。？」

当然の疑問である。

参考にするには、あまりに呆気なく終わった戦いだつたが、確かな事が一つある。

それは、あの巨大な番犬が並のモンスターでない、と言う事だ。弱者が束になつてかかったところで、先の無謀な挑戦者のように喰い殺されるだけであり、おそらく下手な小細工も一切通用しない。まさしく、弱肉強食の頂点に君臨する絶対的強者 王者である。

『俺』の問いに対して、顎に手を添えて鯉伴は答えた。

「俺の知る限りじゃあ、奴を倒して地獄ゴゴを出れた者もんはいねえな。……が、勝負して生き残つた奴なら一人いるつて、聞いた事があるぜ」
「えっ！？」

信じがたい情報に、『俺』はケルベロスから目を話して鯉伴と向き合う。

「生き残った？ あの化け物と闘り合ってますか！？」

「ああ。俺も噂を聞いただけで詳しく知ってる訳じゃねえんだが、負けはしたが生き残ったって話だ」

「マジっすか……？」

驚きの表情を顔に張り付かせ、『俺』はケルベロスに目を戻す。

正直、想像すらし難い事だ。あんな化け物と闘って生き残るなんて、負けはしても、その挑戦者も立派な化け物だ。

「って言うか、マジに挑戦するつもりなんですか？ あの化け物に……？」

振り向き、鯉伴に尋ねる。

すると鯉伴は、当然だと言わんばかりに首を縦に振った。

「ああ。奴を倒し、現世に帰る。そう決めてた……だからこそ、お前さんをココに連れてきたのさ。相手を知る為にな……」

おいおい、マジかよ、と『俺』は思った。

無理に決まってるだろ……。いくら鯉伴が強いつて言っても、リクオとそう違うとは思えない。それに、俺なんかと組んだって、勝率が上がるなんて事無いつての……！

『俺』には、鯉伴の考えが理解出来なかった。馬鹿だ。俺以上の超ウルトラ級の馬鹿だ、と頭を抱える。挑戦するのは勝手だが、他人まで巻き込むと言うのが本音だった。

「さて、アイツの事を知ったし、次に行くぜ」

「え？ ちょっと……ちょっと待って下さいよ！」

マイペースに動く鯉伴に、『俺』は慌ててついていった。

*

ケルベロスの場を離れ、『俺』と鯉伴は先ほどの荒野に戻ってきた。

鯉伴の後をトボトボと歩く『俺』は、一人考え込んでいた。

さつきはケルベロスの迫力に気圧されたり、陰惨な光景を目の当たりにして、弱気弱腰になっていた。だが、後になって考えてみると、全く可能性が無い訳ではない、と思いつく。

確かに、ケルベロスは強い。オマケに、体格もデカイ。

しかし、必ずしも体格の巨体さで有利になるとは限らない。現世での土蜘蛛の例がある。体格の大きい土蜘蛛に対して、口から体内に侵入して内側から攻めると言う戦法を使った。

あのケルベロスにも、同じ戦法が通じるならば、勝てる。勝てるかもしれない。

僅かながらも可能性を見出した『俺』は、無意識に拳を固めた。拳の内側は、汗でビッシヨリと濡れていた。

その時、ふと『俺』は気になる事があって呟いた。

「そう言えば……アイツも、ココに堕ちてるのかな……？」

「ん？ 何か言ったかい？」

「ああ、いえ。何でもありません」

以前、自分達よりも先に地獄に堕ちた土蜘蛛の事が、気になった。奴良組の敵位置に立っていたので、鯉伴には内緒にした。それに、アイツなら大丈夫だろうと思いい、深くは考えなかった。

「ココだ」

鯉伴の声で、『俺』は場所を見渡した。
着いた所は、小さな丘の上だった。他の地獄の住民は見当たらず、
静かな場所だ。

「この辺には、うるさい奴等も居なくてな。一応、俺のお気に入り
の場所さ。まっ、殺風景だけどな」

言つて鯉伴は、地面に腰を降ろした。

ソコには、何故か酒の用意がされていた。小さな酒瓶が一つに盃
が二つ、座つた鯉伴の前に置かれてある。どうして地獄に酒がある
のか疑問に思う『俺』に、鯉伴が酒瓶と盃を持って言った。

「共に戦う為に、盃を交わそうぜ」

「は？ 盃!？」

いきなり盃を求められ、『俺』は困惑する。

おいおい、アンタと盃交わすつて事は、アンタの百鬼夜行に
加わるつて事じゃねーか！ いや、今は百鬼は無いけど、少なくとも
も忠誠誓つて仲間になるつて事だろ!？」

以前、奴良組と話をして盃の事は知っている。ただ酒を飲み合う
だけではない。

だからこそ、『俺』は困惑していた。

座つて見上げてくる鯉伴は、真剣な顔で言う。

「俺一人じゃあ、奴は倒せねえ。あの地獄の番犬を倒し、現世に帰
るにはお前さんの力がどうしても必要なんだ。互いの信頼関係を作
る為にも、この盃を受ける！^{ケルベロス} 奴を倒し、共に現世に帰る為に！」

鯉伴が、酒の入った盃を差し出してくる。

ソレを『俺』は、黙って見下ろす。鯉伴の言う通り、あの怪物は一人じゃとても倒せない。手を組んで臨むにしても、土壇場で裏切られたら最悪だ。信頼関係を作りたがる鯉伴の気持ちも、分からないじゃない。

しかし、ソレでも『俺』は盃を交わす事を戸惑う。脳裏に浮かぶのは、羽衣狐と狂骨達の姿だった。

悩む。

悩んで悩んで悩んだ末に、『俺』は地面に膝をつけ、頭を下げた。土下座だ。

突然の土下座に驚く鯉伴に、『俺』は言った。

「すみません！ その盃は、受けられません……！」

「……どうしてだい？」

「その、何て言うか……この盃で信頼関係を作るうって言う、鯉伴さんの考えも解るんですけど……俺には、もう仲間が居るんです……！ 俺の自意識過剰とか勘違いとかじゃなければ、向こうも少し位は仲間意識みたいながあると思うんです。鯉伴さんとの盃を受けらるって事は、アイツ等を裏切る事にもなるんです。出来る事なら、そんな事はしたくない……だから、盃は交わせません……！ すいません！」

盃こそ交わしていないが、『俺』は羽衣狐連合軍の一員だと思ってる。奴良組と同盟は結んだが、あくまで手を組んだだけで盃は交わしていない。他の者や組織と勝手に盃を交わすと言う事は、羽衣狐連合軍を抜けるに等しい行為。

そう思った『俺』は、鯉伴との盃を拒否した。

頭を下げたまま、『俺』は続ける。

「けど……盃は交わせないけど、協力はします！ 俺も一緒に、あ

の怪物を倒して現世に帰りたいんです！ 絶対に裏切ったりしません！ だから……」
「分かったよ」

鯉伴の声が聞こえ、『俺』は頭を上げた。
黒髪をクシャクシャと掻き、鯉伴は根負けしたような笑みを浮かべていた。

「そこまでお前さんの意思が固いんじゃ、無理に盃交わす訳にもいかねえな。それに、今のでお前さんなら任せられるって思った。いぜ、よろしくな」

「は、はい。こちらこそ、ありがとございます！」
礼を言つて、もう一度『俺』は頭を下げた。

「まあまあ、そう何度も頭下げるなよ。それじゃあ、盃交わすのは関係無しに飲もうじゃねえか。折角の酒が勿体ねえ」
「は、はあ、じゃあいただきます」

鯉伴から盃を受け取り、『俺』は酒を注がれる。
酒を飲もうと、盃に口を付けようとした時だった。

「人間！」

聞き覚えのある声上がり、『俺』は盃から顔を離して周囲を見回す。

声は、『俺』達が歩いてきた方角とは反対側から聞こえてきた。
地獄の場に似合わぬ、綺麗で凜とした女の声だ。

『俺』と鯉伴が、ほぼ同時に振り向いた。

二人の視線の先に、その声の主が居た。黒い長髪、黒のセーラー

服と全身黒ずくめの女だ。

「羽衣狐！」

「人間！」

地獄に墮ちてからはぐれていた相手を見つけ、二人は互いに呼び合う。

羽衣狐が駆け寄り、立ち上がった『俺』に抱き付いた。

「人間……！ 無事であったか……！」

「は、はい！ 羽衣狐も、無事で良かったです！」

羽衣狐と抱き合い、少し照れて『俺』は頬を赤くする。

「お、お前……！」

再会を喜び合っていると、不意に声が聞こえた。声は震えていて、動揺が伝わってくる。

ハッと気付いた『俺』は引きつった顔で、羽衣狐は特に関心が無さそうに振り向いた。

二人の視線の先には、啞然と立ち尽くしてる鯉伴が居た。大きく見開いた目で、羽衣狐を凝視している。

「お前……あの時の娘か……？」

「貴様は……奴良鯉伴、か……！？」

鯉伴を見た羽衣狐も、驚愕の顔に変化した。

あの山吹の花が咲き乱れる夜の光景が、二人の脳裏に蘇る。もっとも、羽衣狐は式條城で記憶の欠片の映像を見ただけで、当時の事

は知らない。

そして、鯉伴との出逢いに衝撃を受けたのは、二人だけではなかった。

すうつと羽衣狐の頬に、一筋の涙が流れた。

「鯉伴、様……?」

「え……?」

名を呼ばれ、鯉伴は閉じていた片目も開眼した。

聞き覚えのある懐かしい響きが、胸の中に広がっていく。同時に、目の前に居る少女が誰なのか悟った。

「お前……まさか、山吹乙女、なのか……?」

「鯉伴っ!」

羽衣狐から体の主導権が変わった山吹が、涙を流して駆け出す。

そして、鯉伴の胸の中に飛び込んだ。鯉伴も、山吹の体を受け止めた。

「鯉伴……! 鯉伴……!」

「乙女……!」

胸の中で泣く山吹を、鯉伴は優しく抱きしめた。

「鯉伴……ごめんなさい……! ごめんなさい……! わ、私……私……!」

「なに、お前のせいじゃねえよ。だから謝るな……辛かったらろっ……」

慣れない手つきで、山吹の頭を優しく撫でる鯉伴。

残酷な運命に翻弄された二人が、地獄の地で再会を果たした。感動の再会を間近で見て、『俺』は涙ぐんでいた。目に溜まった涙を拭き、鼻水をすすする。

ちくしょう！ 生の感動の再会ってスゲーよ！ テレビでこういう場面何回も観てきたけど、泣きそうになったのは今回が初めてだよ！ 良かったね、山吹さん！

地獄に似合わぬ感動的な空気が、一同を包んだ時だった。

「って、待たぬか！」

「うおっ！？」

急に山吹が声を上げ、鯉伴から離れた。

あれ？ と疑問に思う『俺』と鯉伴の前で、豹変した山吹が言う。

「何故、死んだハズの鯉伴が生きておるのだ！？ それから人間！

ココは一体何処じゃ？ 答えよ！」

「いや、台無しイイイ！ 感動の再会が台無し！」

どうやら、山吹から羽衣狐に人格がチェンジしたようだ。

元妻の豹変ぶりに、鯉伴が困惑する。

「おい、乙女……どうしたんだ？」

「妾は山吹ではない！ 羽衣狐だ！」

「何っ！？ 羽衣狐だと！？」

「ちよつとオオオ！ バラすの早すぎ！ それにバラすにしても、言い方を考えましようよ！」

山吹の中に奴良組因縁の羽衣狐が憑依していると知り、鯉伴は驚愕して、ストレートな暴露に『俺』は頭を抱えて叫ぶ。

感動の再会から一転、場は力オスな空気になってきた。

山吹が奴良組を出る原因の羽衣狐を前にして、鯉伴は敵意を露にして着流しの内にしまつてある長ドスに手をかける。

「羽衣狐……！ 今すぐ乙女の身体から出ていきな……！」

「妾に刃を向けるか？ よかろう、返り討ちにしてくれようぞ！」

羽衣狐も金色の九尾をスカートの内より出し、臨戦態勢に入る。

「わあああああああ！ ちょっと待った！ ストップストップ！」

対峙する両者の間に割つて入つたのは、『俺』だった。このままじゃヤバいと思い、勇気を振り絞つて割り込んだのだ。

「お前さん、悪いがどいてくれ。俺あ、ソイツを叩き出して斬らなきゃならねえ……！」

「ふふふ。面白い、やれるものならやってみるがよい」

鯉伴は殺気をみなぎらせ、羽衣狐は挑発するように笑っている。

一触即発な空気のと真ん中で、『俺』はビビりながら精一杯声を上げた。

「ああ、もう！ 二人共落ち着いて下さいよ！ 鯉伴さんも気持ち解りますけど、ココは抑えて落ち着いて下さい！ 地獄ゴクから出るには、羽衣狐の力が必要なんです！」

「え……？」

『俺』の言葉に、二人は一旦気を緩めた。

「羽衣狐コイツの力が、必要だったのかい……？」

「そうです！ あの地獄の番犬・ケルベロスは、俺達三人で攻略す

るんです!」

正面から鯉伴と向き合い、『俺』は言った。

衝撃の提案を聞いた鯉伴は、驚いた顔で羽衣狐を見る。睨んでくる羽衣狐から目を逸らし、『俺』に顔を戻して苦笑いで尋ねた。

「マジかい……?」

「マジっすよ……!」

『俺』も真顔で言葉を返す。

「おい、お前達先ほどから何の話をしておる? ケルベロスを攻略とは何だ? 何がどうなっておる? これ、答えぬか人間!」

話に一人取り残されてる羽衣狐が、声を上げた。

六ノ怪：衝撃の同盟（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ミスターサーさんの二人のキャラからの質問。

『四季「主人公君に質問、一番ほしい畏は何？やっぱり形勢逆転の畏？」

ちなみに俺は全てを切断する畏さ

…… ちょうど良いから、鯉伴・・・喧嘩しようぜ」

千「私からも質問、羽衣狐さん…好きな奴に告白出来ないのですが…どうすれば良いのでしょうか」』

俺「スーパーサイヤ人になりたいです。クリリンのことがあああああああああ！」

羽衣狐「うむ。気持ち解るぞ。よかるう、妾がお前の悩みを解決してやるう。まず、人が居ない場所に相手を誘うのだ。多少無理矢理でも構わん。そして、恥ずかしさや迷いを振り払い、時間をかけずに告白じゃ！ この時、下手に飾ろうとせず、『好きだ』『愛している』と簡潔に気持ちを言葉にして伝えるのじゃ！ とにかく、攻めじゃ！ こちらから攻めてゆけ！ 男共は、皆攻められるのが好きな阿呆だからな！」

俺「いや、最後の方はアンタの偏見ですよ？」

投稿者： 善宗さんのジンキさんからの質問。

『主人公君…もし人間界に戻れたら、たちばなで働くかい？後、音

「又でも送って鬼になるかい？ 剣にもなるから護身用に一本どう？」

俺「人間界に戻れたら……とりあえず、休みたいです。多分、物凄く疲れてると思うから。後、鬼化は全力で遠慮します」

投稿者： 玄人さんからの質問。

『質問！！ 今地獄にいるということは土蜘蛛はでますか？ でますよね？ つくか出せやこの強運のみのリア充！？ ちなみに、出会い頭に潰されて下さい』

赤夜又「土蜘蛛は、地獄に居ますよ。そしてご安心を。ちゃんと出番はあります。彼の出番は、もう少しお待ちください」

俺「リア充って言うけど、俺だって苦労してるんだよ？ 死にそうな思いしてるんだよ！？」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

七ノ怪：因縁の大敵

羽衣狐と鯉伴が一触即発な空気になったが、『俺』の必死な説得により、渋々ながらも両者は矛を納めた。

場を落ち着かせ、『俺』は二人にそれぞれ事情を話した。

鯉伴には、事件の真相だ。あの夜、鯉伴を刺し殺したのは安倍晴明の禁呪『反魂の術』で甦った山吹乙女本人であること。その山吹は、塵地蔵を名乗る“山ノ本の目玉”に鯉伴を殺すよう操られ、羽衣狐の依代にされたこと。羽衣狐も、安倍晴明復活に利用されていたこと。『俺』の知る限りの全てを話した。

羽衣狐にも、現状を教えた。自分達は、地獄に堕ちてしまったこと。自力で地獄から出る方法は、ケルベロスと言う殺戮モンスターを倒さなければならぬこと。そして、奴を倒すには三人が仲間として力を合わせる事が必須であること。

『俺』が話終わると、二人共黙って考え込み、場は沈黙に包まれた。

「ど、どうですか……？」

沈黙に耐えきれず、おずおずと『俺』は二人に尋ねた。

ややあって、鯉伴が頭をクシャクシャと掻いて口を開いた。

「しょうがねえな。今は俺達で争ってる場合じゃねえからな」

「仕方あるまい」

羽衣狐も渋面だが、頷いてくれた。

何とか二人が協力に同意してくれて、『俺』はホッと安堵し、胸を撫で下ろす。山吹の一件もあって、二人の間には決して穏やかとは呼べない空気が漂っていた。しかし、地獄から抜け出るには、互

いの力が必要になる。現世そとに出たい気持ちそとは、二人も同じ。共通の“利”が、二人の協力関係を結んだのだ。一応は納得した鯉伴だが、顔は穏やかではない。

「まあ、手を組むのは賛成だがよ……。アンタら、くつつき過ぎじやねえのかい？」

鯉伴が片眉をピクピクと動かし、不機嫌を露にしている。その理由は、『俺』と羽衣狐にあった。

「ん？ 何じゃ？ 妾わいと人間はこういう関係なのじゃ……。互いに寄り添って何が悪い？」

挑発的な笑みを浮かべる羽衣狐は、『俺』の腕に絡んで体を寄せている。

元夫の鯉伴からしたら、山吹の体で他の男に身を寄せてる場面は面白くない。これ見よがしに羽衣狐は、まだまだ成長中の胸を『俺』の腕に押し付けている。

本当ならば、力ずくでも引きはがしたいところだが、体は山吹なので手荒な真似は出来ない。それに、羽衣狐と山吹は一心同体になっっているので、羽衣狐のみを叩き出す事も出来ず、鯉伴は完全に手詰まりだった。打つ手の無い鯉伴は、睨む事しか出来ない。大抵の事なら笑って済ます鯉伴だが、状況が状況だけに今回は笑い事では無かった。

睨む鯉伴と見せつけて挑発する羽衣狐。険悪になっていく場の空気きで、『俺』は冷や汗を流して苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。もう僅かな勇氣も残されておらず、一触即発の危険な空気きで口を挟むなんて無理だった。もうね、縮こまり、喧嘩にならない事を祈るのみである。

空気が重くなる中、鯉伴が口を開いた。

「ところで、お前達付き合ってるって言ってたが……どこまでいったんだい……？」

知りたくない、けど気になる気持ちが強くて、鯉伴は訊いてしまった。

頬を引き攣らせた微妙な笑みを作る鯉伴と顔色が微妙に悪い『俺』を交互に見て、羽衣狐は考える仕草をする。

ややあつて、薄らと頬を赤くさせ、恥じらうように羽衣狐は答えた。

「恥ずかしくて、妾の口からは言えぬ……」

「なっ……！？」

シヨックを受けた鯉伴は、引き攣った顔で凍りついた。

そんな鯉伴に、羽衣狐の容赦無い追い打ち。

「大体、山吹が去ってから随分と時が経っておると言うのに、いつまでも引きずってるでないわ。情けなき男よ」

「ぬう……ぐううう……！」

「貴様も、新たに人間の女子おなこと結んだのであろう？ ならば……」

「やめたげて！ 羽衣狐さん、もうやめたげて！ 鯉伴さんのライフはもう0よ！」

見ていられなくなった『俺』は、声を上げて羽衣狐の言葉を遮った。

「どんだけ責めれば気が済むんだよ、アンタは！ 鯉伴、マジで落ち込んじゃってるよ！？ ドSにも程があるだろう！？ 下手したら、ケルベロスと闘えなくなっちゃうよ！？ もう既にヤバい状態だけど！ 加減ってもんを知らないのかよ、この人は？」

内心にシャウトする『俺』の前で、鯉伴は力無くうなだれていた。全身から、こっ、負のオーラが出ている。昔の女を引き摺ってる事は、自分でも気にしていたようだ。でも、別れた理由が理由だから、引き摺っててもしょうがないよね？

「大体、元はと言えば羽衣狐の呪いが原因なんですから……ちょっとは責任感じて下さいよ」

「ぬう……お前は妾の味方ではないのか？」

「いや、味方っちゃ味方ですけど……流石にアレは言い過ぎですよ」

少し拗ねる羽衣狐に、『俺』はやりわりと声をかける。

「ほら、鯉伴さんメチャクチャ落ち込んでますよ」

顎をしゃくって示す先には、落ち込む鯉伴の姿があった。

最初の陽気で飄々とした態度からは、考えられない程の沈みっぷりである。このままでは、負の海の底に沈んで溺死してしまう。いますぐライフセーバーを呼んで、救出しなければ手遅れになってしまう。

そんな鯉伴を見て、やれやれと羽衣狐はかぶりを振った。罪悪感とか責任とか、そんなの全然感じてない様子だ。

「仕方が無いのう。世話の焼ける男だ」

「追い詰めた犯人の言葉とは思えないですね」

「黙れ。山吹、頼んだぞ」

羽衣狐が奥に引つ込み、山吹が表に出た。

「鯉伴！」

たたた、と山吹がどんよりと気が沈んでる鯉伴に駆け寄る。

鯉伴は山吹に任せておけば、まあ大丈夫だろう。久々に、夫婦二人つきりにさせようかね、と『俺』は気を利かせて立ち上がる。

「あつ、何処か行くんですか？」

歩き出してすぐに、山吹に声をかけられた。

振り返り、『俺』は答える。

「ええ。ちよつと散歩に」

「一人で大丈夫ですか？」

鯉伴だけでなく、『俺』の心配までする山吹は、お人好しな位優しい妖あやかしだ。

「はい。まあ、大丈夫です」

鯉伴と言う人物は、仲間を大事にする男だ。その鯉伴とつるんでる者を襲いでもしたら、後に報復を受ける事になるだろう。なので、鯉伴と一度行動を共にしてる事を周りに見られていれば、ある程度の範囲なら一人で動いても大丈夫だと『俺』は考えたのだ。

「そうですか。気を付けて、いつてらっしゃい」

山吹の笑顔に見送られ、『俺』は二人が居る丘を後にした。

*

丘を離れた『俺』は、一人で崖の上に居た。眼下には、荒野が広がっていて、黒い塊がある。何人もの死者を喰い殺し、地獄の頂点に君臨しているケルベロスだ。

今は挑戦者の姿は無く、ケルベロスの場は閑散としていた。荒野に居るケルベロスも、巨体を伏して眠っている。

『俺』は崖の上から、ジツとケルベロスを眺める。一人で挑戦するなんて、無謀な事は当然しない。もとより、弱い人間一人で挑んだところで勝ち目なんか無いし、瞬殺されるのがオチだ。今回は、様子見と言つか観察みたいなものだ。

今のところ、ケルベロス攻略の方法は一つしか浮かんでいない。土蜘蛛の時に実行した、『内部破壊』である。巨体の相手は、大抵その巨体さに見合った体力と耐久力を備えている。正面から闘り合ったら、まず勝ちはない。敗北必至だ。ソコで、巨体の間隙を衝く相手の体が桁外れに大きく、こちらが小さいからこそ実る戦法。ソレが相手の体内に侵入しての『内部破壊』だ。体の内側から攻めれば、相手からの反撃を受ける事なくやりたい放題出来る。

この戦法が使えれば、まあ勝てない事は無いと思う。ただ、この戦法……タイミングが難しいんだよな……。相手の体内に侵入するタイミング……上手く入らなきゃ、逆に喰い殺される事になる。それに、アイツ、多分羽衣狐より強い……！ 推測でしかないけど、現時点じゃ多分羽衣狐より上……間違い無く強敵だ……！

土蜘蛛の時以上に苦戦するかもな、と『俺』は思った。

この時、ケルベロス攻略に集中していた『俺』は気付いていなかった。

因縁の敵が、すぐ後ろに迫っている事に。

「こんのガキヤ……！」

不意に、後ろから声が聞こえた。

その声は、地の底から響くような酷く不気味で、禍々しい感じだ

った。

背中であら声を受けた『俺』は、背筋がゾクツとした。弾かれたように後ろを振り向いた。

「なっ……！？」

ソイツを見た瞬間、『俺』は恐怖で固まった。

化け物。ソレ以外の言葉が浮かばない。

目に映るのは、巨体の化け物だった。顔は右目と歯のみが、あるべき位置に浮かんでいて他の肉や骨が無い。黒い顔の輪郭が、ぼんやりと見えるだけだ。着物姿で、裾から覗く手足は一部が欠けている。欠けた体の部分も黒く包まれており、不気味な雰囲気纏っている。

この化け物こそ、羽衣狐復活を裏で手引きし、奴良組と因縁深き男。

「よくもワシの“左目”を潰してくれたなあ……！」

地の底で、悪魔が迫りくる。

『俺』とも因縁浅からぬ男、その名は、山本五郎左衛門！

七ノ怪：因縁の大敵（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ミスターサーさんの薄さんから質問。

『では質問でござる、カイジもどきの主人公殿はMでござるな？
やはり、完全に調教されてしまったのでござるかな？』

俺「そうですね。最初は、SでもMでもどっちでもない感じだったんだけど……羽衣狐のせいで……Mになっちゃいました……」

投稿者： ライトさんからの質問。

『質問です。乙女さんはどうとう鯉伴さんに会えたわけですが、また一緒にになりたいのですか？ それとも過去の恋としてそういった感情はもう諦めているのでしょうか？』

答えにくい質問ですが、できましたら解答よろしくお願いします。』

山吹「そ、そうですね。一緒にならなくてもいい、と言えば嘘になります……鯉伴も、今の奥さんがいますし……。私も生まれ変わった気持ちで、新しい恋を……と考えてます」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

八ノ怪：因縁の衝突

『俺』がケルベロスの場に行つてから数分後、山吹と鯉伴が居る場所は異様な光景が広がっていた。

山吹が落ち込む鯉伴を慰め、励ましていると大勢の人影がやつてきたのだ。また地獄のゴロツキ共か、と鯉伴は溜め息をつきながら立ち上がり、相手の姿を確認して目を丸くして息を呑んだ。

場に現れたのは、なんと『俺』と山吹にソツクリな連中だった。いや、ソツクリなんてものではなく、外見は本人そのものである。一瞬混乱した鯉伴は、慌てて傍に居る山吹を見た。山吹も鯉伴と同様で、突然自分と同じ姿の連中が現れた事に驚いていた。何がどうなってるのかと混乱する二人を、ソツクリ集団が素早く取り囲む。よく見れば、手には刀や金棒等の武器が握られており、皆殺気に満ちた不気味な笑みを浮かべている。

長く地獄に身を置いてきた鯉伴も、こんな事は初めてだった。

「おいおい、こりゃどういふ事だい？」

「私とあの人、どうしてこんなに……？」

鯉伴はただ動じてるだけだが、山吹には明らかに怯えが見られる。自分と同じ姿を者を見れば、誰だつて気味悪がるものだ。しかもソレが一人や二人でなく、殺気だったのが何十人と目の前に居るのだ。

怯える山吹を背に、鯉伴は懐から長ドスを取り出して鈍く光る銀色の刃を抜く。

「コイツ等が何者かは分からねえが、目的は俺達のような」

鯉伴が長ドスを構えると、偽者軍団が一斉に襲い掛かってきた。

「乙女！ 俺から離れるな！」
「は、はい！」

答えた山吹は、鯉伴の着流しをギュツと掴んだ。

山吹を背に、鯉伴は偽者軍団に一人で迎えた。周りは全て敵だらけの孤立無援の状態で、鯉伴は長ドスと畏を発動させて敵の攻撃を凌ぐ。左右から刀や金棒が迫り、長ドスで防げる攻撃は受ける。防ぎきれない攻撃は、畏を使って回避する。死角から武器が迫り、完全に鯉伴の体を捉えていた。しかし、振り抜かれた武器は鯉伴の体を真つ二つに割るも、まるで手応えが無い。それどころか、鯉伴と山吹の姿は別の位置にあった。

ぬらりひよんの息子である鯉伴の畏の本質は、『夢幻』を体現すること。その神髄とも呼べるのが、『鏡花水月』と言う畏だ。相手の認識をズラし、自分の幻影を見せて惑わせて闘うのである。この畏は、三代目のリクオも使う事が出来る。

長ドスや畏で相手の攻撃を捌きかわしつつ、反撃をする鯉伴。しかし、敵の数は一向に減らない。倒しても倒しても、すぐに起き上がってくる。別に、敵が特別タフと言う訳ではない。

相手が戦いに復帰出来る理由は、鯉伴にあった。

知り合いや大切な人と同じ姿との戦いで、相手を斬る事を躊躇しているのだ。傍に本人が居るが、どうしても心に迷いや躊躇いが生まれてしまう。いや、傍に本人が居る事も斬れない要因の一つだった。本人の目の前で、姿が同じ者を傷つけたり殺す事を躊躇しているのだ。何だか、気が引けると言うか、妙な罪悪感のようなモノを抱いてしまうのである。それ故に、鯉伴は反撃の際に長ドスは使わず、蹴りや拳などで応戦している。

そして、コレこそが偽者軍団を差し向けた黒幕 山本五郎左衛門の狙いだった。絆の深い身内や仲間の偽者を目の当たりにすると、情があるが故に反射速度が鈍ったり反撃に戸惑ってしまう。こ

ういうのは理屈では無く、人間的な感情や反射の問題なのだ。今の鯉伴が、まさにそうである。頭では解っていても、同じ姿に迷いを抱いてしまう。しかも、相手への情が深ければ深い程、隙や迷いが生まれる。

ベタな作戦だが、鯉伴相手には実に有効である。実際、塵地蔵によつて操られていた幼い山吹には心を許して隙を作り、まんまと暗殺されてしまった。

飛んでくる得物を弾き、捌き、かわし、鯉伴は相手の攻撃を凌ぐ。だが、状況は好転しない。相手を倒せなくては、現状は不利なままでも何も変わらない。それどころか、下手に長引かせれば体力を消費させていずれ攻撃を受けてしまう。そうなったら最悪だ。

鯉伴は、顔を険しくさせる。頭では解っている。コイツ等は偽者で、斬らなきや背中の中は山吹は護り通せない。

その迷い、悩みがダメだった。

気が付いた時には、後ろを取られて山吹の偽者が本物ごと鯉伴を潰そうと金棒を振り下ろしていた。

「しまっ……！」

鯉伴の胸中を不安と恐怖が襲い、締め付ける。

今からでは、畏を発動させても間に合わない。回避も不可能。勿論、防御も無理だ。

しかし、鯉伴は諦めなかった。

何とか身を翻して、せめて身代りになろうとした時だった。

「本当に情けなき男だ……！」

背筋が凍るような、冷たい声と共に山吹の偽者の体に線が走った。縦に線が入った山吹の偽者の体は、ピタリと動きを止めた。そして、ズルツと身体が縦真つ二つに割れ、不快な音を立てて地面に倒

れた。赤く染まっている身体の断面から、鮮血が流れ出てあつという間に血の池を作り上げた。

驚く鯉伴の前で、少女は黒の長髪を手で払った。

「このような輩に手こずるとは」

「お前……羽衣狐か!？」

偽者の攻撃の動作に入る前に、山吹とチェンジして身体の主導権を得たのだ。

羽衣狐は振り返り、呆れた顔で鯉伴に言った。

「貴様、一体何をやっているのだ？ 貴様が不愉快な偽者共を始末せねば、山吹が殺されていたかもしれぬのだぞ？ それを、姿が同じだからと躊躇しおって…… ホンツトに情けなき男じゃ……」

言いたい放題の羽衣狐だが、鯉伴は反論出来なかった。

自分の迷いのせいで、山吹を危ない目に遭わせたのは紛れも無い事実だからだ。

「偽者を殺す事を戸惑って本当に大事なモノを失っては、元も子もなかるう。阿呆が」

「……すまねえな」

「ふんつ。貴様は、味方も敵も大事にし過ぎじゃ。敵は……」

言葉の途中で、偽者が襲ってきた。今度は山吹だけでなく、『俺』の偽者も何人が混じっている。

羽衣狐でも躊躇するか？

しかし、次の瞬間、『俺』の偽者を含めた襲撃者は皆、羽衣狐の尻尾によって物言わぬ肉片に変えられてしまった。

「容赦無く殺せばよい……！」

顔に僅かな返り血を浴びた羽衣狐は、氷のように冷たい笑みを浮かべる。

あまりに自然に、普通に相手をバラした羽衣狐に、鯉伴は目を疑って動揺した。

「え？ え？ ちょっと……ちょっと待った！ お前、手加減とか躊躇とか全く無しか！？」

鯉伴が声を上げると、羽衣狐は振り返らずに答えた。

「相手が本物でないのに、どうして躊躇や手加減の必要がある？
このような事で、妾が動揺すると思ったら大間違いじゃ」

アイツ……よく今まで生きてこれたな……。

全く容赦の無い羽衣狐を見て鯉伴は、彼女と付き合っている『俺』に感心した。

「それに……」

急に羽衣狐の雰囲気が変わった。周囲に冷たい空気が漂い、彼女の威圧感が広がる。

「妾の大事な男と山吹の姿を利用されたのだぞ……！ 不愉快じゃ……！ これ程不快な思いをさせられたのは、初めてじゃ……！ 憎く思えど、戸惑いなどせぬわ……！」

激昂。

マグマのように熱く、刃のように鋭い殺気を抱く羽衣狐は、激昂

していた。自分の大切な人の姿で、利用され、しかも自分の手で殺さなくてはならない事に激怒していた。偽者を差し向けてきた黒幕に対して、尋常でない怒りと殺意を抱く。

山本の作戦は、羽衣狐には逆効果だった。迷うどころか、逆に殺気を漲らせて偽者を狩りに動いた。金色の尻尾が綺麗な線を描き、同時に血の雨を降らせる。身体を斬り裂き、偽者を殺していく。

別の偽者達は、鯉伴を仕留めに動いた。先ほどまで迷いを抱えていた鯉伴の方が、仕留めやすいと判断したのだ。

しかし、その判断は誤りだった。

偽者の得物が届く寸前、鯉伴の刃が走った。直後、山吹の偽者も『俺』の偽者も崩れ落ちた。血が飛び散り、灰色の地面を赤く染める。斬り捨てた死体を後ろに、鯉伴は言った。

「そうだな……俺あ馬鹿だった。また、大切なモノを失うところだったぜ」

羽衣狐の言葉で、鯉伴の中の迷いが消えた。光の宿った鋭い目が蘇り、眼前の敵を睨む。

敵に突っ込む前に、羽衣狐に言う。

「すまねえな。アンタのお蔭で目が覚めた。助かったぜ」

「貴様に礼を言われても、何も嬉しく無いわ」

相変わらず、鯉伴に対してSな羽衣狐だった。

だが、コレで事態は好転した。迷いが消えた鯉伴と元々迷いなんか無い羽衣狐が攻勢に出て、次々と偽者を蹴散らしていく。偽者の実力は本物より上だが、個々の戦闘力は明らかに羽衣狐と鯉伴が上回っていた。その光景は、現世での公園の惨劇の再現だった。相手が鬼から偽者になっただけで、状況は同じだ。

戦況は、明らかに羽衣狐側が優勢である。

その時だった。

羽衣狐……！

何だ山吹？ 今取り込み中じゃ！

戦いの最中に、中の山吹から声をかけられた。一心同体の彼女達だけの、“心の会話”のようなものだ。

私達の姿で襲ってきたと言う事は、私達が狙いなのは間違いありません。

そんな事は妾も解っておる。わざわざそんな事を伝えに出てきたのか？

まだ解らないんですか？ 私達が狙われてると言う事は、あの人も標的で危ないと言ってるんです！

山吹の言葉で、羽衣狐は目を見開いた。愕然とした表情で、見る顔が蒼ざめていく。

し、しまった……！ 今、あ奴の側には誰もおらん……！ 妾とした事が……！

すぐに羽衣狐は、『俺』の元に行こうとした。

しかし、偽者軍団が行く手を阻む。かなりの数が残っていて、一々相手をしていたら時間がかかってしまう。

忌々しそくに顔を顰め、羽衣狐は尻尾に手を突っ込んだ。

「邪魔だ！」

声を発した直後、尻尾に突っ込んでいた手を出した。その手には、ある武器が握られていた。

自分の尻尾から取り出したのは、真っ黒な弓と矢だった。宙に跳んで距離を離し、眼下の敵に弓矢を構える。

「六尾の弓矢っ……！」

黒の矢に妖気を通し、敵の群れに向かって放つ。

放たれた矢は一直線に走り、纏った物凄い風圧で周囲の敵を巻き込んだ。矢自体も相手を貫き、一気に沢山の敵を蹴散らした。

「おいおい、そんなんありかよ？ とんでもねえな！」

近くで矢の威力を見ていた鯉伴は、度肝を抜いて苦笑いを浮かべる。

しかし、今の一撃で大分敵の数は減った。相手も羽衣狐の一撃の威力に畏れ、動きが鈍くなっている。一気に潰すなら、今がチャンスだ。

無事であるのだぞ、人間っ……！

敵を斬り捨てながら羽衣狐は、『俺』の無事を祈った。

*

ケルベロスの場の近くの崖の上で、『俺』は変わり果てた山ン本五郎左衛門と対面していた。

な、何だよ、コイツ……！？

突然現れた山ン本に、『俺』は恐怖して心臓の鼓動が早まる。恐ろしい形相を目の当たりにして、全身に悪寒が襲い掛かり、体の震えが止まらない。止めどなく冷や汗が流れ、顔色も悪くなっていく。そんな『俺』を見て、山ン本が忌々しそくに歯のみの口を開いた。

「こんなガキに、ワシの左目が潰されるとはあ……一生の不覚だ……！」

「あ、あの……貴方は、誰なんですか……？」

恐る恐る尋ねる『俺』に、山ン本は低い声で答える。

「忘れたとは言わせんぞ〜！ ワシの左目は、お前に潰されたんじや〜！ この山ン本の目をな〜〜！」

「ひ、左目を……？ 山ン本……？」

恐怖で麻痺した脳を必死に働かせ、聞いた名前を反芻させる。

左目と言うキーワードも手掛かりに、心当たりが無いが記憶を辿る。

そして、『俺』の思考は辿り着く。

ああっ……！！

気付く。

目の前の化け物が、何者であるか気付く。

式條城で、塵地藏を名乗る“山ン本の目玉”なる老妖怪が居た。

ソイツは、『俺』との直接対決で土壇場の策に引つ掛かり、更に羽衣狐に体をバラバラに斬り裂かれ、死んで地獄に堕ちた。

しかし、死ぬ前、晴明が復活した直後に「山ン本は百に分かれてる」とか何とか言っていた。塵地藏がその百の内の一体で、元が目の前に居る化け物だとしたら。

山ン本……！！ コイツが、山ン本五郎左衛門本体っ……！！

ついに、相手の正体が、山ン本五郎左衛門だと気付いた。

山ン本は、無い左目を擦って言う。

「この潰された左目の恨みい、晴らさでおくべきか〜！ ココで会ったが百年目え……貴様は、ワシ自らの手で殺す……！！」

鯉伴に対する怨念並に、目を潰した『俺』を恨んでいた。

地獄で作った下部から、『俺』と羽衣狐が堕ちた事を知って復讐に動いたのだ。現世に復活する前に、自分の手で殺そうと思ったのである。

対する『俺』は、相手が山ン本と知った途端に俯いてしまった。

しかし、ソレも長くは続かなかった。

「そうか……アンタが山ン本さんか……」
「あ？」

怪訝そうに山ン本が声を出すと、『俺』は顔を上げた。
現れた『俺』の顔は、恐怖に染まり切っていなかった。怯えは混じっているが、ソレ以外の感情が占めていた。

「俺も、アンタを殺したいと思ってましたよ……！」
「ああ？」

不快そうに山ン本が睨み、『俺』も目を逸らさず向かい合う。

恐い。異形の姿と化した山ン本を見て、臆病な『俺』が恐いと思わない訳が無い。

しかし、今回は別の感情が恐怖を凌駕していた。

コイツが……コイツが、羽衣狐や山吹さんを利用した黒幕っ

……！

自分の大切な人達を利用した憎き敵を見つけた怒りが、心の中で燃え上がっていた。

正直、恐いけど……コイツは……コイツだけは、俺の手で倒さなきゃならねえ……！

決意を胸に、『俺』は地に着けてた腰を上げた。畏れを潰すように一歩踏み出し、山ン本と正面から対峙する。

羽衣狐も誰も居ない、孤立無援の場。

命を賭けて、今、挑む！

八ノ怪：因縁の衝突（後書き）

感想・質問お待ちしております。

九ノ怪：魔犬の威

世の中には、時と場所を選ばなければならない場面がある。

例えば、電車の中で携帯電話の通話を使用してはならない。これなんてのは、身近で分かりやすい例である。他にも、図書室では静かにするとか、映画館では携帯電話の電源を切らなければならないとか、色々ある。え？ 携帯電話の例が二回使われてるって？ 前者は電源を切る場合とそうでない場合があり、後者は電源を切っておかなければならないと言う違いがあるのでいいんです。別物なんです。

とにかく、このように世の中には時と場所を選ばなければならない場合があるのだ。選択を誤ると、周囲の人から非難の目で見られたり、時には注意される時がある。

まあ、アレだ。他人の迷惑になるような事はしてはいけない、と言う事だ。

相手の大切な時間を邪魔したりすると、ロクな目に遭わない。

この事を、頭の片隅にでも置いて欲しい。

地獄で因縁浅からぬ敵・山本五郎左衛門と直接対峙する『俺』。相手の体格がデカい為、自然と見上げる形になる。黒い輪郭のみの頭部に浮かぶ右目が、ギョロリとこちらを睨んでくるのには、正直ビビる。何と言うか、妖怪と言うよりゾンビみたいな感じだからだ。妖怪の場合は『怖い』が大半だが、山本の場合は『気持ち悪い』だった。怖いと気持ち悪いが合わさって、恐さが倍増してるのだ。流石はキモい塵地蔵の本体だけあって、見た目の恐さだけなら今まで出会った妖怪中一、二位を争う容姿だ。

顔面の醜悪さに加え、山本は無言のプレッシャーを与えてくる。怖い。足が爆笑寸前になる程怖い。目に涙が溜まっていて、今に

も泣きそうだ。

逃げたい。正直、今すぐダッシュで逃げ出したい。こんな化け物と関わる事なんて、望んでいない。

だが、しかし、『俺』は動かず、逃げなかった。泣かずにその場に留まり、正面から山ン本と対峙する。

確かに自分は臆病者だし、相手は化け物で凄く怖い。けど、コイツの前から逃げてはいけない。羽衣狐と山吹を利用した卑怯な悪党の山ン本を、自分の手でぶちのめしたいと思ったからだ。それに、京で散々恐い妖怪を見てきた。今更、一匹や二匹でいちいち恐がるな、と心中で自分に言い聞かせた。

『俺』は、変わったのかもしれない。何がどう変わったのか、明確に、具体的に言い表す事は本人にも出来なかった。だけど、少なくとも、他人や自分の為に臆しながらも退かないのは、以前の『俺』とは違う部分だろう。

逃げずに睨み返してくる『俺』を見下ろす山ン本は、コキツと首の骨を鳴らした。

「ワシを殺すだと！ 生意気言いおつて、クソガキがあゝ！」

怒声を発した山ン本は、懐から鞘に収まった刀を取り出した。

一瞬驚く『俺』だが、必要以上に動揺しなかった。あの塵地蔵の本体なのだ。武器か何かを隠し持っていたても、不思議じゃない。それよりも今、自分がするべき事を考えるのだ。

鞘から刃を抜き、刀を振り下ろす。

「死ねエエエエエエエエエ！」

上から振り下ろされる刀は、しかし『俺』を斬る事は無かった。

『俺』の方が行動が早く、既に横に移動して攻撃の軌道と刀の間合いの外に出ていた。臆病者故の回避能力が、ココで活きた。コレ

は回避であって逃げではない。戦略的回避行動なのだ。

「待ちやがれ、ガキがアアアアア！」

恨みと殺意に満ちた声を上げ、刀を振り上げて山本が追いかけてくる。

待てと言われて待つ馬鹿はいねえよ、と心中で叫んで『俺』は走って距離を保つ。相手は武器を持つてるので、まずは距離を広げて斬撃が届かないようにする。こっちは素手で殺し合いは素人なのだから、下手に応戦出来ない。

考える……！ まず考える、俺……！

山本に追跡されながら『俺』は、思考を働かせる。

弱い自分が凶器を持った相手に正面から挑んだら、殺されるのは目に見えている。だから、無意味な特攻はせず、今は打開策を考える事に専念するのだ。逃げながら周囲を見回すが、武器になりそうな物は見当たらない。

ああ、くそっ！ 何で何もねえんだよっ……！

何も無い荒野に、『俺』は苦い顔で舌打ちした。道具も何も無い状態では、身を護る事すら難しい。

マズイ。

無策で挑んだ事を早くも後悔するも、今更後戻りなど出来なかった。こうなったら、今の状況から逆転する策を考えるしかない。今までは、近くに羽衣狐や誰かが居て、助けてもらってきたが、孤立無援の現状では期待出来そうもない。

つまり、自力で何とかしなければならぬ。

「動くな、ガキいゝ！」

「なっ！？」

不意に横から山本の声が聞こえ、『俺』は弾かれたように振り

向いた。

山ン本の巨体を考えたら、そう簡単に追いつかれる事は無い。だからこそ、すぐ横で山ン本の声が聞こえた時、虚を衝かれたように驚いた。まさか、そんなハズ、と思いながら見た先に、衝撃の光景があった。

目玉。

山ン本の目玉が、横に張り付くように浮いているのだ。

「ワシの“目”からは、逃れられんぞ〜！」

山ン本の右目。追跡の右目。

「うの……！」

気味悪がる『俺』は、腕を振って払い落とそうとする。しかし、右目は素早く宙を動いて腕をかわす。

しつこく付き纏う右目にイラつき、意識を逸らしたのがいけなかった。地面の小さな窪み、段差に躓き、バランスを崩して倒れてしまっ。

「うわあああっ！」

ああ、馬鹿馬鹿っ！ 何コケてんだよ、俺！？

何とか両手を地面に着き、全身を地面に倒す事だけは防いだ。それでも、自分の失態に心中で罵る。

その時、背中に悪寒と殺気を感じた。

ヤバイ。

ココに居たら、コロサレル。

脳が、本能がかつてない危険信号を発し、『俺』は逃げ出す。すぐには起き上がれないが、四つん這いで前に動く。進む。前進する。

背中に迫りくる、脅威から逃れる為に。
そして次の瞬間、『俺』が居た所に山本の刀が振り下ろされた。しかも、地面が鈍い音を立てて、僅かに窪んだ。亀裂を走らせ、小さなクレーターを作った。

「ちっ……！」

仕留め損ねた山本は、舌打ちした。

振り返り、今の一撃を見た『俺』は蒼ざめた顔で震えていた。

あ、危なかった……！ もう少し……あともう少し反応……逃げが遅れてたら、殺^やられてたっ……！

殺されかけた恐怖で、心臓は今までに無い速さで鼓動を刻む。

どういふカラクリで、あんな威力を持つてるかなんて問題では無かった。問題は、自分と山本の力の差が、塵地蔵戦の時以上に開いてると言う事だ。

右目で相手を捉え追跡して、高い威力を備えた刀で斬りつける。

逃げ切れない上に、実力まで離されては戦況は厳し過ぎる。何か突破口を見つけないければ、なぶり殺しにされてしまう。

危機感をビシビシと肌で受け、慌てて『俺』は立ち上がった。再び山本から距離を離す為に、走り出す。防御の手段が無い以上、とにかく刀の間合いに入ってはならない。

「チヨロチヨロ逃げ回るな、ガキがあゝ！」

憎悪と殺気のコもった刀を振り上げ、山本が追いかけて来る。

迫りくる恐怖を背中に感じて、『俺』は息を荒げて走り続ける。死人なのに、何で息苦しくなるんだと言う疑問が一瞬浮かんだが、すぐに頭の片隅に追いやった。このまま走り続けても、体力を消費するだけで最終的には疲れて追い付かれ、殺されてしまう。

な、何か、無いか……？ 何とか、生き残る方法は……無い

のか……？

藁にもすがるような思いで、周囲を見渡しながら『俺』は考える。何か助かる手段は無いか、必死に探す。

何でもいい……何でもいいんだ……！ 俺は、まだ消えたくないっ……！ 生きたいっ……！

懇願。

涙目になり、心の中で必死に懇願までする。

その時だった。

ああっ……！

見つける。

追い詰められた状況で、『俺』は見つける。起死回生の突破口を。

だが、しかし、『俺』の顔は依然険しいままでだった。発見した策は、決して素直に喜べるようなモノでは無かったからだ。

けど……このまま何もしなかつたら、どっちにしろ山本に殺される……。だったら……！

心中の葛藤の末、『俺』は覚悟を決めた。

走り続ける『俺』は、足を止めずに素早く身を低くして、転がってる大きめの石ころを何個か拾った。それから狙いを定め、力一杯放り投げた。

しかし、投げた石ころは山本とは別のあらぬ方向に飛んでいった。

「何処に投げとんだあ！？ 間抜けがあああ！」

追い付いた山本が、刀を振り下ろす。

迫る刃が当たる寸前、『俺』は横に跳んで間一髪で斬撃を避けた。しかし、刃に纏う衝撃の余波を受け、足を傷つけてしまう。受け身も取れず、『俺』は地面に体を倒した。

「いつつう……!」

右足を手で押さえ、その場に蹲すくまる。衝撃の余波を受けた足は、刃で斬られたような傷があり、出血を起こしていた。これでは、もう走る事は出来ない。

「足を潰されれば、もう逃げる事は出来んぞ……!」

手負いの獲物に、ゆっくりと近づくと近づく山ン本。
倒れてる『俺』の前に、着いた時だった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお!」

突然、『俺』が声を上げた。腹の底から、あらん限りの声を出す。
喉を痛める程の大声を荒野に上げた『俺』は、案の定咳き込んだ。

「何の真似だ……?」

意味不明な『俺』の行動に、山ン本は違和感を憶えた。

しかし、深くは気にしなかった。例え、今のが自分の危険を羽衣狐達に知らせる為の行為だったとしても、駆け付けるのに時間がかかる。すぐに、この場に着くのは不可能だ。

だから、山ン本は深くは考えなかった。

「今度こそ、悪運尽きたなガキい〜!」

山ン本の右目が、恨めしそうに『俺』を見下ろす。

「ワシの左目は、不覚にもお前の小細工に嵌まり、羽衣狐の乱入を

受けて散った……。だが、今回は違う……。こんな何も無い場所では、小細工のしようが無い……。しかも、仲間の助けは絶対に入らない……。！　つまり……。お前が助かる可能性は、0だった……。！」

勝利を確信した山本は、精神的にも『俺』を追い詰めようとした。

誰が見ても、山本の勝利は明らかだった。これで、彼の復讐は達成される。

復讐の標的を追い詰め、今まさに殺ろうとした刀を構えた時だ。

突如、山本の全身を悪寒が襲った。自分の背後から、巨大で禍々しい殺気を感じるのだ。恐る恐る振り返り、小刻みに震える右目が捕えたのは　ケルベロス。

地獄の番犬・ケルベロスが立っていた。大きく開かれた口から涎を垂らし、低い唸り声を上げている。心なしか、機嫌を悪くしているように見える。

「なっ……。なっ……。！？」

予想外の怪物登場に、山本は取り乱す。

「ば、馬鹿なっ……。！　ど、どうして、コイツが……。こんな所に……。！？」

混乱と恐怖で一杯の脳を回転させ、山本は考える。

さっきまで、崖下の荒野で寝ていたハズのケルベロスが、どうして現れたのか？　何かしたとすれば、『俺』以外には居ない。山本の脳は、今までの記憶を辿る。

山本から逃げる『俺』は、途中で石を拾って見当違いの方向に投げた。そして追い詰められた時、何を思ったのか急に大声を上げた。

あああつ……！

そこまで記憶を探った時、山ン本は気付いた。

あの時、『俺』が石を投げた先には、崖下の荒野で寝ているケルベロスが居たのだ。運良く場所が近かったので、投げた石はケルベロスの近くに落ちた。石が地面に落ちた時の音で、ケルベロスは目を覚ました。聴力が発達しているケルベロスを起こすには、ソレで充分だった。仕上げに、『俺』が大声を上げる事で自分達の位置を知らせた。眠りを妨げられた番犬は、怒りを露にして起き上がり、罪人を裁きに動いたのだ。

全て、『俺』の計算された策だった。山ン本の言う通り、『俺』は一人では何も出来ない非力な人間である。だから、今回も強者の力を借りる事にしたのだ。

更なる強者に睨まれ、山ン本は微動だに出来なかった。

そんな彼の後ろで倒れてる『俺』は、自分の命を諦めて開き直ってるのか、嫌な笑みを浮かべていた。

「時と場所は考えなきゃ……」

『俺』が台詞を言い終えるのと、ケルベロスが噛みついたのは同時だった。

「ま、待て待てまあ……ぎゃあああああああああああ！」

必死に悪あがきをする山ン本だが、地獄の番犬の牙からは逃れられなかった。

大きな口は、一噛みで山ン本の体を捕えた。顎の力は凄まじく、巨体の山ン本の体を軽々と喰い千切った。喰い千切られた部分から、鮮血を噴水のように噴き出すと共に耳障りな悲鳴が荒野に響き渡る。肉を噛み、骨を砕く不快な音が鳴る。魔犬の三つ首が、それぞれ手足、胴体、頭を食している凄惨な光景だった。

目の前に倒れてる『俺』は、山本本の夥しい血を体に浴びる。腹の底から吐き気が込み上げてくるが、何とか堪えた。

一分も経たない内に、山本五郎左衛門はケルベロスの胃の中に収まった。

口の周りに付着した山本本の血を舌で舐め、次の標的に鋭い眼光を向けた。視線の先に居るのは、他でもない『俺』だ。

恐れ……。

間近で魔犬を目にして、『俺』は恐怖に縛られて体の自由を奪われた。睨まれ、金縛り状態になってしまった。

自分の最期を悟り、自然と涙が溢れ出る。出来る事なら、死ぬ時は羽衣狐の傍が良かった、なんて事を思う。

その時だった。

「人間！」

遠くから、聞き覚えのある声がした。

何とか顔を動かし、声の主を見た。

こちらに向かつて走っている羽衣狐達と鯉伴の姿が、目に入った。必死に走っているが、距離的に間に合わない。

最期に羽衣狐を見た事が唯一の救いだ、と思った。

そして、ケルベロスが大きな口を開き、『俺』に噛み付こうとした時だった。

「待てっ！」

突然、男の声が上がった。

すると、凶悪な番犬が声に従うように、動きをピタリと止めた。

『俺』は怪訝な顔で、動きを止めたケルベロスを見上げた。

「おすわり……！」

続いて出た指示に、ケルベロスは従順な犬のように地面に座った。

「え……？」

凶悪な魔犬とは思えない動きに、『俺』だけでなく離れている羽衣狐と鯉伴も意外な顔になる。

「お怪我はありませんか？」

「え……？」

不意に後ろから尋ねられ、『俺』は振り返った。

ソコには、両脇に荷物を抱えた側近のような鬼を連れた、一鬼が立っていた。

見知らぬ人に声をかけられ、『俺』は戸惑いながら聞いた。

「は、はい……。あの、貴方は……？」

「ああ、これは失礼。貴方には、まだ名乗ってませんでしたね。この地域の地獄を担当しています、一鬼と言つて者です。以後お見知り置きを」

羽衣狐に名乗った時と同じく、礼儀正しくお辞儀をする一鬼。

ついに顔を合わせた二人の男。

地獄に堕ちた『俺』の眼前に、一鬼現る！

九ノ怪：魔犬の威（後書き）

次回から新章『魔犬討伐逆転編』スタートです！

感想・質問お待ちしております。

十ノ怪：仮の生還

薄らとした意識の中で、誰かの声が聞こえる。感じからして、女の声だ。聞き覚えのある声は、意識が覚醒していくにつれて、大きくハッキリと聞こえてくる。

瞼越しに、明るい光が照らされる。薄目を開けると、更に光は強くなり、網膜を突き刺す。この光には、覚えがある。

陽 太陽の光だ。

手をかざして目をガードして、『俺』は陽の光である事を確信した。生命に等しく降り注ぐ、暖かみある光だ。

「ああ、良かった。気が付きましたか？」

太陽の光に気を取られていた『俺』に、ホッとした声がかかった。『俺』は視線を落として、声の主を見る。

声の主は、長い黒髪で、学生服を着た女の子だった。中学生くらいだろうか、かなり可愛い女の子だ。

「一人で倒れていたから、ビックリしました。あの、私の事分かりますか？」

女の子は、心配そうに顔を覗き込んできた。

可愛い顔が近付き、『俺』は頬を赤くさせ、少し戸惑いながら答える。

「ええつと………すみません。どちら様でしょうか？」

分からなかった。

声には聞き覚えがあるのだが、誰なのかイマイチはつきりとしな

い。

すると女の子は、一人納得したように手をポンツと叩いた。

「ああ、申し訳ありません。人間に化けた時の姿は、見せてませんでしたね。では、これでどうでしょうか？」

女の子の顔の一部が、変化した。

変化した箇所を見て、『俺』は女の子が誰なのか思い出す。

「ああ……！ えっと、確か奴良組に居た雪女さんで……名前は……」

「下の名前は、氷麗と言います！」

「そうだ、氷麗さんだ」

宴会の時に、酔った勢いで口説こうとしたのを思い出して、思わず『俺』は苦笑いになる。

変化したのは、目だ。最初に見た時は、何の変哲も無い黒い瞳だった。ソレが、黄色のグルグル目と言う独特の瞳に変化したのだ。あのグルグル目は、忘れる事は出来ない。

相手が氷麗と解った『俺』は、周囲を見回した。すぐ背中には、コンクリート製の大きな建物が建ってる。自分が居る場所は、草木があつて少し狭い敷地だ。氷麗の恰好から推測するに、多分学校だろう。そして、ココは学校の裏庭か何処かだろう。

足腰に力を入れて、『俺』は立ち上がった。

太陽、空気、茶色の土、生きてる人、学校、コレ等の事から導き出される答えは一つだ。

帰ってきたんだ、この世界……現世につ……！

陽の光を全身で浴び、『俺』は心中で歡喜する。至福の時と言ってもいい。それ程までに、現世への生還は喜ばしい事なのだ。明るい太陽の光を浴びる事で、自分が生きてるのだと実感出来る。

「あの……」

生還に一人喜んでいると、後ろから氷麗に声をかけられた。振り返った『俺』と向かい合い、氷麗は続けた。

「こんな所で、羽衣狐も連れずに一人で何をしてるんですか？ それに……」

言葉を切り、氷麗は険しい顔で視線を落とした。

彼女の視線の先には、『俺』の右手首があった。ソコには、黒い数珠のような物があった。しかも、ただの数珠ではなく、黒い妖気のようなモノが包んでおり、禍々しさが感じられる。

氷麗の指摘で自分の右手首を見た『俺』は、微妙な笑みを浮かべた。

「まあ、ちよつと訳ありだね……」

黒い数珠を見ながら『俺』は、地獄でのやり取りを思い返した。

*

山本五郎左衛門の襲撃を受けた羽衣狐と『俺』であったが、各々相手を撃破して生き残った。

しかし、山本を倒す為にケルベロスを利用した『俺』は、再び窮地に陥る。だが、絶体絶命の窮地から彼を救ったのは、意外な人物だった。手下を引き連れた一鬼が、ケルベロスに命令を出して動きを止めてしまったのだ。

一同が驚く中、一鬼は手下の二体の鬼を連れて、ケルベロスに近づく。

「人間！」

ケルベロスが動く気配が無いのを察した羽衣狐と鯉伴が、駆け寄ってきた。

「大丈夫か、人間！？」

「は、はい。まあ、何とか……」

努めて笑みを浮かべ、無事である事を伝える。

足を怪我しているが、傷は深くは無い。鯉伴が着流しの裾を破り、傷口に巻いて止血を施す。

そんなやり取りをしてる三人の横を通り過ぎ、一鬼は言う。

「ふふふ。しかし、貴方は本当に運がいい」

「え？」

振り返り、『俺』は一鬼の背中を見る。

一鬼は振り返らず、目の前でおすわりをしているケルベロスを見ながら続ける。

「実は、そろそろコイツの餌の時間ですね……私がココに来たのは、本当に偶然なんですよ。ですから、貴方は運がいい、と言ったのです」

一鬼は、手下の鬼に指示を出して持っている荷物を降ろさせた。

袋の中から取り出されたのは、縛られた沢山の死者達だった。手足を縛られ、完全に体の自由を奪われている。それに薬でも使われ

べ尽くす。

食事の様子を目の前で見てる一鬼は、笑みを浮かべて言った。

「ウチのペットは食欲が旺盛でしてね、いつも大量の死者を用意しなければいけないですよ」

「ウチのペット、じゃと……？」

一鬼の言葉に、羽衣狐は目を細めた。

ええ、と答え、一鬼は三人に振り返る。

「ケルベロスは、私が造った、私の忠実な番犬なんですよ……！」

羽衣狐と鯉伴の目が、同時に見開かれた。

驚きの事実だが、それならばケルベロスが一鬼の命令に忠実なものも領ける。創造主の言う通りに動くよう造られているならば、命令に従わせる事は可能だ。

食事を終えると、ケルベロスは崖下の荒野に戻った。先ほど寝ていた地点で伏せ、また眠りについた。

「あの番犬は私の自信作です。アレの手にかかれば、何人たりとも外には出さないっ……！」

不敵な笑みを浮かべ、一鬼は絶対の自信を表す。

「げほっ……げほっ……そうですか……」

「人間、大丈夫か？」

縦に頷く『俺』は、羽衣狐に支えられて立ち上がる。顔色は、まだ少し悪い。

険しい顔の『俺』と余裕の笑みを浮かべる一鬼が、沈黙して向か

い合つ。

不意に訪れた静寂を先に破ったのは、一鬼だった。

「ふふ、そう恐い顔しないで下さい。私は、貴方に感謝してるんですから」

「感謝……？」

片眉を上げ、『俺』は怪訝な顔になる。一鬼に感謝されるような事は、した覚えがない。

肩を竦め、迷惑顔な笑みで一鬼は語った。

「実は、貴方が始末した山ン本は、現世に残した自分の分身のような妖怪に畏れを集めさせ、復活を企んでたんですよ。少し前にも、地獄から安倍晴明が現世の妖怪の協力を得て復活しましてね。まあ、その晴明は体の不完全故に別エリアの地獄に一旦身を置いてますが、地獄を指揮している私共としては些か問題でして……。コレ以上、ココでのルール外での勝手な蘇生は許さないよう、山ン本に釘を刺そうと思つてたんですが手間が省けました」

最後に一鬼は、ニコツと笑顔を浮かべた。

「そのお礼として……どうです？ 現世への一時生還など……？」
「え……？」

一鬼の驚きの謝礼に、一同は目を丸くして驚く。

『俺』と羽衣狐は、死者が巢食う地獄に堕ちているが、死んではない。一鬼によって、生きたまま地獄に堕とされたのだ。地獄とは、死んで逝く場所だが、死ななければ行けない訳ではない。地獄に通じる門や穴をくぐれば、生者でも辿り着く事が出来るのである。ソレは、地獄に還る晴明についていった茨木童子や鬼童丸がいい例

である。

つまり、肉体を持った生者である『俺』と羽衣狐は、地獄の支配者の許しさえ得れば、現世に生還する事が可能なのだ。

そして、一時生還に選ばれたのは、山本を葬った『俺』一人のみ。

「どうです？ これから送る長い地獄暮らしの慰めに、是非……！」

まるで商売笑顔のような顔で、一鬼が勧めてくる。

この時、『俺』の心は迷っていた。一時的だが、地獄を抜けだせる魅力的提案。しかし、自分一人だけとなると悪い気がする。

「行け、人間」

迷っていると、後ろから羽衣狐に後押しされた。

「え？」

「現世に残した狂骨達に、何も言えぬまま地獄に堕ちてしまったからのう。今頃心配してるやもしれぬ……妾が無事である事と必ず帰ると伝えてくれ」

ニコリと笑い、羽衣狐は下僕への伝言を『俺』に託した。

鯉伴も頷き、『俺』の一時生還に同意した。

二人の意を受け、『俺』は一時生還をする事を決めた。その様子を、一鬼は腹の中で笑って見ている。

ふふふ。せいぜい、最後の娑婆での時間を噛み締める事だ……！

甘い夢を見せ、最後にどん底に突き落とす。

一鬼は、決して親切心や感謝の気持ちから一時生還を勧めた訳ではない。現世から地獄に戻った時、きつと完全生還は叶わぬ夢だと

絶望するだろうと言う読み、狙いがあったのだ。
それから『俺』は手続きを済ませ、自分の現在地や地獄からの迎
えを超越す黒い数珠をつけられ、現世に生還した。

*

地上 現世に一時生還を果たした『俺』は、浮世絵町にある中
学校に居た。

ココは、奴良組のリクオが通っている学校で、幹部に昇格した雪
女の氷麗も護衛として着ている。今は終業式を終えて、冬休みに突
入したので、学校には部活生の姿しかない。

氷麗は、リクオが半ば強引に入れられた『清十字怪奇探偵団』な
る近寄りがない部活で来ている。当然、護衛である氷麗も学校に來
ていて、裏庭で待機しようとして訪れたら偶然倒れてる『俺』を見
つけて介抱してくれたそうだ。

エエ娘やな、と思いながら『俺』は氷麗の後について校舎内の階
段をのぼっていた。二人が向かっているのは、屋上である。地獄で何
も食べてなかった『俺』は、腹を空かせていた。ソレに気付いた氷
麗が、家で作ってきた弁当を分けてあげると優しい言葉をかけてく
れたのだ。

この娘、ホンツト優しいわ。半分惚れかけてますよ？ まあ、
こんな事羽衣狐にバレたら、間違い無く半殺し決定だろうけど……。
ソコで『俺』は思考を切り替え、真剣な表情を作る。

さて、あんまりのんびり出来ないんだよね……。

現世での滞在期間は、今日を入れて約二日間。

現世には戻れたけど、コレも一時的だし……最終的には、や
っぱアレを攻略しないと意味が無い……。

『俺』の頭を占めていたのは、地獄の番犬・ケルベロスだった。

生還への道を閉ざす番犬には、三つの関門のようなモノがある。まず一つ目が、驚異的な戦闘能力。数々の亡者達を殺し、喰らい、得てきた膨大な畏。強大な妖気によって強化されている肉体は、まさに全身凶器とも呼べる。その瞬発力と攻撃力は、『俺』も鯉伴と共に垣間見ている。コレが第一関門。

そして二つ目、放射の口。ケルベロスは、三つの頭部の口から、それぞれ雷、炎、氷を吐いて攻撃する事が出来る。コレが、厄介な能力なのだ。口からの放射攻撃を可能となると、『内部破壊』の戦略はほぼ破綻となる。あの炎や氷がどの器官から噴射されているのか詳しくは不明だが、口から喉を通って体内に侵入する計画は危険が大き過ぎる。『俺』の計画を崩した厄介な第二関門。

最後に三つ目が、予知の頭。鯉伴が、今までのケルベロスの戦いを見て気付いた最大の関門である。三つ首の内、真ん中の頭は、いち早く相手の動作を察知して行動している。実質、体の主導権は真ん中の頭が握っていると言っている。危機察知能力に優れた奴は、まるで相手の動きを予知していたかのように動き、隙を衝いて喰らうのだ。地味だが、間違い無く最大の難関だ。

この三つの関門をクリアしなければ、ケルベロス討伐は不可能である。

正直、『内部破壊』の手を潰されると苦しいな……。あんな図体のデカイ奴を相手にするととなると、正攻法じゃまず勝ち目は無い。こっちの戦力は、羽衣狐と鯉伴の二人のみ。二人共相当な実力者だけど、それでもケルベロスの方が上だ……。真正面から挑んで勝てるとは思えない。

考えれば考える程、ケルベロスの強大さに成す術を失くす。気持ち沈んできたところで、屋上への扉が氷麗の手によって開かれた。

解放された扉から、眩しい陽の光が差し込まれる。屋上に出て、再び太陽の下に出る。屋上には、自分と氷麗以外に学生の姿は見えない。誰も居ないからこそ、氷麗もこの場所を選んだのだ。

「さあ、どうぞー！」

「ああ、ありがとう」

素直に氷麗の優しさ、厚意に甘える事にして『俺』は床に腰を降ろす。

「でも、本当にいいんですか？」

「はい。困った時はお互い様じゃないですか」

明るい声で答える氷麗の笑顔が、太陽の光もあつて眩しく見えた。

ホント、氷麗さん良い人だ……！

有り難く思いながら『俺』は、氷麗から弁当箱を受け取った。

その時、

「つつ……！？」

弁当箱の感触に、『俺』は頬を引き攣らせ、苦笑いになった。

「つ、冷たい……！　まるで、ついさっきまで冷蔵庫に入ってたよつな感じだ……！」

蓋を開ければ、中に詰まってるのは見事に凍ったオカズとご飯だった。

氷麗が用意した弁当箱の中身を見た『俺』は、苦笑いが解けなかった。

「か、完全な冷凍食品じゃねーか。解凍しないで、そのまま持ってきたよつなもんだ……。雪女だからか？　そういやあ、『ぬべ〜』のゆきめも最初は凍った料理しか作れなかったっけ……。コレは二次元、三次元問わず雪女共通の事象なのか……？」

そんな事を思いつつも、『俺』はカツチンコツチンのオカズを口の中に運ぶ。折角、氷麗が自分の弁当を分けてくれたのだから、贅

沢は言つてられない。

噛むと、予想通りガリゴリと固い食感がした。
しかし、

「美味しい……！」

味は、予想外にも美味かった。

「良かった〜！ お口に合つて安心しました」

感想を聞いた氷麗は、隣で嬉しそうに笑った。

いや、マジで美味いわ……！ ちょっと……いや、かなりビツクリだ。完璧に凍った状態なのに、味は少しも落ちてない……違和感も無い……。どういうトリックだ……？

疑問に思いながらも、次々にオカズを口の中に運んでいく。
もしかして、何か隠し味でも仕込んでるんじゃないか？ 氷

麗秘伝の隠し味的な……！？

ソコまで思った時、ピタリと『俺』の動きが止まった。
脳に閃光、閃きが走った。

「どうしたんですか？」

急に箸の動きを止めた『俺』を見て、氷麗は小首を傾げた。
しかし、氷麗の疑問の声は『俺』には聞こえていなかった。
手に持つ弁当箱を見つめる『俺』の思考は、目まぐるしく回っていた。過去の記憶を遡り、ある事を確かめる。ソレが済めば、自分の脳裏に浮かんだ策の検証に移る。

「えっと……だから……」

箸の先端を、弁当箱に当ててカチカチと音を鳴らし、一人思考を働かせる『俺』。

隣に居る氷麗は、そんな彼の様子を黙って見守るしかなかった。そして、『俺』の脳内で、ある攻略法が完成した。

「おおっ……！」

「ひゃあ!？」

興奮高まった『俺』が急に声を上げ、氷麗は驚く。驚いた拍子に、グルグルな目が更にグルグルを増した。

そんな氷麗の反応も意に介さず、『俺』は一人興奮してる。

「イケる……イケるかもしれない！ 条件さえ揃えば、少なくともあの悪魔染みた戦闘能力は攻略……第一関門を突破出来る！」

『俺』は、不敵な笑みを浮かべた。

現世に一時生還をした『俺』は、思いもよらぬ天啓を得る。

そして、ここから怒涛の『ケルベロス攻略』の閃きが始まる！

十ノ怪：仮の生還（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ライトさんからの質問。

『質問です。一鬼には何かモデルとなる妖怪はいるのでしょうか？
もしいるのでしたら教えてください。』

赤夜叉「モデルとなる妖怪は居ません。人間の主人公の敵として、人間っぽい妖怪にしたいと出しました。一応、鬼なので角はあるんですが、気に入らないと言う事で普段は隠しています」

質問ありがとうございました！

質問は、引き続き募集中です。

十一ノ怪：閻門の突破

地獄に残っている羽衣狐は、広い荒野を散歩していた。

当てがあつて歩いてる訳ではないが、どうにもジツとしていられないのだ。一鬼の口から、別のエリアの地獄に晴明が一時帰還していると聞いて、一瞬だが心が揺れ動いた。会いたい気持ちが、無い訳ではない。今もこうして、別エリアの地獄に通じる入り口みたいな物は無いが、探している。

晴明に会いたい。

例え復活に利用され、地獄送りにされかけても、母としての晴明への愛情は変わっていない。

だが、しかし、と踏み止まる。

自分を好いている男を愛しているのも、また事実。

晴明と男は、互いに敵対意識を持っている。

羽衣狐は、どちらかを選択しなければならない。愛する息子が、愛する男か、二人に一人。

歩みを止め、羽衣狐は立ち尽くす。茫然とした顔で、荒野の果てを見つめる。出来る事なら、どちらも切り捨てたくない。考えれば考える程、心の中で迷いは強くなっていく。

羽衣狐。

不意に、内側から声をかけられた。

山吹か……。

声の主は、体の奥に引っ込んでいる山吹だった。

何か用か……？

いえ、その……随分と悩んでいたみたいですから……。

山吹と羽衣狐は、長い憑依状態の影響で一心同体となった。それ故に、精神もリンクしてある程度は相手の気持ち等が伝わってくるのである。

心配をかけられ、羽衣狐は短く笑った。

勝手に他人の心を読むでないわ。

勝手に流れ込んでくるんですから、仕方ないでしょう？

羽衣狐に対して、山吹は少し意地悪く返した。彼女も強くなったものだ。

以前よりたくましくなった山吹に対して、面白くないと言った感じで羽衣狐はソッポを向いた。

羽衣狐。

何じゃ？

少し不機嫌に返すと、山吹が優しく、温かみのある声で続けた。

貴女が悩む気持ちは解ります……。ですが、もう羽衣狐の心は決まってるんじゃないんですか？

山吹の言葉を聞いた羽衣狐は、黙って考える。

二人共愛していると言うのは、紛れも無い事実だ。清明はたった一人の息子であり、『俺』は妖である自分を好いてくれた人間なのだ。どちらかを嫌いになるなど、あり得ない。

しかし、差はあった。

今まで目を逸らしてきたが、山吹の言葉で今一度自分の心を、気持ち、想いを見つめ直す。羽衣狐の中で、二人に対する想いに確かに“差”があった。

その“差”が開いたキツカケは、式條城での一件にあった。復活した清明は、羽衣狐を地獄に墮とそうとした。息子に地獄に墮とされる羽衣狐は、決して憎しみは抱かなかった。清明の望んだ事なら、どんな事でも受け入れる心があった。このまま地獄に墮とされるかと思った時、救いの手が伸びた。弱く臆病な『俺』が、命綱も付けずに飛び込み、羽衣狐の手を掴んだのだ。自分の身の危険も顧みず、助けにきたのだ。助けられた羽衣狐の胸中に、嬉しさが広まった。

この時の両者の行動が、羽衣狐の中で“想いの差”が生じたのだ。まあ、『俺』ならば「ソレは恋ではなく、危機的状況での興奮状態を恋と勘違いする“吊り橋効果”だ！」と断言するだろう。

しかし、例えそうだとしても、羽衣狐の想いは『俺』に傾いてい

た。その証拠に、清明と全面抗争に入る奴良組から協力を煽られた時、『俺』が協力すると言つのなら手を貸すと約束をした。

羽衣狐の気持ちの大半は、『俺』に向けられていた。

私は、あの人の事好きですよ。少し、その……変わったところがありますけど……面白くて、優しい人じゃないですか。

内側に居る山吹が、微笑みを浮かべて言う。

それに、誰かがあの人を支えてあげなくちゃ。

羽衣狐は、黙って山吹の言葉を聞いていた。何だか、自分の気持ちを代わりに喋っているように聞こえて、妙に気恥ずかしい気分になる。その証拠に、顔が熱くなっている。鏡を見れば、赤くなっている自分の顔が見れる事だろう。

「ええい！ 分かっておるわ！」

恥ずかしさを払うように、羽衣狐は口から声を出した。

「妾も……あ奴を愛しておる……！ 必ず地獄から出て、三人で狂骨達の元へ戻るぞ……！」

はい。皆で帰りましょう。

二人の女は、同じ想いで『俺』の帰りを待った。

*

現世で氷麗と出会った『俺』は、彼女の弁当を食した時、脳裏に閃きが走った。

地獄の番犬・ケルベロスを攻略する策が、閃いた。

「イケる……！ 条件が揃えば、多分イケる……！」
「あの……どうかしたんですか？」

弁当箱を片手に興奮した様子の『俺』に、氷麗は恐る恐る尋ねた。

「氷麗さん！」

「は、はいっ!？」

急に真剣な顔で呼ばれ、氷麗は思わず背筋を伸ばした。

「ちょっと聞きたい事があるんですけど……」

『俺』は、“ある物”が奴良組に無いか尋ねた。ソレは、ケルベロスの第一関門を突破するのに、必要不可欠な道具なのだ。コレを欠けば、第一関門の突破の策は破綻となる。

話を聞いた氷麗は、申し訳なさそうに表情を曇らせた。

「申し訳ありません。奴良組に薬師一派の鳩ぜん様がいらっしやいます
が、そのような薬は持ち合わせてはいないと思います」
「そ……そうっすか……」

残念な答えを聞いた『俺』は、一気に落ち込んでしまった。顔を伏せ、どんよりとした暗い空気を漂わせる。期待に胸を膨らませていた分、無いと知った時のショックは大きい。

その様子を見た氷麗は、必死に考えました。このままにしておくのは、あまりに可哀そうだと思い、何とか力になれないか思考を巡らせる。基本、氷麗は優しい娘なのです。事情はよく知らないが、彼女の中の優しさと良心は、目の前に居る悩める子羊を救おうと考える。

すると、ピカッと一つの案を閃いた。

「あの……」

「はい……?」

「京都の花開院家けいかいんけを当たってみては、いかがでしょうか? 陰陽師であれば、もしかしたら探している物があるかもしれませんよ?」

氷麗の提案を聞いた『俺』は、「ああっ!」と気が付いたように声を上げた。

妖怪退治のスペシャリストなら、『俺』が求めている“ある物”が見つかるかもしれない。氷麗からの情報を得て、再び希望の光が灯った。

狂骨達にも会うつもりだったので、丁度いい。

「ありがとう、氷麗さん! よし! そうと決まれば、早速京都に……」

勢いに乗って屋上を出ようと、立ち上がった『俺』だったが、すぐに座り込んでしまう。

「し……しまった……」

「こ、今度はどうしたんですか?」

深刻な顔で頭を抱える『俺』に、氷麗は真剣な顔で訊いた。

そして、『俺』の口から衝撃の言葉が出た。

「金が無い……!」

「はい……?」

屋上に、何とも言えない微妙な空気が生まれた。

あの後、仕方なく氷麗が一度本家に戻り、お金を調達して『俺』と一緒に京都に行く事になった。

リクオの護衛は、首無しや人間に化けた青田坊に任せてあるので心配はない。寧ろ、氷麗の中で今一番心配なのは、隣の席に座ってる『俺』だった。

現在、電車の中で氷麗と『俺』は隣同士で座っていた。何故、わざわざ氷麗まで京都行きに同行してるのかと言うと、理由は簡単である。

『俺』一人だと危なっかしくて、放っておけないのだ。

もう二十歳を過ぎると言うのに、一人にしておくと何だか不安になってしまうのだ。屋上で京都行きを決意するも金が無く、その場の勢いばかりで何の計画性も無い間抜けっぷりに、不安を禁じ得なかった。このまま一人で京都に向かわせて、大丈夫でしょうか？

と頭を悩ませた結果、氷麗も一緒に行く事を決めたのである。

この氷麗の申し出に、『俺』は頭を下げて心から感謝した。

とにもかくにも、二人は電車に乗って京都に入る。

駅を出て、京都の街を見渡して氷麗が尋ねる。

「それで、まずは何処へ向かいますか？ 京妖怪の棲み家ですか？

それとも花開院家ですか？」

「んー、じゃあ、最初は狂骨達の所に行こうかな。俺はともかく、

羽衣狐が居なくなってる心配してるだろうし」

「そうですね。では、ソコから行きましょう」

最初の目的地も決まり、二人は羽衣狐の屋敷目指して出発した。

街中を歩きながら『俺』は、現世と地獄の違いを思い知る。地獄

には無い、この太陽の光、街中を行き交う人々の喧噪、ソレ等全てが生きていると言う事を実感させられる。

戻れない。この賑わいや活気を味わえば、あんな恐怖しか無い地獄には戻れない。必ず、ケルベロスを倒して地獄からの生還を果たし、皆で帰ってくるんだ。

完全生還を胸に、氷麗と共に街中を歩いて、見えてきた。一際大きな屋敷を、視界に捉える。

その見覚えのある屋敷の門の前に、一人の少女の姿があった。髑髏を両手で抱えた少女は、羽衣狐配下の妖怪の一人である狂骨だった。

狂骨の姿を見た『俺』は、自然と笑顔になって声をかけた。

「狂骨！」

「え？」

門に背もたれしていた狂骨は、声を聞いて弾かれたように俯いた顔を上げた。

道で手を振る『俺』の姿を見て、目を大きく見開く。髑髏を持つ両手が、小刻みに震える。

「あ……ああ……！」

「よー！ 元気か？」

明るい声で歩み寄ると、狂骨が走って向かってきた。そして、徐々に走るスピードを加速していき、

「人間っ！」

「おぶう！？」

『俺』の腹に思いつ切りタックルをかました。腹に強い衝撃を受

け、『俺』は目を見開いて倒れる。

「きゃあああ！ ちょっ……何してるんですか！？ 貴方も大丈夫ですか！？」

傍に居た氷麗は、狂骨の突然の奇行に驚きの声を上げ、一層目のグルグルが増した。驚きながらも狂骨を後ろから押さえ、腹を抱えて地面に蹲ってる『俺』の安否を確かめる。

「だ、大丈夫、です……。きよ……狂骨、いきなり腹にタツクルは、無いんじゃないの……？」

腹の痛みに耐え、何とか顔だけ上げて狂骨を見る。

「うるさい！ アンタ、今まで何処に行ってたのよ！？ アンタと羽衣狐様が急に居なくなつて、ずっと探してたんだから……！」

声を荒げて怒鳴ってくる狂骨の目には、涙が浮かんでいた。その迫力に圧されながらも、『俺』は訊いた。

「探してたつて……俺の事も……？」
「そうよ！」

即答の狂骨に、『俺』はちょっと意外に思った。

羽衣狐は当然として、自分の事まで探されていたのは正直驚きだった。いや、正確には、ここまで感情を表す程に心配していた事が意外だった。正直、狂骨には嫌われているとばかり思ってたから、意外な半面、嬉しさもあった。

狂骨が『俺』の事も心配していたと解った氷麗は、やれやれと言った風に笑った。

上体を起こして、『俺』は狂骨と向き合う。

「そうか……心配かけてゴメン」

「……ふ、ふんっ……。分かればいいのよ……」

『俺』が素直に謝ると、狂骨は照れ隠しするように赤い顔を逸らした。

そこへ、タイミングを計って氷麗が声を挟んだ。

「あの、外で話をするのもアレですし、とりあえず屋敷の中に入りませんか？」

「そ、そうですね」

「って言うか、何で奴良組の雪女が居るのよ？」

同行してきた氷麗を狂骨が睨むも、三人は屋敷の中に入った。

*

屋敷に帰ってきた『俺』を、京妖怪が迎えた。

それから『俺』は、氷麗と狂骨達一部の京妖怪を部屋に呼んで、今までの経緯を話した。狂骨達も対面した一鬼と言う地獄の鬼に、自分と羽衣狐は地獄に墮とされたこと。その地獄で、奴良組二代目総大将だった男・鯉伴と出会ったこと。地獄からの生還を果たす為に、打倒・ケルベロスを考えていること。地獄で遭遇した山ン本本体を辛くも倒したこと。地獄で起こった出来頃を、全て話した。

「山ン本を倒したって、本当ですか!？」

山本本の件に食いついてきたのは、奴良組の氷麗だった。

羽衣狐復活を裏で手引きして、更に鯉伴暗殺にも関わっていたと思われる“山本本の目玉”と関わる人物なのだから、当然の反応である。

驚きを露にする氷麗に、『俺』は頷いた。

「はい。一鬼の話じゃあ、現世への復活を目論んでたみたいですけど……ケルベロスに喰われてあの世でも死んじやったら、流石に蘇生はもう無理でしょう」

ケルベロスに喰われた死者は、胃の中で魂を養分として吸収される。つまり、完全に存在が無くなってしまふのだ。

そうなってしまうたら、蘇生も何も無い。

「そんな事より、お姉様は本当に無事なの？」

狂骨を含め、京妖怪にとって大事なのは大将である羽衣狐の安否だった。

皆の注目が集まる中、『俺』は答えた。

「はい。今のところは大丈夫です」

「鯉伴様もご無事なんですか？」

続いて、氷麗も二代目の安否を聞いてくる。

「はい。ケルベロスを攻略する為に、羽衣狐と手を組んだ状態なんです、二人で争うなんて事も無いです」

「そうですか」

それぞれの大将の無事を聞いた一同は、とりあえずホッと安堵し

た。

「問題は、どうやってケルベロスを倒すかなんですよね……」

ケルベロス攻略に話題を切り替えると、一同はウームとシンキン
グタイムに入った。

一同の中から、すぐには案は出なかった。今まで、『考えて敵を
攻略する』と言う事をやってこなかったたので、なかなか良い案が浮
かばないのだ。

そんな中、しょうけらが口を開いた。

「frisbeeを投げて、その隙に攻撃を仕掛ければ……」

「いや、frisbeeで何とかなる程可愛い相手じゃないですから。

っていうか、アンタ真面目に考えてます？ 敬語やめていいですか
？」

軽くキレ気味に返すと、白蔵主が案を出す。

「落とし穴を仕掛けると言うのは、如何か？」

「いや、しょうけらさんよりまともな意見ですけど、正々堂々な貴
方にしては卑怯な案じゃないですか？ それに、そんな小細工に奴
は引つ掛からないと思いますよ？」

「じゃあ〜」と続いたのは、がしやどくろ。

「骨で誘き寄せて〜その隙に〜」

「ソレ、しょうけらさんのアホと殆ど同じ案だから」

運が悪い事に、部屋に集まったしょうけら、白蔵主、がしやどく
ろの三体は、基本アホな京妖怪である。白蔵主は真面目だが、頭が
切れる訳ではない。

「アンタ達いい加減にきなさいよ！」

アホな仲間達にイライラした狂骨は、大量の蛇を使って口を塞いだ。

口を塞がれたしょうけら達は、必死に巻き付いてる蛇を外そうともがいてる。

その様子を見て、『俺』は「あーあ」と呟き、氷麗は苦笑いを浮かべていた。

流石の狂骨も、我慢の限界か……。まあ、白蔵主は可哀そうだけど、しょうけらとがしゃどくろは自業自得……。

狂骨の蛇に口を塞がれ、もがくしょうけら達を見て呆れた時だった。

「あああああっ！」

「えっ!？」

突然、『俺』は驚愕の顔で声を上げ、狂骨と氷麗は驚く。

「そうか！ その手があったか……！ 何で今まで気付かなかったんだ!？」

騒がしい室内で、新たな発見をする。

単純な手だが……ひよっとすると、出来るかもしれない……

！ あの放射の口……第二関門突破も……！

「狂骨！」

「え!？ な、何よ……?」

急に声をかけられ、狂骨は少し困惑する。

そんな狂骨の反応も意に介さず、彼女の肩を掴んで『俺』は興奮

を抑え切れない笑みで言った。

「お前、天才だよ！」

「は……？」

些細な出来事から、ケルベロス攻略の突破口を掴む。
残る関門は、あと一つ！

十一ノ怪：関門の突破（後書き）

感想・質問お待ちしております。

十二ノ怪：最後の閃き

羽衣狐の屋敷。

その一室に、『俺』の姿はあつた。ベッドの上で胡座をかき、朝日が差し込む窓を眉根にシワを寄せた難しい顔で睨んでいる。

現世に一時生還を果たした『俺』は、完全生還する為にケルベロスを倒す策を考えていた。第一関門、第二関門と次々に攻略法を見出だしていった。だが、しかし、最後の関門で行き詰まってしまふ。

くそっ……！ 良いトコまで来てるんだ。第一関門と第二関門の突破は、条件さえ揃えれば多分イケる。あと一歩ってトコまできてんのに……その一歩が踏み出せない……。残る悪魔……最後の関門……予知の首……！

一睡もしないで考えたが、どうしても攻略法が浮かばないのだ。イライラが募って、乱暴に髪を掻き乱す。

くそっ！ 後一つなんだ……！ これさえクリア出来れば、もう勝ち目は目の前なのに肝心の攻略法が、見つからない！

ケルベロスの予知の首攻略に、『俺』は苦悩するばかりだった。他の二つの関門と比べれば、派手さこそ無いものの、一番厄介な能力である。こちらが、どのような策を弄したとしても、動きを読まれてしまつては意味が無い。

この最大の関門を突破する策を思い付かない限り、『俺』に勝利は無いのだ。

ああ、分からねえ！ どうすればいいのか、全然分からねえ！ 先の行動を読まれてしまつては、打つ手が無い。どう闘えばいいのか、皆目見当もつかない。

相手は、塵地蔵のような小物ではないのだ。

やがて『俺』は、頭を掻いていた両手を下ろして、力無くうなだれた。

駄目だ……。いくら考えても、予知の首攻略法が一向に浮か

ばねえ……。無理なのか……。あの番犬を攻略するなんて、やっぱり無理なのか……？

苛立ちが過ぎ去ったかと思えば、今度は諦めの念が出てきた。

『俺』が予想では、ケルベロスの実力は、あの晴明と互角かソレに近い位だ。根拠は、かつて地獄に堕ちていた晴明がケルベロスに挑んでいない事である。おそらく、完璧な状態で復活する為に余計な傷は付けたくない、と言う理由で戦闘を避けたのだろう。あくまで推測だが、あの晴明に手傷を負わせるだけの実力があると『俺』は睨んでいる。

自分の推測と厄介な予知の首に、『俺』は気を落としていった。

打つ手無し……。結局、ケルベロス奴を倒して生還するなんて、夢物語なのか……？

溜め息をつき、『俺』は一旦考えるのをやめた。

そんな意気消沈した『俺』の姿を、ドアの隙間から覗いてる二人が居た。

「凄く落ち込んでますね……」

「もう……アイツ何かあると、すぐに落ち込むんだから！」

小さな声を漏らしたのは、雪女の氷麗である。昨夜は本家に戻らず、京妖怪の屋敷に泊まったのだ。

心配そうに『俺』の背中を眺める氷麗の隣に居るのは、狂骨だ。諦めムードを漂わせる『俺』に、少々の苛立ちを抱いていた。

「と、とりあえず朝食にお誘いして、花開院本家に向かわせましょう！ 探し物が見つければ、少しは元気になるかもしれません」

「まあ、そうね……」

氷麗の提案に、狂骨も頷いた。

「いや、よう来たねお兄さん！ 久しぶりやね！」
「はあ、どうも……」

明るく挨拶された『俺』は、少しぎこちない感じに挨拶を返した。ココは、京都の有名な陰陽師・花開院家の本家屋敷である。氷麗と狂骨に連れられて朝食を済ませた後、すぐに『俺』は三人で花開院本家を目指して屋敷を出た。氷麗が付いてきたのは、争いが起きない為である。奴良組と京妖怪が、晴明を倒す為に手を組んだ事は花開院家も知っている。だが、あの式條城での戦い以降、京妖怪と花開院家は一度も顔を合わせていない。単純に、仲が悪いのだ。花開院家は決して京妖怪の悪行を許した訳では無いし、京妖怪も陰陽師と馴れ合うのは好かないと言った感じである。そんな状態なので、奴良組である氷麗が仲介役と言う事で付き添ったのだ。たまたま門の先で式神の特訓をしていたゆらと出会い、京妖怪の狂骨と睨み合っつて一触即発な空気になった。そこへ氷麗と『俺』が割って入り、両者を宥めていると秀元がやってきた。相変わらず軽い調子の秀元も間に入り、緊迫した空気が削がれて、ゆらと狂骨はとりあえず矛を納めた。

それから屋敷の中に入り、『俺』はゆらの案内で空いてる一室に通された。ゆらと秀元と対面した『俺』は早速、探してる“ある物”が無いか尋ねた。しばし考え込んだゆらは、もしかしたらと思って部屋を出た。しばらくして戻ってきたゆらの手には、『俺』が探し求めていた“ある物”が握られていた。なんでも、螺旋の封印の一つを任されていた陰陽師が作っていた代物だそうだ。その陰陽師は、羽衣狐によって既に殺されている。

何はともあれ、『俺』は探していた“ある物”を手に入れた。コ

レで、第一関門突破の材料は揃った。

しかし、『俺』は浮かない表情をしていた。やはり、予知の首と言う最後の壁が、あまりに高過ぎて素直に喜べないのだ。

すると、秀元が二人つきりになりたいと言い、ゆらを退室させた。

「それにしても、地獄に堕ちて、ソコの番犬と勝負しようとしたり、キミも大変な目に遭うてるね」

「ええ、まあ……」

いつもの軽い口調で話しかけてくる秀元に対し、『俺』は暗い感じだった。

今の気持ちが沈んだ『俺』を見て、秀元は苦笑して頬を掻いた。ケルベロスの話は聞いているので、『俺』のテンションが低い理由は解っていた。彼を元気付けるには、ケルベロス最後の関門 予知の首を攻略するキツカケのようなモノを与える一番である。

しばし考え、秀元が何か思い出したように手をポンツと叩いた。

「そつや。お兄さん、コレなんか使えへんかな？」

「何ですか？」

「式條城での戦いで、京妖怪側に覚サトリつちゆう妖あやかしがおつたんや。相手の心を読む厄介な妖で、ぬらちゃんぬらちゃんの孫も苦戦しててな。

せやけど、ゆらちゃんのお陰で攻略したんや」

「どうやってですか？」

少し身を乗り出して、『俺』は話に食い付いてきた。

『俺』の反応を見て、秀元はニコツと笑い、続きを口にする。

「心を読む覚に対して、ゆらちゃんは式神を全部召喚して一斉に突撃させたんや。そうになったら、いくら心を読めても防ぎようがないからな。覚自身に高い戦闘能力は無いから、あつという間に追い詰

められて、最後はぬらちゃんの孫がカツコ良く決めたんや」

いくら心を読めても、迫り来る式神の大軍を退ける実力は覚には無かった。

当時、ゆらは計算だと言っていたが、実際は覚の挑発に怒りを爆発させた感情に任せた猛攻であった。

何はともあれ、なかなか良いアイディアだと秀元は思っていた。しかし、相変わらず『俺』は浮かない表情だ。

「いや、多分、無理です……」

「何でや？」

「ケルベロスは、危険を察知して動きます。仮に一齐に攻撃を仕掛けたとしても、その中で一番危険な攻撃を回避します。それだと、相手に致命傷を与える事も出来ません」

光明を見出したかと思われたが、振り出しに戻ってしまった。

それに、こっちは数が少ない……。片方が防がれたら、仕留められる可能性が減って……！？

その時だった。

『俺』の脳を何かが刺激し、閃光が走る。消えかけた光明が、再び見えてきた。

思わぬ発見をした『俺』は、頭の中でシミュレーションをする。

「ん？ どうしたんや、お兄さん？」

目の前の『俺』が、何か度肝を抜かれたような顔で固まっているのを見て、秀元が声をかけた。

しかし、『俺』は秀元には答えず、一人黙して思考を続ける。必死に勝利の方程式を組み立てる。

そして、ついに出来上がった。

「開いた、ドアが……！」

『俺』の中で、最後の扉が開かれた。軋む音を鳴らし、開かれた重い扉の隙間から希望の光が差し込む。

中に眠る直感が、最後の閃きを起こした。

「え？」

「見つけた……！ 究極の抜け道……攻略法を……！」

俯いていた顔を上げた『俺』の目には、光が宿っていた。

表情も先ほどと一変して、生き生きとした笑みを浮かべている。

諦めの色は消え、勝利への執念が蘇っていた。

覇気を取り戻した『俺』を見て、秀元は不敵に笑った。

何や知らんが、閃いたみたいやな。やっぱり、おもしろい子や。この子やったら、もしかしたら、あの晴明に勝つあつと驚く策も閃きそつや……！

ゆら達やリク才達と同じく、『俺』も晴明を倒す鍵に思えた。

*

暗くなり、時刻は深夜零時になろうとしていた。

『俺』が現世に居られる時間は、あと僅かだった。

場所は、京妖怪が棲んでる屋敷の庭である。ソコには、『俺』と見送りに来た狂骨達や氷麗、ゆらと秀元が居た。皆、それぞれの気持を抱いて場に集まっていた。

「人間……」

沈黙に耐えられず、狂骨が声をかけられた。

その顔には、明らかに不安の色が滲み出ていた。羽衣狐が居ない不安、地獄から生還してくるか分からない不安、様々な不安が胸中を占めていて、表情は暗くなっていた。

振り返って向き合った『俺』に、狂骨は言った。

「必ず……必ず勝つて、羽衣狐様と一緒に帰ってきなさいよ！」

「ああ。俺も地獄なんかより、皆が居るこの世界に居たいからな」

狂骨の不安を払うように、『俺』は出来るだけ力強く答えた。

その後だった。

「やあ、お待たせしました」

闇の中から声が聞こえた。

一同が振り向いた先から、人影が現れた。姿を見せたのは、一鬼とその手下の鬼二体だった。

以前に一鬼と出会った狂骨達や初対面の氷麗達に緊張が走り、『俺』も表情が引き締まる。

恐い顔で一同が視線を向けてきても、一鬼は何ら動じてはいなかった。余裕の態度を崩さず、人の良い笑顔で『俺』に言った。

「いかがでしたか？ 最後の現世シヤバでの時間は？」

「ええ。皆と会えて、楽しかったですよ」

「そうですか。それは良かったです」

笑顔をやささない一鬼に、『俺』は意を決して言う事にした。

「一鬼さん」

「ん？ 何ですか？」

一鬼の笑顔に、微妙に変化が生じた。「俺」の様子が変わった事に気付いて、何かあると思ったのだ。そして、ついに『俺』は口にした。

「俺は、羽衣狐達と協力して、ケルベロス^{ケルベロス}を倒して現世に戻ります……！」
「は……？」

宣戦布告とも言える『俺』の言葉を聞いて、一鬼は目を丸くした。背後に控えてる二体の鬼も、動揺して顔を見合わせていた。

一瞬、驚いた表情を見せたものの、すぐに一鬼の顔に笑みが戻った。

「ククク。そのような事を言うからには、何か策……戦略でも思い付いたようですね？」

「まあ、ね……」

余裕の笑みの一鬼に対抗するように、「俺」も不敵な笑みを作つて答えた。

沈黙の中、二人は対峙する。静かに、しかし確かに二人の間で激しい火花を散らせていた。

先に沈黙を破つたのは、一鬼に笑いだった。

「ククク……ハハハ……！　そうですか、そうですか！　やはりケルベロスに挑戦しますか……！　いいでしょう……去る者追わず、来る者拒まず……。元々、私が貴方達を地獄に連れてきたのは、ソレが目的ですからね。貴方のケルベロス挑戦は、言ってみれば余興のようなモノです。貴方の考えた素人策……浅知恵が、私の番犬^{ケルベロス}に

どこまで通用するのか興味が出てきました……！

受けましょう、貴方達のケルベロス挑戦をつ……！

「そうこなくちゃ……！」

現世に一時生還した『俺』は、天啓を得て動き出す。

究極の殺戮モンスターを攻略する糸口を掴み、ついに一鬼に宣戦
布告を果たす。

負けられない。失敗は許されない勝負。

打倒・ケルベロスに向け、勝負が動き出す！

十二ノ怪：最後の閃き（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： サトツチさんからの質問。

『さっそく羽衣狐様質問なんですが、人間（『俺』）の何処にホレましたか？ノロケ話を一つおねがいしやす』

羽衣狐「ふむ。何処に惚れたかと訊かれれば、そうじゃな……内面的には、妖である妾を好いてくれたところだ。外見的なところは、アレじゃ、怯えた様子をするところだ。なかなか可愛いぞ。デートとやらでお化け屋敷に入り、作り物のお化けが恐くて妾に抱き付いてきた時など良かったぞ。あの時は本当に可愛かったのう。愛い奴じゃ」

俺「その後、山吹さんにぶっ叩かれたんですけど！俺の人生の汚点なんですけど！せめて本人の居ない所で言えや！」

十三ノ怪：勝負の点火

迎えに来た一鬼達に連れられ、『俺』は地獄に戻ってきた。
ケルベロス攻略法と言う、大きな手土産を引つ提げて戻った。

地獄に着くと、一鬼は『俺』の手首から黒の数珠を取り外し、部下を引き連れて去っていった。残された『俺』は、これから具体的にどう動くか考えた。まずは、羽衣狐と鯉伴に自分が思いつき、導き出した『番犬攻略』の中見を話す必要がある。第一関門突破には、『俺』が持ってきた“ある物”と鯉伴の力ちからが必要不可欠なのだ。それと、出来ればもう一人仲間に引き入れたい妖あやしが居た。

「人間っ！」

一人考え込んでると、声をかけられた。
地獄に残っていた羽衣狐と鯉伴が、駆け寄ってきた。

「羽衣狐」

「無事に戻って何よりをじゃ。して、狂骨達は元気だったか？」

「はい。皆、羽衣狐が居なくて心配してましたけど、必ず帰ると伝えてきました」

「そうか」

『俺』から皆の様子を聞いて、羽衣狐は一安心した。

「それで、何か収穫でもあったのかい？」

鯉伴が声を挟んできた。相変わらず、片目を閉じて笑みを浮かべている。

「どうして、そう思うんですか？」

「いやなに……現世に戻る前と、何か様子が違う気がただけさ」

ヘラヘラして、抜け目ない男である。

かつて、多くの妖怪達をまとめ上げた大将としての眼力は並では無い。僅かな態度、雰囲気の違いで何かあると察したのだ。

すると『俺』も思わず、ニヤリと笑った。

「ええ、まあ。鯉伴さんの言う通り、思い付きましたよ……ケルベロス攻略法を……！」

「何っ……！？」

不敵に見える笑みで言った『俺』の言葉に、羽衣狐は目を丸くし、鯉伴は笑みを崩さない。

「ケルベロス攻略じゃと……？」

「はい。話はこうです……」

早速『俺』は、現世で発見した『ケルベロス攻略法』を二人に話した。

花開院本家で、井戸呂流の陰陽師である灰吾はぐいの遺品から見つけた“ある物”を鯉伴に渡す。コレを使った作戦は、鯉伴にしか出来ない。他の者では、絶対に出来ないのだ。作戦の内容を伝えると、鯉伴は渋ったが最後は首を縦に振った。あまり乗り気では無かったが、他に有効な手段が無い以上、この作戦を実行するしかない。

第一から第三関門、それぞれの攻略法の説明を終えて、最後に確認をする。

「それじゃあ、鯉伴さんは俺が言った通りに動いて下さい。その間に俺は、別を当たりに行きます」

「別？ まだ何かあるのか？」

怪訝そうに首を傾げる鯉伴に、『俺』は頷いた。

「はい。俺が立てた作戦には、もう一人協力者が必要なんです」

「ソレは一体誰だ？」と羽衣狐が尋ねる。

「羽衣狐も、よく知ってる妖怪ですよ」

「妾わらわも？」

『俺』の言葉に、羽衣狐は怪訝そうに目を細めた。

頭を働かせ、自分が知っている地獄に堕ちた妖怪を探す。その時、ふと一体の妖怪の姿が脳裏を過った。

まさかと思い、羽衣狐は苦笑いを浮かべた。

「お前……まさか……」

「出来る事なら、引き入れたい……！ 俺の作戦の成功率……勝率を高める、あの男を……！」

遠くを見据える『俺』の脳裏に、羽衣狐が思い当った妖怪の姿が浮かんでいた。

*

地獄の荒野に、一人で酒を飲む妖怪が一匹居た。

成人男性を遙かに上回る巨体を地に着かせ、馬鹿デカイ盃に注いだ酒を、牙を覗かせた大きな口で飲む。喉を鳴らし、大量の酒を体内に流し込む。巨体の妖怪の周りには、飲み干したと思われる空の酒樽が幾つか転がっていた。

静寂の荒野で酒を飲むのは、土蜘蛛。般若のような顔、巨体に四本の剛腕を生やした大妖怪である。京都でのリクオとの闘いで、腕を一本失って今は三本となっている。

「随分と飲んでおるのう、土蜘蛛よ」

「あ？」

突如、静寂を破る声が入った。

土蜘蛛が振り向くと、視線の先には二人の姿があった。

羽衣狐と『俺』である。どんな相手でも不敵な態度の羽衣狐と違って、『俺』はそんな彼女の後ろに控えていた。完璧に土蜘蛛にビビっていた。

二人を見ても土蜘蛛は驚いた様子も無く、酒を一口飲んで言った。

「羽衣狐……それに、テメエも一緒か……。何だ？ 二人仲良く地獄に堕ちちまったのか？」

「まあ、そんなところだ。しかし、このような場所に長居するつもりはない」

会話が途切れ、二人は無言で顔を見合わせる。

土蜘蛛の存在感で重くなった空気に圧されて、さっきから『俺』は冷や汗を流している。

沈黙を先に破ったのは、またも羽衣狐の方だった。

「土蜘蛛よ、お主も地獄に身を置いているなら知っていよう。この地獄にケルベロスと言う、現世への道を閉ざす番犬が居る事を……。その番犬を攻略する術を、人間が見つけた……！」

だが、ソレには我等だけでは、いささか力不足……。お主も力を貸せっ……。！ 強者と闘えるのだ……。お主にとっても、悪い話ではあるまい……。？」

協力を仰ぐ羽衣狐に対して、土蜘蛛は無言だった。

答えを返さない土蜘蛛の様子に、羽衣狐は違和感を憶えた。強者と聞けば、嬉々として飛び付いてくるのが土蜘蛛と言う妖怪だ。土蜘蛛は、鬪いに、勝負に、強者に飢えているのだから。

しかし、今の土蜘蛛からソレを感じない。飢えている様子が、伝わってこないのだ。

疑問に思う羽衣狐に、土蜘蛛は驚きの答えを吐いた。

「ワシは手を貸さん……！」

「何っ……！？」

全く予想外の返答に、羽衣狐は目を見開いた。

「どういう事だ、土蜘蛛……？」

土蜘蛛はすぐには答えず、盃を地に置き、懐に手を突っ込んだ。自分用に大きな煙管きせんを取り出し、火を点けて煙を吹かす。

「悪い事は言わねえ……アイツに挑戦するのは、やめときな……。誰が挑んでも、喰い殺されるだけだ」

「お主らしくないのう……一体どうしたと言うのだ……？」

解せなかった。

あの土蜘蛛が、強者と鬪う事を断るなど、未だかつて無かった事だ。

羽衣狐の問いに、土蜘蛛は煙管をくわえた口で答える。

「鬪り合っただよ、あの番犬と……お前等が地獄に墮ちる前にな

……！」

「何だっつ……!？」

「地獄に、ケルベロスつて魔犬が居るってんで、清明と満足に闘り合えなかった分ソイツを相手に暴れようと思つてな……。そしたらボロクソに負けちまったよ……。あんな一方的にやられたのは、初めてだ……。手も足も出なかった……。ワシも他の亡者と同じように喰い殺されると思つたが、餌の時間とかで飼い主が現れて、勝負は中止になった……。」

衝撃の事実にも、羽衣狐は耳を疑った。

あの京妖怪の中でも大妖怪の類に入る土蜘蛛が、一方的に負けられたのだ。

そして、話を聞いた『俺』は気付いた。前に鯉伴が噂で聞いた、ケルベロスに挑んで生き残った唯一の挑戦者は、土蜘蛛だったのだ。自分より大き過ぎる存在と対峙し、敗北を味わった者は、その圧倒的な力に心を折られてしまう。初めて“完膚なきまでの敗北”を体験した土蜘蛛は、戦意を失ってしまったのだ。

強者を求め、嵐のように暴れる土蜘蛛の戦意さえ喰らう魔犬・ケルベロス。奴こそ、本物の悪魔である。

「奴に喰われちまえば、来世も何も無い……。完全な無になる。それが嫌なら、アイツに関わらない事だ……」

今の土蜘蛛に、以前のような覇気と威圧感を感じられなかった。

腑抜け。

酒に浸り、溺れた腑抜けと化していた。

そんな土蜘蛛を目にして、羽衣狐は苛立ちにも似た感情を抱いていた。たった一度の敗北で何と情けない事か、と軽蔑する。妾は一度ならず、二度三度と邪魔が入り、長い時を経てようやく清明を再び現世に産み落としたのだ。ソレに比べれば、一度の敗北など何じや？ 情けない。

羽衣狐が、苛立ちを募らせ、口を開こうとした時だった。

「いいんですか、それで……？」

今まで黙っていた『俺』が、初めて声を発した。

二人の視線が、『俺』に向けられた。

「あ？」

「いや、その……やり返そうとか、思わないんですか？」

「勝てねえ相手に、やり返すもクソも無えだろ」

「そうかもしれないですけど……でも、俺の知ってる土蜘蛛は、強くて、恐くて、何て言うか……闘う事以外に興味が無いって感じで

……言うなら、バトルマニア、みたいな……？」

「……何が言いてえんだ、テメエ？」

土蜘蛛の声が、若干低くなった。

しかし、『俺』は臆しながらも言った。

「その……闘わない土蜘蛛は土蜘蛛じゃない、と思つて……。そんな土蜘蛛らしくないと思うんです……！ 相手が強いなら、潰すまで闘い続ける……。満足するまで闘う……。闘いが全てのアンタから、闘いが無くなったら、もう本当に何も無いじゃないですか……！」

「こんな所で、独りですーっと酒ばっか飲んで……。それで満足ですか……？ こんな事が、アンタの望みですか……？ 違うでしょう！」

語る『俺』の声が、大きくなった。

今も土蜘蛛は恐いが、前程じゃない。京都で会った時の方が、迫力があつた。視線の威圧感だけで、相手を押し潰すような迫力が、

今の腑抜けた土蜘蛛には無い。

だからこそ、『俺』は真正面から声を上げる事が出来た。

「アンタの望みは、こんな腐った暮らしなんかじゃないでしょう！
？ お願いだから、戻って下さい……！ 俺が心底ビビって、強い
と思ったあの頃のアンタに……！」

戻ってくれ、土蜘蛛っ……！！」

必死の訴え。

恐怖で足を震わせながらも『俺』は、声を上げて必死に土蜘蛛を
振り向かせようとした。半ボケの泥沼から、引っ張り上げようとする。

『俺』の訴えが終わると、また荒野に沈黙が降りた。土蜘蛛の顔
はお面のように表情を変えず、黙して『俺』を見つめている。対す
る『俺』は、心臓をバクバクと破裂しそうな速さで鳴らし、固まっ
て向き合っていた。

生意気な事言って、殺されるかと思った時だった。

「フンッ……。弱い人間が、言ってくれるじゃねーか」

「す、すいません……」

口から煙管を離し、白い煙を吹かして土蜘蛛は言った。

「ここまで言われて、動かねえ訳にはいかんな」

耳に入った言葉に、思わず『俺』は笑顔になる。

「じゃあ……！」

「テメエらとつるむのは、今回つきりだぞ」

「やった……！ ありがとうございます……！！」

『俺』の必死の説得で、土蜘蛛が仲間に加わった。二人の様子を見守っていた羽衣狐は、安堵の溜め息をついた。何はともあれ、コレで揃ったのだ。魔犬・ケルベロスを討つ為の戦力が。

*

だが、しかし、『俺』達はすぐにはケルベロスに勝負は挑まなかった。

地獄に、『俺』達がケルベロスに挑戦する噂は広まっていたが、特に何も起こらない。

『俺』が地獄に戻って二日目。この日も、特に変化は無く、何事も起こらなかった。

三日目も同じだった。

動きがあったのは、『俺』が地獄に戻って来て数日後だった。

*

その日、一鬼は日課であるケルベロスの餌やりをしていた。

いつも通り、大勢の亡者を袋に詰め、ソレをケルベロスの前に用意する。今日は焼かずに、生で食した。グチャグチャと生肉を噛む不快な音が、荒野に鳴った。飼犬が食事を終えたのを確認して、一鬼は部下を連れて去ろうとした。

『俺』達が姿を現したのは、その時だった。

「おや？」

視界に『俺』達の姿を捉え、一鬼は足を止めた。そして、いつもの人の良い笑顔で迎えた。

「久しぶりですね。最近姿を見なかったので、もうケルベロス挑戦は諦めたのかと思いましたがよ」

「別に、諦めてた訳じゃないですよ。人生賭けた大勝負なんで、ちよつと心の準備をしてたんです」

笑顔の一鬼に対して、『俺』は緊張を帯びた険しい顔をしていた。そんな『俺』を一瞥して、一鬼は後ろに立っている土蜘蛛を見た。

心の準備、ねえ……。ククク……。何だ、ガツカリだぜ。何か策があるような言い方だったが、結局ただの仲間集めか……。しかも、以前ケルベロスに敗れた負け犬……。問題じゃないな。

心中で見下して、一鬼は尋ねた。

「では、今日ココに来たと言う事は、心の準備は整ったと言う事ですか……？」

「ええ……」

言つて『俺』は、一鬼から目を離した。

視線の先に捉えるのは、地獄の番犬と恐れられるケルベロスだった。

「あのケルベロスと闘いにきましたっ……!!」

「そうですね。どうぞどうぞ、存分に挑戦して下さい」

やっと来たか、と一鬼は内心で溜め息をついた。

なかなか『俺』がケルベロスに挑戦しないので、地獄の支配者で

ある閻魔大王は機嫌を損ねていた。

しかし、コレで閻魔大王の機嫌も直る。閻魔大王にとって、亡者のケルベロス挑戦は暇つぶしの試合観戦のようなものなのだ。

「とは言っても、実際にケルベロスと闘うのは俺じゃなくて、後ろの三人ですけどね」

『俺』の後ろには、羽衣狐、鯉伴、土蜘蛛の三人が居た。

「フフフ……挑戦者は、どなたでも構いませんよ。勿論、武器等の使用も自由です」

「分かりました」

一鬼に挑戦の意を伝え、武器使用の確認もした改めて『俺』は崖下の荒野に居るケルベロスを見る。

相手も、こちらの戦意を感じ取ったのか、ジッと目を向けて睨んでいた。

緊迫した空気が、辺りに漂い始めた。

息苦しい場で、『俺』が口を開いた。

「コレが地上に帰れる最後のチャンス……!!」

「泣いても笑っても、コレが最後の一戦ってこった……!!」

「では、ゆくぞ」

鯉伴、羽衣狐も覚悟を決めた顔で、眼下のケルベロスを見据えていた。

土蜘蛛もグルグルと腕を回して慣らし、早く闘いたくてウズウズしてる様子をしている。

「始めよう……!!」

始まる。

最初で最後のケルベロスとの大勝負。
地獄に堕ちた負け組集団が、未来と勝利を掴む為に今、挑むっ！

十三ノ怪：勝負の点火（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ミスターサーさんの千さんからの質問と云うか相談。
『相談です、こないだ羽衣さんの言う通りに（包丁持って）責めたら好きな人に逃げられました
どうしたら良いでしょうか？』

羽衣狐「む？ 千よ、お前のやり方は間違えておるぞ。責めると言うのは、刃物や暴力で迫る事ではない。凶器は持たずに近寄り、背中から抱き付くのだ。そして耳元で甘い吐息を吹き付け、手を相手の下半身に伸ばして……」

俺「ノオオオオオオオオオオ！ 何かおかしくない？ 何か方向がおかしいよ、羽衣狐様！？」

羽衣狐「そうか？ まあ、つまりアレじゃ。男は皆、後ろから責められるのが好きな阿呆と言う事だ」

同じ作品の四季さんからの相談。

『あ、相談・・・がある
最近、包丁持って来る女性が夢に出てな・・・しばらく寝てないんだ
後、視線が感じるのは何で？』

俺「夢かぁ……。誰か危なくない、優しい普通の人に傍に居てもらって一緒に寝なさい。俺も、羽衣狐と一緒に寝てるよ。」

それから視線の件だけど……逃げなさい。とにかく逃げる。これ

だけ。でも、逃げ切れない場合は、諦めなさい」

投稿者： mega12さんからの質問。

『質問です。原作の主人公のリクオは主人公をどういう目線で観ていますか？』

リクオ「恐がりな面があるけど、意表を衝いたような策を思い付いたりするから……頼りになるんだかならないんだか、ちょっとよく分からない男なんだよね」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

十四ノ怪：人間の悪意

荒野続く地獄に、一つの大きな建物があつた。戦国の城のような大きく立派な造りの建物だ。

その建物の一室　大広間に一人の男が居た。後ろに何十人もの部下である鬼を控えた男は、三メートルを超す巨体で、赤を基調とした着物を着ている。四肢も大きく、その太い手で大量の酒の入った巨大な杯を持ち、目の前に流れてる映像を嬉々として眺めている。

「おお、おお……！　ようやく始まるか……待ちわびたぞ……！」

この男、閻魔大王。

死者が訪れる地獄の頂点に君臨し、支配している。

「ははは……！　ワシは、実にコレが好きでな〜！　現世への生還と言う“希望”を抱いた哀れな亡者どもが、無惨に醜く消える様を観るのが、楽しくてのお〜！　希望を抱く挑戦者が、若ければ若いほど、味わいを増すと言うものだ……！　あはははは！」

狂ったように笑い、歪んだ喜びを表す。

後ろに座つて控えてる鬼達も、愉快そうに笑っていた。地獄では、弱者は強者を楽しませる為の玩具おもちゃのような物なのだ。玩具が壊れたら、また別の亡者を玩具として楽しむ。

格下の他人が苦しむ姿こそ、彼等の至高の楽しみなのだ。

映像に映る『俺』を一瞥して、閻魔大王は後ろの鬼達に振り返つた。

「よいか、下僕共よ？　この人間は、非力な人の身でありながら現世で妖怪共の争いで生き残つた、なかなかの兵だ……！　この小僧つわもの

が、あのケルベロス相手にどう足掻くか、よく見ておくのだ……
「！」
「はっ！」

声の揃った鬼達の返事を聞き、閻魔大王は映像に向き直った。

「さあ、早く始めるのだ……！ もう待つのは飽いた……！ さあ
！ さあ！ さあ！」

勝負開始を急かすように、閻魔大王は手をパンパン叩いた。

*

ケルベロスの庭。

崖下のケルベロスが居る荒野は、そう呼ばれている。番犬の領域^{テリトリー}に入って、生きて帰ってきた者は居ない。その庭に足を踏み入れたら、死あるのみである。

その死の庭に足を踏み入れ、番犬に挑む命知らずな三人が居た。
京の大妖怪・羽衣狐、奴良組二代目総大将・奴良鯉伴、暴君・土蜘蛛である。

目の前には、地獄の番犬・ケルベロスが立ち塞がるように対峙している。

そして、崖の上では『俺』と一鬼の姿があった。一鬼の後ろには、二人の手下の鬼が控えている。

いや、彼等だけではない。ぞろぞろと、地獄の住民が集まってきた。『俺』達のケルベロス挑戦を聞いて、観戦しに来たのだ。少し遠巻きに離れているが、それでも勝負の行く末が気になり、ギリギリの距離を保っている。

地獄の住民が遠巻きに見守り、沈黙が支配する場で、『俺』が口を開いた。

「始めますよ、一鬼さん……！俺とアンタの、最初で最後……一度っきりの勝負を……！」

「ふんっ」

勝負開始の確認をしてくる『俺』に、一鬼は鼻を鳴らした。

「どうぞ、ご自由に。引き止めはしません」

余裕の態度の一鬼から顔を逸らし、『俺』は崖下の荒野に立っている羽衣狐達に視線を送った。

すると、羽衣狐達は小さく頷き、答えた。

「闘いは、力が強いだけじゃ決まらない。ソレを証明してやる……！」

そして、闘いが始まった。

羽衣狐達とケルベロスが、同時に動いた。ケルベロスは大きな口を開き、鋭く尖った牙で噛み殺そうと雄叫びを上げて迫ってくる。対して雄叫びの衝撃や威圧感を、羽衣狐は気迫で耐えて迎え撃つ。

襲い掛かる魔犬の牙　だが、ソレはかわされた。羽衣狐は尻尾を使って捌き、紙一重で牙を避けてた。真横にケルベロスの巨大な顔が現れた瞬間、羽衣狐が反撃に転じた。複数の尻尾を、まるで槍のように突いた。四尾の槍　虎退治である。顔に数回の突きを受けたケルベロスは、傷口からパツと小さな血飛沫を飛ばす。

二人の攻防は、一瞬だった。

「なっ……！？」

先にケルベロスが傷を負って、一鬼は目を見開いた。
しかし、驚くのはまだ早かった。

「おらあつ！」

土蜘蛛の巨大な拳が、ケルベロスの左頬にヒットした。
続く鯉伴は、懐から普通より大きな盃を取り出した。盃には、既に酒が入っていて、波紋を作っている。

取り出した直後、ケルベロスの三つ首の内の一つが突然、炎に包まれた。

『明鏡止水 桜』。盃の波紋が鳴り止むまで、対象を燃やし尽くす、ぬらりひょん奥義である。

「おいおい、マジかよ？」

「あのケルベロスが、攻撃を食らってるぜ!？」

「こりゃあ今回、ひよっとするとひよっとするかもしれないぞ!」

ケルベロスが初撃を許し、受けた動揺は観戦してる亡者達にも広まっていた。

しかし、彼等の場合は驚きは歓声に変わり、徐々に盛り上がっていった。

対して、不信と疑念を膨らませる者が居た。

ケルベロスの創造主であり、飼い主である一鬼だった。

「ぐっ……! 馬鹿な……どうなってる!? 何故、あかも容易く初撃を許した……!? こんな事は、今まで一度も無かったぞ……!」

信じ難い光景に、一鬼は動揺を禁じ得なかった。

しかし、攻撃を受けこそしたものの、ダメージは大きくなかった。伊達に長年、亡者を蹴散らして番犬をしてきた訳ではない。堪えた様子はあまりなく、ケルベロスは牙を剥いて羽衣狐達を睨む。

攻撃を受けて健在なケルベロスを見て、一鬼の動揺もいくらか鎮まった。

そつだ……。初撃を許したと言う初めての事態に驚きはしたが、まだ慌てる程じゃない。俺のケルベロスは、あの程度の攻撃で倒される程ヤワではないのだから……！

落ち着きを取り戻した一鬼は、考えた。まだ血相を変えて慌てるような事態ではないが、不可解な現象には違いなかった。

あのケルベロスが、簡単に敵の攻撃を許すなんて考えられない。一体どうなっているのか？

疑問を解明する為に、ケルベロスを注視していた一鬼は、ある違和感に気付いた。

「あつ………！」

羽衣狐達と戦闘を繰り返して居るケルベロスを見て、一鬼は目を見開き、驚愕の声を上げた。

「お、遅い………！ 鈍い………！ ケルベロスの動きが、今までと比べて鈍ってる………！」

一鬼が発見した違和感　ソレは、ケルベロスの動きが鈍ってる事だった。

若干ではあるが、しかし明らかに動きが鈍っていた。

その証拠に、羽衣狐達はケルベロスの牙や爪の攻撃を紙一重で避けているが、逆にケルベロスは殆どの攻撃を受けている。闘いは、ほんの僅かな反応の遅さで、勝敗が決する事がある。今のところ、ケルベロスに大きなダメージは見られない。だから、負ける恐れは

ない。それほどケルベロスは強く、タフな自信作と一鬼は自負している。

しかし、今のケルベロスの異常状態が、面白くない事であるのは確かだ。

何故だ！？ 何故ケルベロスの動きが、急に鈍った……！？
疑問に思考を働かせる一鬼。

まさか、何かしたのか？ この勝負の最中に、ケルベロスに何らかの細工……。例えば、動きを麻痺させる何らかの毒を……。いや、おそらくソレは無い。奴等の中に、毒を用いて闘う妖怪は居ない。羽衣狐は主に尻尾、鯉伴は長ドス、土蜘蛛は素手の怪力、どいつも毒を操る妖怪ではない。それに、勝負中に毒を使用した様子も無かった。この線は無い……。！ だとすると、残る可能性は一つ……勝負前に毒を投与した……！

しかし、一鬼は腑に落ちなかった。そう考えると、また別の問題が浮上してくるのだ。

ケルベロスには、俺以外の近付く者は容赦なく噛み殺すよう教え込んでいる……。つまり、俺以外の誰かが近付き、毒類を投与する事は不可能のハズ……。！ 毒を盛るところか、近付く事すら叶わないと言つのに、一体どうやって……。？ 俺以外にアイツに近付ける者など……。ああ……！

その時、一鬼は驚愕の仮説を発見した。動揺は顔に表れ、目と口を大きく開いた愕然とした表情で固まる。

「い、一鬼様？ どうされたのですか？」

「やられたっ……。！」

「えっ……。！？」

手下の鬼が、心配そうに声をかけた時だった。急に一鬼が、血相を変えて大声を上げたのだ。

「俺とした事が、まんまと奴の策に嵌まった……！」

悔しそうに歯を食いしばると、一鬼は踵を返して駆け出した。

「一鬼様！ どちらへ!？」

手下の鬼も、慌てて一鬼の後を追う。

一鬼は、手下の鬼の問いには答えず、荒野を走る。少し走って、一体の鬼の姿が見えてきた。勝負が始まる前に、餌を詰んでた袋を持たせて戻らせた鬼だ。

「オイッ、止まれっ！」

「え？ い、一鬼様!？」

呼び止められ、鬼は振り返って必死に走ってくる一鬼を見て驚く。必死の形相で駆ける一鬼の目は、手下の鬼ではなく、持っている空の袋に向いていた。

あの餓鬼^{ガキ}……！ 通常とは別発想……死角を衝いてきやがった……！

手下の鬼に追い付くと、乱暴に空の袋を奪い取り、中を確認する。ケルベロスへの直接的細工は早々に不可能と判断して、間接的に攻めてきやがった……！

空の袋の中を漁る一鬼の手が、何かを掴んだ。ソレで、一鬼の中にある仮説は立証された。

袋から手を出し、掴んだ物を睨み付ける。

あろうことか奴は、コツチっ……！ 俺がケルベロスに与える餌に、毒を盛りがったっ……！ こんな物を餌に混ぜた覚えなど無いっ……！

一鬼が睨む先には、小さな白いカプセルがあった。

何かの薬である事は間違いない。こんな物を、ケルベロスの餌に

混ぜた記憶は一鬼自身には無い上に、手下にも命じた事は無い。そう考えれば、コレは十中八九『俺』の仕掛けと睨んで間違いない。してやられた一鬼の顔が、みるみる怒りの形相に変化していき、カプセルを持つ手も震え出す。

俺達を運び屋にして、安全に確実に、毎日微量の毒を盛っていったんだ……！ くっそお〜！ いくらケルベロスでも、毎日毒を飲めば、そりゃ体に変化が生じる……！

ケルベロスの異変の正体は解った。

しかし、一鬼には、もう一つ解らない謎があった。

だが、どうやって毒を仕込んだ……？ どこから毒を仕入れたかは、この際問題ではない。ケルベロス程じゃないしろ、餌の保管場所も容易には入れない。餌である亡者どもは、持ち運び易いように眠らせてあるが、運ぶ際には俺と手下の鬼がいる……一体どうやって……？

毒混入の方法に、一鬼は頭を悩ませた。

誰にも気付かれずに、餌に毒を仕込む方法など考えられない。しかし、現にその考えられない事が、目の前に起こっている。コレをどう説明すればいい？

解らん……！ 誰にも気付かれずに、餌に毒を仕込むなど……っ！

その時、一鬼の思考は至った。

「あ…… ああ…… ああああ……！！」

見落としていた可能性に気づき、再び愕然とした顔で声を上げた。

「やられたっ！ 奴良鯉伴だっ……！！」

「ぬ、奴良鯉伴が何か……？」

さっぱり分からない手下の鬼は、首を傾げる。

考えの足りない鬼に若干苛立ちながら一鬼は、『俺』の仕掛けたカラクリを話した。

「鯉伴のぬらりひょんとしての能力の本質は、『相手の認識をズラすこと』だ……！ 奴は……人間は、その能力を利用したんだ……！ 明鏡止水とか言ったか……おそらく鯉伴は、餌の保管場所付近に潜み、扉が開いた時を狙って自分の姿を認識させない明鏡止水を使い、ぬらりくらりと餌の保管場所に侵入して餌袋に毒入りカプセルを仕込んだ……！」

実行犯は鯉伴だろうが、考え、奴に入れ知恵したのはあの人間だろう……！ ケルベロスが俺から餌を貰ってるのを知って、その隙を衝いてきたっ……！」

ギリツと歯を食いしばり、一鬼は忌々しげに顔を歪めた。

その時、脳裏に『俺』の声が聞こえた気がした。

どうっすか？ 別に直接ケルベロスに近づかなくても、仕掛けは出来るんですよ……！ わざわざ危険を冒さなくても、代わりに毒を運んでくれる間抜けがいるじゃないですか……！」

脳内に響く小馬鹿にしたような『俺』の声に、一鬼は激怒して、持っていたカプセルを地面に放り捨てた。

「クソツ……！」

怒りに任せ、捨てたカプセルを足で踏み潰す。

何度も何度も、ガツガツと踏む。憎たらしい『俺』の顔を思い浮かべながら、乱暴に踏み潰した。格下と見下していた『俺』に一杯食わされ、胸中で怒りが燃え上がる。

「変更だっ……！！ 標的を羽衣狐共から、人間に変更する！ 奴も挑戦者の一人だから、襲っても何の問題は無いつ……！！ とにかく、

これ以上妙な小細工をする前に、殺すんだ、奴をつ……！」

舐めていた『俺』の策に畏れを感じ、一鬼はなりふり構わぬ戦略に出た。

*

庭では、ケルベロスと羽衣狐達の闘いが続いていた。

巨大な口を大きく広げ、噛み殺そうと迫るケルベロス。その一撃を間一髪で避け、羽衣狐は尻尾から取り出していた『三尾の太刀』で顔目掛けて刃を振り下ろす。羽衣狐の一閃が、ケルベロスの顔に走った。しかし、傷は浅く、すぐに雄叫びを上げて牙を剥いてくる。鯉伴も、畏を発動させて、ぬらりくらりとケルベロスの攻撃をかわしている。だが、獰猛なケルベロスの攻撃は止む事を知らず、激流のように襲い掛かってくる。僅かな隙を衝いて鯉伴も長ドスを振り抜くが、こちらも致命傷には程遠い。

土蜘蛛も、ケルベロスに劣らない狂暴な本性を露にして、激突している。ケルベロスが肩に噛み付けば、土蜘蛛も噛み付く。鋭い爪で引っ搔いてくれば、固めた拳で突きをお見舞いする。他の二人と違い、野生のような激しい闘いを繰り広げていた。

苦戦はしているが、薬の効果でまともに闘えていた。

崖の上から、『俺』は汗で濡れた両拳を固めて見守っていた。

よしっ！ 今だ！ 今決めちゃえ……！ 薬の効力が続いている間に、奴が本領を発揮する前に、決めるんだっ……！

長期戦は不利と考え、『俺』は早期決着を狙っていた。

しかし、敵もそう簡単には落ちない。

「ケルベロス！」

突如、荒野に戻ってきた一鬼の音が響いた。
一同の注目が、一斉に一鬼に集まった。

「標的変更だつ……！ ソイツ等は後回し……狙いを、ココに居る人間に変更だ！ 奴を先に殺せつ……！」
「なつ……！？」

一鬼による標的変更を聞いて、『俺』の顔から一気に血の気が引く。

羽衣狐達と違い、『俺』は非力平凡な人間だ。ケルベロスに襲われたら、自力で生き残る術は無い。

『俺』が蒼ざめた直後、巨大な咆哮が上がった。大気を震わせる程の咆哮を放つ主は、地獄の番犬をおいて他に居ない。主人の命令に従い、崖上に居る標的を襲おうと四肢に力を込め、跳躍した。

「させぬぞっ！」

だが、反応したのはケルベロスだけでは無かった。

羽衣狐だ。

崖上の『俺』を護る為に、尻尾に力を込めてケルベロス同様に跳んでいた。

そして、動作は羽衣狐が早かった。薬で動きが鈍った分、羽衣狐に先手を許したのだ。

僅かに先を跳ぶ羽衣狐は、すぐに金色の尻尾を伸ばし、『俺』を護るように体に巻き付け包んだ。

直後、ケルベロスの凶爪きょうそうが振り下ろされ、地面を深く抉った。

『俺』を庇った羽衣狐は、間一髪で爪を避けていた。

「くっ……！」

「は、羽衣狐っ……！」

「人間、無事か？」

「は、はい！ 大丈夫です！ 羽衣狐は……？」

「妾も心配要らぬ」

返事をして、羽衣狐は振り返り、キツと襲撃者を睨んだ。

二人の前には、唸り声を上げるケルベロスが立っていた。

観戦している亡者達は、崖上に現れたケルベロスに恐れて更に遠くに離れていった。

そんな中、一鬼は一人不敵に笑っていた。

ククク……！ 一瞬冷つとしたが、ここまでだ……！ 闘う能力を持たぬお前は、戦闘では足手まといのお荷物以外の何物でもない……！ 大妖怪の羽衣狐と言えど、荷物を抱えてケルベロスを手にするのは厳しいだろう……！ 人間……非力なお前自身が、仲間の弱点となって、追い詰められるのだ……！ さあ、どうする人間……？

立ちほだかる一鬼の冷酷な策 究極の急所狙いが、容赦無く牙を剥く。

奇策と凶策の激突、ぶつかり合い。

この窮地を突破出来るのか！？

十四ノ怪：人間の悪意（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： マキサさんからの質問。

『羽衣狐に質問。』

もし、もしですよ？主人公との間に子供ができたなら…どうしますか…？』

羽衣狐「子が出来たらどうするかじゃと？ 愚問じゃな……妾が産む子じゃぞ？ 愛するに決まっておろう」

投稿者： ミスターサーさんの薄さんからの質問。

『質問、土蜘蛛殿は何分ぐらいケロベロスと戦ったのでござるか』

土蜘蛛「あ？ 時間なんざ計った覚えはねーよ。ああ、思い出したラム力ついてきたぜ。おい、一発殴らせろ」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

十五ノ怪：心理の鎖

一鬼が与えている餌に陰陽師特製の薬を盛り、ケルベロスの身体能力を落として動きを鈍らせた。

だが、逆上した一鬼は、闘う術を持たない『俺』を狙ってきた。間一髪のところまで羽衣狐に助けられたが、一鬼のなりふり構わぬ手段で窮地に立たされてしまう。

この勝負に、ルールなどあつてないようなもの。

そして、『俺』は羽衣狐達の仲間であり、挑戦者の一人でもある。要は、勝てばいいのだ。

どのような手段を使おうと、最終的に勝ち、生き残る事が重要なのだ。

手段を選ばぬ一鬼の凶行に、『俺』は形勢を悪くしてしまふ。ケルベロスの後ろに立つ一鬼は、不敵な笑みを浮かべていた。

ククク！ 終わりだ……！ コレで終わり……！ 毒か薬で弱らせたケルベロスを使留めると言う戦略も、闘えぬお前を狙う事で破綻だつ……！ コレでお前等は、守勢に回らざるをえない……！

確かに、戦闘能力が無い『俺』を抱えて闘うのは、羽衣狐達にとつて不利な事だ。三人が万全の状態で挑んで、何とかケルベロスと互角に勝負出来ている。その戦況が、『俺』と言つた一人の非戦闘員を狙う事で、崩れてしまふ。少なくとも羽衣狐は『俺』を護る為に、守勢に回るしかない。

そういう読みがあり、一鬼はケルベロスに『俺』を狙うよう命令したのだ。

主の命に忠実に従い、目の前のケルベロスは大気を震わせるような咆哮を周囲に放ちながら巨大な口を開き、羽衣狐ごと『俺』を喰い殺そうとする。だが、当然、羽衣狐がソレを許すはずも無く、複数の尾をバネのように扱い、『俺』を抱えて崖下に飛び移る。ケルベロスの巨大な口は、地面を抉るように砕いた。

着地した羽衣狐は、キツと目を鋭くさせてケルベロス、次いで一鬼を睨んだ。

「おのれ一鬼め……！ 鬪えぬ人間を狙いにくるか……！」

「おい！ 羽衣狐！ お前さんも無事か！？」

鯉伴と土蜘蛛が駆け寄ってきた。

「貴様に心配される程、妾は脆くはない」

「そうかい。でも、お前が抱えてる方は、そうでもないみたいだぜ？」

「む？」

鯉伴に指を差され、羽衣狐は尻尾に目を向けた。

視線の先には、白目を向いて意識を失ってる『俺』の姿があった。先ほどのケルベロスの一撃を避ける際に生じた衝撃を受けて、気絶してしまったのだ。迫りくる恐怖によるショックも、起因の一つでもある。

無様な姿を晒してる『俺』を見て、羽衣狐は呆れて苦笑いを浮かべた。

「こ奴は……」

「相変わらぬのびりだな、この小僧は……」

顎に手を添え、土蜘蛛も同調する。

そんな中で、鯉伴だけは普通に笑っていた。

「まあ、ものは考えようさ。気絶しちまってるんだから、コレで下手に暴れられる事も無えだろうよ」

「まあ、それはそうなの……」

護る対象に暴れられると、対応に困って隙を作ってしまう。それならば、気絶しておとなしくしてくれてる方が、まだマシと言えるだろう。

『俺』の気絶で場の空気が少し緩んだが、長くは続かなかった。

突如、地面が揺れ、三人は意識を戦場に戻した。

立ち込める砂煙の中から、低い唸り声を漏らす巨体のケルベロスが現れた。大きく開かれた口からは絶え間なく涎が垂れ落ち、獲物を喰らいたい衝動に駆られている。一瞬でも気を抜けば、この悪魔に魂を喰われてしまう。

「さあて、ふんどし締め直して行くとするかい」

長ドスを構え、鯉伴は不敵に笑う。

「貴様等、人間の作戦はちゃんと覚えておるだろうな？」

尻尾で『俺』を護るように包み、羽衣狐は二人に確認を取る。

「策を労して闘うのは俺の性に合わねえが、しょうがねーな……」

あまり乗り気では無い様子だが、土蜘蛛も腕を回して迎え撃つ準備をしてる。

三人には、事前にケルベロス対策の内容を知らされている。だから、『俺』が気絶した現状でも、自分達がやるべき事は解っていた。そして、第二ラウンドが始まった。

先に動いたのは、ケルベロスだった。

左右の頭が相手を見据え、真ん中の頭が口を開き、雷　電撃を放った。眩しさに少し怯み、目を細めながらも三人はそれぞれ別方向に跳んで避けた。電撃は地面に当たり、強い閃光と爆音を生じて

陥没を作る。

第二関門、放射の口。

ケルベロスの一撃の威力を見た見物の亡者達は、恐怖して顔が青ざめた。

戦場に居るケルベロスは、別方向に逃げた三人の内、一人を捉えて強靱な脚力で駆け出した。いや、正確には二人か。ケルベロスが狙うは、羽衣狐と『俺』である。主人に忠実な番犬は、先ほどの命令に従って動いていた。

接近に気が付いた羽衣狐は、ケルベロスと対峙して対応出来るように身構えた。

「待ちな、ケルベロス！」

「俺を無視してんじゃねーぞ、コラアアアア！」

羽衣狐に迫るケルベロスに、鯉伴と土蜘蛛が左右から接近する。

その時、ケルベロスは左右の頭を鯉伴と土蜘蛛に向け、それぞれ火炎と冷気を放つ。

「ちっ！」

咄嗟に鯉伴は横に跳び、間一髪で火炎を避けた。だが、左半身を僅かに掠め、着物が半分焼け焦げ、体も火傷を負う。

「ぬうおおおおお！」

一方、土蜘蛛も腕を交差させて防御した。完全に氷漬けにはされなかったが、防御に回した三本の腕は完全に凍って使い物にならなくなってしまう。この状態で強い衝撃を受ければ、腕が粉々に砕け散ってしまう。

両サイドの邪魔者を黙らせ、ケルベロスは眼前の標的に牙を剥い

て迫る。

次の瞬間、羽衣狐とケルベロスは同時に動いた。

「二尾の鉄扇っ！」

「グオオオオオオオ！」

羽衣狐の鉄扇とケルベロスの電撃が、激突した。眩しい閃光を発生して、バチバチと激しい火花を散らす。

攻防の中、ゆらの陰陽術すら防いだ鉄扇にヒビが生じた。だが、何とか壊れずに耐えきった。

「くっ………！」

羽衣狐は歯噛みして、鉄扇の向こうのケルベロスを忌々しげに睨んだ。

一撃目は何とか耐え凌いだだが、次も上手くいくとは限らない。いや、損傷した今の鉄扇では、防ぎきれないだろう。現時点では、やはりケルベロスの方が攻撃力が圧倒的に上だ。

ククク………！ 終了だ。

崖上で闘いの様子を眺めてる一鬼は、余裕を取り戻した笑みをしていた。

あのケルベロスの口から放射される攻撃力は、必殺にも劣らぬ………！ 例え防いでも、土蜘蛛のように戦闘不能状態になる。コシは、薬でどうこう出来る事ではないっ………！

口元を歪め、見下した悪魔的笑みで羽衣狐達を見下ろす。

不毛だっ………！ ここから先の闘いは、不毛も同然っ………！

無駄な悪あがき！ 無様にあがいて死ね………！ 死ね、死ね、死

ね！ 死ぬがいい、ゴミ共めっ………！

放射の口によって、一鬼は優位に立った。

そして、羽衣狐達が劣勢に追い込まれる事で、見物人の間に不穩

な空気が流れる。諦め、絶望、そんな負の空気で満ちていく。

駄目だ。

アイツ等も、あの化け物にやられる。

喰い殺されて終わりだ。

戦闘開始直後には、互角に闘っていた羽衣狐達に抱いていた希望や期待も、見物人の中から消えていた。

そう、勝負を観戦している誰もが絶望していた。

だが、当の闘っている本人達は違った。厳しい戦況でも、その目からは光を失っていないかった。

確かに、放射の口は厄介で羽衣狐達も苦戦している。だが、策はある。事前に『俺』から聞かされている、『放射の口封じ』を。そして、防戦一方となっていた羽衣狐達は、現状を打破する突破口を見つけた。

放射の口に対して、羽衣狐は回避行動と二尾の鉄扇による防御で何とか凌いでいた。しかし、鉄扇の方は冷気を受け、使い物にならなくなってしまう破棄した。

そんな中、鯉伴は『明鏡止水・桜』の火を以て凍り付いた土蜘蛛の腕を解凍していた。

解凍が終わると同時に、羽衣狐が合流してきた。

「腕を氷漬けにされるとは、情けないのう土蜘蛛……！」

「黙れ、女狐……！」

軽口を叩く羽衣狐だが、実際は体力を消耗して息が上がっていた。セーラー服も所々破れ、傷も受けて苦戦の跡が見られる。

そこへ、鯉伴が尋ねた。

「で？ 例のモノは見えたのかい？」

「うむ」

頷いた後、羽衣狐は二人に“ある発見”を話した。
聞いた鯉伴は、ニヤリと笑った。

「それじゃあ、いっちょ反撃開始と行くかい！」

「貴様が仕切るな、鯉伴！」

羽衣狐は、土蜘蛛に視線を移した。

「土蜘蛛……お主の役目、解っておろうな？」

「ああ、解ってるよ」

答える土蜘蛛は、首をコキコキと鳴らした。

勝機を見出だした三人は、その時を待つ。

戦場に重い沈黙が生まれる。

羽衣狐達の心境の変化を察してか、ケルベロスも簡単には動かない。鋭い眼光を羽衣狐達に向け、ジツと獲物の様子をつかがう。

だが、先に沈黙を破り、動き出したのは、またもケルベロスだった。痺れを切らした地獄の番犬は、灰色の空に響く咆哮を上げ、羽衣狐達に迫る。

受けて立つのは、土蜘蛛。

「うおおおおおおお！」

負けじと吠え、土蜘蛛を迎え撃つべく地を駆ける。

二人の距離が縮まり、ケルベロスの真ん中の頭が顎を僅かに上げた瞬間、

「さっきの借りを返すぜ、犬っころ！」

土蜘蛛の腕が伸びた。

三本の手がケルベロスの真ん中の頭を掴み、下から強烈な膝蹴りを喰らわせる。更に、強制的に口を閉ざされたケルベロスに異変が起きる。閉ざされた口の隙間から光が漏れ、次の瞬間、雷が口内で暴発したのだ。

予想外の事態に、一鬼の顔色も変わる。

「ああああっ………！」

動揺は一鬼から周りの見物人にも広がり、場がざわめく。

そして、ケルベロス負傷に反応したのは上の連中だけではない。

「よしっ………！」

「今の内だぜ！」

羽衣狐と鯉伴も、興奮を表す。二人は好機とばかりに駆け出した。一撃と暴発を受けたケルベロスは、ヨロヨロと後退していく。その隙を、土蜘蛛は見逃さない。

「おらおらあ！」

土蜘蛛の鉄拳が、ケルベロスの巨体に叩き込まれる。

苦痛を受け、ケルベロスは空に向かって吠えた。その直後、右側の頭部が土蜘蛛を睨み付ける。

放射をしようとするが、

「閉じていろっ！」

いつの間にか顔の真横に羽衣狐が現れ、八尾に巻かれて口を閉じられてしまう。

すると、口の隙間から煙が漏れ上がり、羽衣狐が尻尾の縛りを解

くと、口内は火によって火傷していた。

反対側からは、鯉伴が長ドスを構えて迫り来る。迎え撃とうと、ケルベロスは冷氣放射しようとした。が、何かに怯えたように、ケルベロスは動きを止めてしまう。その隙に鯉伴は、長ドスを振り抜いて傷を追わせた。

突然の羽衣狐側の攻勢に、見物人は一気に盛り上がる。

「うおおお！ スゲー！」

「やりたい放題やってるぞ！」

見物の場の雰囲気はガラリツと変わり、歓声が響き渡る。

一方で、一鬼達は動揺していた。

「一鬼様……！ コレは一体……！？」

「ぐっ……！」

手下の疑問に答えられず、一鬼は歯噛みして考えを巡らせる。

クソツ……！ クソツクソツ、どういう事だ……！？ 何故、急に奴等は攻勢に出た？ どうしてケルベロスの放射を、ああも簡単にふせ……！？

そこで一鬼は、ある失態に気付いた。

「うあああああ……！」

「い、一鬼様……！？」

突然、声を上げた一鬼に手下の鬼は驚く。

だが、一番驚いているのは、叫んだ一鬼本人だった。大量に冷や汗を流し、目を見開いた驚愕の表情で一鬼は言った。

「しまった……！ “癖”を見破られたっ……！」

「癖……？」

激しく動揺する一鬼の後ろで、手下の鬼は怪訝そうに呟いた。ケルベロスは、放射をする直前に『僅かに顎を上げる』と言う癖がある。その癖を見つければ、放射のタイミングを見計る事が出来るのだ。

そして、この癖が、『放射の口封じ』の重大な要因となったのである。『俺』が思い付いた第二関門攻略は、実にシンプル。放射の口を閉ざす事だった。出口を塞いでしまえば、放射は不可能となる。問題は、放射のタイミングだった。タイミングを逸すれば、不発に終わり、策は見破られて破綻してしまう。そこで羽衣狐は、ケルベロスの動きを観察して、放射のタイミングを計る要素を探した。そして見つけたのが、先に述べた『僅かに顎を上げる』と言う癖だった。ケルベロスの癖を見破り、見事にタイミングを合わせて放射の口を封じた。

しかも、それだけではない。放射の口を奇襲の形で封じられ、続けざまに別の頭も放射直前に閉じられた事で、ケルベロスの中で『放射をしようとしたら口を閉じられる』と言う警戒心が植え付けられ、放射が出来ない心理状態に陥っていた。事実、鯉伴の時は途中で放射を止めた。

封印。

閉鎖。

強制閉鎖。

今のケルベロスは、見えない鎖によって口を閉じられているようなものだった。

駄目だっ……！ この関門では、もう敵を迎え撃つ事は出来ないっ……！

一鬼は、ただ呆然と立ち尽くしてただけだった。癖を見破られた攻撃など、恐れるに足らない。

実は、このケルベロスの癖は、主である一鬼は気付いていた。癖

とは、本人では分からない動き。攻撃のタイミングを知らせる不安要素でしかない癖は、早めに直すべきだった。しかし、一鬼は直さなかつた。

何故か？

それまで、何の問題も無く勝ち続けてきたからである。慢心しきつた一鬼の油断が、今回の失態を招いたのだ。

「くう〜！」

またしても相手にやられ、一鬼は顔を歪めた。

*

「ん……」

羽衣狐達が、第二関門を破つたところで、『俺』は意識を取り戻した。

ソレにいち早く気付いたのは、彼を尻尾で抱えてる羽衣狐だった。

「む……！ おお、人間！ 気が付いたか？」羽衣狐の顔が、パツと明るくなる。

「は、羽衣狐……。あれ？ 俺、どうしたんだっけ……？」

顔を左右に振り、『俺』は脳を完全に起こそうとする。

そんな彼の目に、巨体のケルベロスの姿が飛び込んできた。

「うわああああああ！ ケ、ケケ……ケリュベロス……！？」

「落ちて着け、人間。噛んどるぞ」

顔を真っ青にさせて叫ぶ『俺』に、羽衣狐は冷静に言う。
すると、鯉伴達も気付いてやってきた。

「おう、ようやく起きたかい？」

「起きて早々、喧しく喚きおつて……」

「鯉伴さん！ 土蜘蛛！」

二人を見た『俺』は、ケルベロスと一同を交互に見比べた。
恐る恐ると言った感じで、羽衣狐に尋ねた。

「あ、あの〜、今どんな感じなんですか？」

「お前の考えた策で、放射の口を破ったところじゃ」

「マジっすか!？」

策が上手く嵌まった事に、『俺』は驚き半分喜び半分で声を上げた。
た。

よしっ………!

羽衣狐から現状を聞いて、魔犬を前にしてるにも関わらず、『俺』は笑みを浮かべた。

よし、よし………! いいぞ………第二関門まで突破したっ………

! ここまで来たら、もう少しだっ………!

気持ちが高揚している『俺』の目は、ケルベロスの頭に向けられた。
た。

残るは頭………! あの最終関門『予知の頭』だけだっ………!

王手まで、後一步と迫った。

*

闘いの様子が流れてる室内に、気まずい空気が漂っていた。

「くっ……！ 何をやっておるのだ、あのクズは……！」

空気の原因は、映像を眺めてる閻魔大王にあった。

一鬼の迂闊なミスによって、羽衣狐達が戦況を盛り返した事で、不機嫌になってるのだ。

「あんなゴミ共相手に、何を手こずっておるのだ……！」

口から苛立ちを吐き捨て、酒を一口飲む。

後ろに控えてる部下達は、不機嫌を露にする閻魔大王に怯え、顔色を悪くしていた。

*

一鬼の心に、恐れが生まれた。

懸念があった。この勝負の様子を、城で観戦してるであろう閻魔大王が、機嫌を損ねているのではないかと。

その懸念は、不幸にも的中していた。

だが、今はまだ良い方だ。ココで勝てば、まだ言い訳が立つ。途中まで相手を調子に乗らせ、最後に絶望の底に叩き落とす演出だとか、とにかく言い逃れが出来る。

しかし、万が一敗北 『俺』達が勝利するなんて結果にでもなったら、ただでは済まない。

それは誰よりも、一鬼自身がよく知っている。

あの方は、敗北を許さない……！ たった一度の敗北も……

！もし負ければ俺は……俺はっ……！

胸中で不安と恐怖が荒れ狂う一鬼の脳内に、最悪の未来が過る。

「うう………！」

みるみる顔色は蒼ざめ、目は一杯に見開かれ、口は小刻みに震えて歯がガチガチと音を鳴らす。

精神的に追い詰められていく一鬼に、もはや余裕など微塵も無かった。

しばしの沈黙の後、一鬼は重い口を開いた。

「おい………」

「は、はい！」

手下の鬼は、慌てて答えた。

「ケルベロスの“首輪”を外せ……。予知の頭と妖気を、全解放させる………！」

「は………はっ！直ちに………！」

指示を受けた手下の鬼は、急いで準備に向かった。

残った一鬼は端正な顔を歪め、怒気と殺気が混ざったどす黒い感情を露にする。

「殺す………！俺が生き残る為に………ココである人間を、確実に殺す………！」

第一関門に続き、第二関門も攻略。

次なる関門は、最後にして最難関・予知の頭！
余裕の無くなった一鬼は、ついに全力で『俺』達を潰しに掛かる！
この最後の難関を、『俺』はどう攻略するのか！？
互いの生存を賭けた究極の闘いは、続く！
続くウ……！

十五ノ怪：心理の鎖（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： クロノさんからの質問。

『羽衣狐さんは子供を産むとしたら男と女どちらが欲しいですか？』

羽衣狐「そうじゃのう……今度は女子を産みたいのう。勿論、人間との子でじゃ」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

十六ノ怪：攻撃の波状（前書き）

この作品、たまに主人公脇役扱いで、羽衣狐達妖怪が主役扱いメインになっています。

十六ノ怪：攻撃の波状

究極の殺戮モンスター・ケルベロス。

現世に生還する為、地獄に堕ちた『俺』と羽衣狐達は、この強大な魔犬に挑む。第一関門、第二関門と突破していき、いよいよ第三最終関門である『予知の頭』を残すのみとなった。ケルベロスの生みの親である一鬼は、流れの悪さを察して予知の頭を解放した。一鬼の仕掛けと『俺』の戦略。

地獄での大勝負は、ついに最終攻防に突入する。重量感のある音を立て、ケルベロスの首に付いていた首輪が外れて落ちた。その瞬間、ケルベロスの妖気が膨れ上がる。

強大で危険な妖気を正面から受け、羽衣狐達は顔を険しくさせた。周辺の空気が急速に冷えていく感覚で、周りの獲物を触れずに弱体化させるような恐ろしい妖気だ。こんな妖気を人間の『俺』が受けたら、ひとたまりもないだろう。だが、羽衣狐の保護によって、妖気解放の際の衝撃を受けただけで済んだ。

それでも、霧囲気でケルベロスの異変を察して、『俺』は恐怖でブルブルと震える。

「あれ……？　なんか……アイツ、ヤバくなってません……？」
「うむ。どうやら、あの首輪は妖気を抑える道具だったようだ」

蒼ざめた顔で怯える『俺』と違って、羽衣狐は冷静だった。長ドスを構える鯉伴は、相変わらず片目を閉じた状態で不敵に笑っていた。

「奴も本気になったって事だろうな」
「上等だあ……返り討ちにしてやるよ……!!」

土蜘蛛は、拳を鳴らしてケルベロスを睨み付ける。闘いに貪欲な、腹を空かせた戦鬼が帰ってきた。

ケルベロスの妖気が膨れ上がっても、羽衣狐達に臆してる様子は見られない。ここまで、二つの関門を見事に破った事実が大きい。関門を破った事で自信が付き、ソレは勢いに変わる。

一同の心中に、この勢いに乗り、一気にケルベロスを潰そうと言う思いがあった。

「妖気がデカくなつたつて事は、さつきよりも楽しませてくれるんだろうなアアアアア！」

羽衣狐側から、土蜘蛛が声を上げて突っ込む。まるで部隊の特攻隊長のような勢いだ。

ケルベロスも咆哮を上げ、迎え撃つ態勢に入る。互いに射程距離に入り、まずは土蜘蛛が拳を振るう。対するケルベロスは、大きく開いた口で噛んで受け止めた。土蜘蛛は動じずに、すかさず残り二本の腕を振るって突きを放つ。またもケルベロスは、牙を立てて口で拳を受け止める。

腕の次は足だ。がら空きの腹目掛けて、土蜘蛛が蹴りを放とうと足を僅かに後ろに振る初期動作に入ろうとした瞬間だった。

何かを察したように、ケルベロスは拳から口を離し、素早く土蜘蛛の背後に回った。

まるで、一土蜘蛛の動きを読んだように《・・・・・・・・・・・・・・・・》

「あ？」

気付いて振り向いた時には、既に土蜘蛛は空を蹴っていた。そのせいで、すぐに背後のケルベロスに対応出来ない態勢になってしま

背後のケルベロスが、鋭い牙で土蜘蛛に噛み付こうとした。

その時、更にケルベロスの背後に襲撃者が現れた。

羽衣狐と鯉伴だ。二人とも刃を手に持ち、ケルベロスの首を獲りにかかる。標的は土蜘蛛に意識が集中して、討ち取れると思われた。だが、真ん中の頭だけが急に後ろを振り向き、逆に二人を喰い殺そうと迫る。

「ちっ………!!」

羽衣狐と鯉伴は、左右に位置をズラして紙一重で噛み付きを避けた。尻尾で護られてる『俺』は、悲鳴を上げない事で精一杯だった。

「おおおおおー!」

土蜘蛛も背中を噛まれたが、お返しに肘打ちを三つ首の内の一つに喰らわせた。

ほぼ相討ちの形となって、一旦両者は距離を離れた。

土蜘蛛はケルベロスから視線を外し、自分の血で汚れた手を見る。

「躑がなつてねえ狂犬だなあ………が、嫌いじゃねーぜ………!」

闘いを楽しむ土蜘蛛とは対照的に、羽衣狐と鯉伴は真面目で、真剣な顔をしていた。

「土蜘蛛の蹴りを放たれる前にかわした事といい、我等の動きに気付いて喰らい付いてきた事といい、どうやら『予知の頭』が働いておるようじゃのう」

「ああ。それに、動きもさっきより早くなってやがる。こりゃ、早めに決着つけねーとヤバいかもな」

攻撃を避けられ、先手を打ってきたこと事態には、二人共驚いていなかった。予知の頭が発動してる事は、妖気解放の時に薄々感づいていたのだ。

いよいよか……。

羽衣狐の尻尾で保護されてる『俺』は、高まる緊張にゴクリツと唾を飲み込んだ。

ココだ……！ ココが正念場……！ あの予知の網をかいくぐって、攻撃を当てるんだっ……！

勝負前に、『予知の頭攻略法』も皆に話してある。後は、実行して成功させるだけだ。

「フツ……」

息を一つ吐き、土蜘蛛は身を屈めて地に三つの拳を着け、突進の構えを取る。

その瞬間、黒いオーラのおそれような畏が、迸って全身から盛れ出る。鬼神を思わせる、その圧倒的な威圧感は、並の相手なら意識を奪って地面に倒す程だ。

「いくぜえ……！ あん時の借り、返させてもらっぜえ……！」

畏を解き放ち、土蜘蛛も本気になる。

頼むぞ、土蜘蛛っ……！

“最初の一手”を土蜘蛛に任せ、後ろで『俺』は見守っていた。

*

ケルベロスの力の解放を確認した一鬼は、再び落ち着きを取り戻

していた。予知の頭は問題なく働き、相手の行動を先読みして難なく攻撃をかわし、優勢に立っている。妖気解放によって、ケルベロスの動き自体も上がっていた。

一鬼は余裕の笑みで、鬨いの場を見下ろす。

ククク……お前達の進撃もここまでだ。第一、第二と破られはしたが、最後の仕掛け　予知の頭はそうはいかない……！　攻略は不可能……！　どう攻めてくるか、何で攻めてくるか、解答付きの攻撃を避けるようなモノだから……！　あり得ないのさ……予知の頭に限って敗北など、決して……！

どんな強力な攻撃も、結局当たらなければ意味が無い。そして、相手の動きを把握すれば、隙を衝く事が出来る。

予知の頭は、一鬼が仕掛けたケルベロスの能力の中でも自信作に入る。

しかし、ふと見た『俺』の顔で胸中がざわついた。

何だ……あの顔は……？　単に勝利を祈ってる顔じゃない……もっと具体的な、何か実るのを願ってるような……。

前で構えてる土蜘蛛の背を見つめる『俺』は、何かを祈ってるよな、それでいて何か狙っているような様子だった。

ここまで、二つの仕掛けを破られた一鬼の心中に、一つの懸念、不安が生まれる。余裕の顔に、僅かだが陰りが出て、額に汗を滲ませた。

まさか……いや、あり得ない……！　予知の頭の攻略など……！

頭に過る嫌な可能性を、必死に否定する。が、否定しようとする程、逆に胸中の不安は広がっていく。

思い違い、勘違い、杞憂なハズだと自分に言い聞かせる中、ついに勝負が動いた。

突進の構えで止まっていた土蜘蛛が、動き出した。力強く地を蹴り、ケルベロスに向かって突っ込む。

いや、土蜘蛛だけではない。猪のように突っ走る土蜘蛛の背中に

は、羽衣狐と鯉伴の姿があった。走り出す直前に、二人は土蜘蛛の背中に飛び乗ったのだ。背中に乗っている二人も、それぞれ得物を構えている。

ケルベロスは、迫り来る獲物を鋭い目で睨み、正面から迎え撃つ気であった。

そして、間合いを詰めたところで、羽衣狐側が仕掛けた。

「ココだっ！」

羽衣狐の合図で、三人は動く。

生じる風圧すら押し潰す武器となる土蜘蛛の巨大張り手、鏡花水月で翻弄させての鯉伴の刃、羽衣狐の五尾の刃・鬼殺しが、一斉にケルベロスに襲い掛かる。狙うは、三つの頭。

大物妖怪による、三位一体の超強力同時攻撃。まともに受ければ、ただでは済まない。

だがしかし、地獄の番犬は全く動じない。ケルベロスは、攻撃前から既に回避動作をしていた。鯉伴の刃、羽衣狐の尻尾を敢えて受け、真ん中の頭は土蜘蛛の張り手を避けた。

ケルベロスの真ん中の頭は、羽衣狐達から感じる妖気、畏、体の動きから、瞬時にどの攻撃が一番危険か、どこを狙った攻撃なのか、敏感に察知して、回避行動を取る。迫る三つの攻撃の内、一番威力が高いのは土蜘蛛の張り手だった。

ケルベロスが相手の攻撃を予知の頭を使ってかわして、一鬼は笑みを浮かべる。

よしっ……！ 予知の頭で先読みして回避し、すぐさま反撃をして終わりだっ……！

ケルベロスの真ん中の口が、土蜘蛛の首筋に噛み付こうとした刹那、驚きの展開が生じた。

「七尾の大槌……！」

突然、鈍い音が場に鳴った。

一鬼や見物人が注視する先に、衝撃の光景があった。右の頭を攻撃していた羽衣狐の手に、いつの間にか身の丈以上もある巨大な槌が握られていた。真っ黒に塗り潰された大槌は、ケルベロスの真ん中の首の脳天に打ち付けられているのだ。

「よしっ！」

「なっ……！？」

『俺』は興奮した声を上げ、一鬼は愕然とした顔で立ち尽くす。

羽衣狐は、打ちおろした大槌を引いて尻尾の中にしまい、別の尻尾から新たな武器を取り出す。

「八尾の爪っ……！」

尻尾から取り出したのは、巨大な刃のような爪だった。鏢の無い柄の先に、身の丈以上ある動物の爪のような刃が生えている。その爪は、透き通るような美しさで、生物の命を一瞬で刈り取りそうな、冷たい恐ろしさも感じられる。

「ったく、可愛い顔して物騒な得物だねえ……！」

いつの間にか羽衣狐の側に、長ドスを構えた鯉伴の姿があった。

「一気に決めるぜえ！」

「貴様が妾に指図するな！」

刃を構える二人は、ケルベロスの真ん中の頭を狙う。

その頭は、先ほどの羽衣狐の一撃を受けて、フラついている。だ

らしく舌を垂れ出して、半ば意識が朦朧としている。

「よせえ……！ やめろおおおおおお！」

二人の行動を見て、たまらず一鬼は悲鳴にも似た声を上げて訴えた。

しかし、既に手遅れだった。

次の瞬間、羽衣狐と鯉伴の刃が横薙きに振り抜かれた。

ややあつて、ケルベロスの真ん中の首が、ズルツと横に大きくズレた。繋ぎを失った大きな頭は、本体から離れて地面に落ちた。直後、首の断面から勢いよく鮮血が噴出した。その光景は、まるで鮮血の噴水である。

「おおおおお！」

見物人からは、どよめき上がる。

頭を一つ失ったケルベロスは、左右の頭が鳴き、後ろに退がる。

羽衣狐と鯉伴は地面に降り立ち、刃を振るって付着した血を払う。

「これでもう、我等の動きを読む事は出来ぬ……！」

台詞を言い終えると、羽衣狐は肩を叩かれた。相手は鯉伴だが、何の用で呼ばれたかは容易に予想出来た。

後ろを振り向き、羽衣狐は尻尾に巻かれてる『俺』を見た。大量出血を見た衝撃に耐えられなかったのか、またも『俺』は気絶していた。

やれやれ、と羽衣狐は苦笑いで溜め息をつく。

一瞬の攻防で、形勢は逆転した。

そして、この展開に一番動揺しているのは言うまでもなく、一鬼である。

「バ……バカな……！ ケルベロスが……予知の頭が、敗れた……！？」

目の前の現実が信じられず、声は震えていた。シヨックが大きすぎた影響で、平衡感覚が狂い、体がフラついてる錯覚に陥る。まるで、足場の無い無重力空間をさまざましているような不安定な感覚だった。

『俺』が立てた『予知の頭攻略法』も、複雑なモノではない。まず、それぞれ本気の力で同時攻撃を繰り出す。そうすると、ケルベロスは予知の頭を使って一番危険な攻撃を回避する。それとほぼ同時に、ケルベロスが回避対象にした人物とは別の者が、更に強力な攻撃を加える。予知の頭でも追いつかない二段攻撃こそ、『俺』の戦略だった。

「い、一鬼様……！」

後ろに控えてる手下の鬼が声をかけるも、今の一鬼には届いていなかった。

顔面蒼白の一鬼の心中は、絶望の色で染まりつつあった。ケルベロスの能力を次々と潰され、戦況は悪くなっていく。妖気解放で体の動きは向上したが、司令塔でもある真ん中の頭を失ったのは大きい。おそらく、まともに動く事は出来ないだろう。

敗色が濃くなってきた中で、しかし一鬼はまだ諦めていなかった。絶望の色に染まっていく心中に、まだ僅かながら希望の光が残されていた。

「一鬼様！ このままでは、ケルベロスが……！」

ようやく手下の鬼の声を聞き取る事が出来た一鬼は、厳しい顔つ

きで、重い口を開いた。

「まだ、アレがある……！」
「え？」

絞り出したような一鬼の呟きに、手下の鬼は訝る。

実は、ケルベロスには先の三つの能力の他に、『第四の能力』が備わっているのだ。今まで勝ち続けてきた事で、実戦で使われなかった隠し能力とも言える。その能力が、一鬼の最後の頼みの綱だった。

負けてたまるか……！　こんな所で、こんな奴等に……！
俺は支配する側になるんだっ……！

正真正銘最後の、最後の仕掛けに一縷いちろうの望みをかけた一鬼と、三つの関門を破って勝負を決めに掛かる羽衣狐達。

勝利の女神は、一体どちらに微笑むのか？

決着の時、迫るっ……！

十六ノ怪：攻撃の波状（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者：ミスターサーさんと四季さんからの質問。

『サー「主人公君がもし浮気したら、狐さんはどうする?」』

羽衣狐「そうじゃのう……。妾の魅力を、その身にいやと言っほど教え込んでやるうぞ。ん？ 具体的にどんな内容か、じゃと？ ふふふ、恥ずかしくて言えぬ」

『四季「じゃあ逆に主人公君、もし狐が浮気したらどうする?」』

俺「ん〜、どうしようか？ とりあえず、話し合っ。ただし、相手を刺激しないように低姿勢でね。……でも、浮気しないって信じないな」

投稿者：h a k iさんからの質問。

『主人公に質問です、

羽衣狐の分離前（旧羽衣狐）と分離後（リハンの元妻）、融合後（新羽衣狐）、どれが一番気持ち良かったですか？（笑）』

俺「どれが一番『好きか』じゃなくて、どれが一番『気持ち良かったか』とは……。なんちゅう質問だ……。しかも（笑）って、明らかに楽しんでるし……。そうだな……。気持ち良さは、融合後が一番かな。フュージョン！」

質問ありがとうございました！
今後感想・質問お待ちしております！

十七ノ怪：絶望の瞬間（前書き）

俺「誰か……めづべく先生を呼んでください」

十七ノ怪：絶望の瞬間

究極の殺戮モンスターに挑み、現世への完全生還を果たそうとする『俺』と羽衣狐達。

造物主である一鬼がケルベロスに仕掛けた三つの関門を、『俺』は知略と閃きを振り絞った戦略で打ち破った。その結果、ケルベロスは頭部を一つ失い、羽衣狐側は千載一遇の好機チャンスを得る。

策と仕掛け、執念と執念が激突する死闘も、いよいよ大詰めを迎える。

真ん中の頭を失ったケルベロスは、後ろに下がって羽衣狐達から距離を取った。息を荒くしているケルベロスは、明らかに羽衣狐達を警戒している。いや、怯えている、と言った方が正しいか。その証拠に、躊躇なく獲物に喰らい付いてきた魔犬が、初めて襲い掛かるのを踏みとどまっている。

今まで、地獄の番犬として、この地の獄で頂点に君臨してきた王者が、初めて挑戦者に臆した。自身の命の危険を味わってこなかった魔犬が、今確かに『死の気配』を感じて恐怖している。それは、つまり、羽衣狐達をおそれたと言う事だ。ケルベロスは、羽衣狐達の畏おそれに呑み込まれていた。化かし合いである妖怪同士の闘いにおいて、これは致命傷とも言える事態である。

その致命傷を、羽衣狐達は見逃さない。

「どつやら、今の攻防で我等を畏れておるようじゃのう」

羽衣狐の黒の瞳に、サディスティックな黒みも加わり、更にどす黒くなる。

ふと羽衣狐は振り向き、尻尾の中で気絶中の『俺』を見た。

「コレッ、いつまで眠っておる。起きぬか」

ペシペシ、と空いてる尻尾で『俺』の頬を軽く叩いた。

しかし、なかなか起きない。羽衣狐は、仕方ないとばかりに溜め息をつき、今度はかなり強めに尻尾でビンタした。

「ぶっ!?! いっつゝ!」

「ようやく目覚めたか」

「おいおい、もう少し優しくしてやれよ」

容赦無い羽衣狐に、鯉伴は苦笑いを浮かべる。

叩かれて赤くなつた頬を押さえて、目覚めた『俺』は羽衣狐と向き合う。

「あ……羽衣狐……。あつ！ 闘いは……!?! ケルベロスはどうしたんですか!?!」

「落ち着け、人間。あの狂犬ならば、我等におそれをなして向こうで固まっておる」

取り乱す『俺』を鎮め、羽衣狐は前方を指差す。左右二つ首となつたケルベロスは、羽衣狐の言う通り立ち位置から微動だにしないで、こちらを睨んでいた。

頭を一つ失つたケルベロスを視認して、『俺』は策が成功した事を察した。

「予知の頭、攻略出来たんですね!」

「そうじゃ。そして今、奴は我等の畏に呑み込まれておる。結果は決まったも同然だ」

関門を破った上に畏まで抱かせ、羽衣狐達は完全に優位に立っていた。

「弱いもんイジメは趣味じゃねーんだ……こうなったら、さっさと決着をつけるぞ」

怯えているケルベロスに興奮めしたのか、土蜘蛛はつまらなそうに言った。

皆の余裕な態度と弱ったケルベロスの状態を見て、自然と『俺』は笑い、握り拳を固める。

よしっ！ イケる！ もうイケる！ ケルベロスに備わってる厄介な仕掛けは、全部破って取り除いた……！ 驚異的な身体能力……妖気解放で動きは格段に上がったけど、頭を失って畏れを抱いている精神状態じゃあ万全じゃない……！ 放射の口……コレも警戒心を抱かせて、心理的に封じた……！ そして最後の難関、予知の頭も完全攻略……！ こうなったら、もうこっちのモノだ……！ 全ての関門を打破した事で、『俺』は羽衣狐達の勝利を確信した。そして、羽衣狐達の最終攻撃が始まった。

*

俺は負けられない。

崖の上から一鬼は、苦渋の顔で闘いの場を見下ろしていた。

こんな……こんな所で、俺は負けられないんだ……！ 今まで、あの醜悪な閻魔大王シジイの下働きで耐えてきた……！ 耐えてきたのは、老い先短い奴が死んだ後を継ぐ為だ……！ 使われる側ではなく、使う側……支配者、王になる為だ……！

野心。

燃え盛る野心が、一鬼の原動力となり、今の地位まで登り詰めてきたのだ。積み重ねてきたモノを失わない為にも、ここで負ける訳にはいかない。

胸に野望を秘める一鬼の前で、闘いが再開された。羽衣狐側から仕掛け、攻勢に出る。

迎え撃つケルベロスは、迫り来る恐怖を振り払うように、咆哮を上げて噛み付こうと頭を伸ばす。標的は鯉伴。ケルベロスの太く鋭い牙は、鯉伴の体を噛みちぎった ように見えた。

「ソイツは、俺の幻さ」

噛み付いてきたケルベロスの右頭部の後ろで、鯉伴が長ドスを構えていた。

ケルベロスが噛み付いたのは、鏡花水月によって認識をズラして生じさせた幻だった。

再びケルベロスは、牙を剥いて襲い掛かる。しかし、いくら牙を向けても鯉伴には届かなかった。

「無駄だぜ……！ 今のためえじゃあ、俺の姿を捉える事は出来ねえぜっ……！」

牙を剥くケルベロスと、長ドスを振り抜く鯉伴がすれ違う。

鯉伴は傷を負わず、逆にケルベロスは首筋に切り傷を受けて、鳴いた。

「そらみる……！」

鯉伴の片目が、魔犬を射抜く。

そして、羽衣狐もケルベロスの左頭部と対峙していた。

「飼い主に代わって、最期に妾が賤をしてやるう」

腰に手を置いて相手を見下ろす様子は、不遜な女王様のようなだ。

羽衣狐の畏に気圧され、興奮したケルベロスは大口を開けて襲い掛かった。

その瞬間、ケルベロスは見た。極度の興奮状態で、曇っていた目が見たのは、黒い弓矢を構えた羽衣狐だった。

標的を見据える羽衣狐は、氷のような微笑を浮かべていた。

「六尾の弓矢っ……！」

羽衣狐の手から、黒い矢が放たれた。

畏を纏った矢は、漆黒の線を宙に引き、目にも止まらぬ速さで大きく開かれたケルベロスの口目掛け、一直線に飛ぶ。次の瞬間、漆黒の線はケルベロスの頭を口から貫いた。口の奥に作られた丸い傷口から、出血を起こす。

「噛み付く相手は選ぶ事だ……！」

羽衣狐は、悠然とした態度で見下ろしていた。

「ちまちまやってんじゃねーよ！」

土蜘蛛が割って入り、ケルベロスの前に出る。

土蜘蛛の登場に、明らかにケルベロスは怯えた様子を表す。姿を見た瞬間に、ビクツと体が震えた。放射の口を封じられたキツカケの人物の登場に、おそれをなしたのだ。本来なら先ほどの攻防で、ケルベロスは冷気放射で羽衣狐に応戦する事も出来た。だが、彼女の後ろに居た土蜘蛛の存在が、心理的圧迫を生み、放射を許さなかったのだ。

土蜘蛛と対峙して、追い詰められたケルベロスの精神状態は限界に達する。雄叫びと共に上体を上げ、二つの首だけでなく、二本の太い前足も使つて襲い掛かる。

対する土蜘蛛は、正面から受けて立つた。三本の腕を伸ばして、ケルベロスの首と前足と組み、力勝負に突入する。だが、現世でのリクオとの勝負で右腕を一本失っているので、頭を一つ捕らえられず肩への噛み付きを許してしまう。

「ぬぐうううう！」

全力を出して、土蜘蛛はケルベロスと取っ組み合う。

ケルベロスは、必死になって土蜘蛛を潰しに掛かる。噛み付いた頭は牙を深々と肉に食い込ませ、残りの頭と前足は、全身の力も乗せて相手を押していく。

負傷して畏れを抱いたとは言え、純粹な力では実質ケルベロスの方が上らしく、徐々に土蜘蛛が押されてきた。

しかし、相手は土蜘蛛だけではない。

ケルベロスの意識が眼前の敵に集中してる隙に、羽衣狐と鯉伴は、それぞれの獲物で前足に傷を負わせた。痛みに絶叫するケルベロスだが、集中を解いた事が命取りとなった。

一気に押し返した土蜘蛛は、突き上げるように張り手を放った。

張り手は、ケルベロスの左頭部の顎に決まる。強烈な一撃を受けた左頭部は、脳にも衝撃が渡つて意識が飛んだ。直後、フラつく左頭部に畳み掛けるように、土蜘蛛の拳がめり込み、鼻や口から血を吹き出した。殴られた左頭部は、グツタリと項垂れ、動かなくなった。今の攻撃で、左頭部も仕留めた。

残るは、右頭部のみ。

耐えろっ………！

一鬼の顔色が、ますます悪くなっていく。

最後の仕掛け……アレが発動するまで、耐えるんだっ………！

冷や汗で顔を濡らした一鬼は、心中で必死に懇願する。

一鬼が望みを託す最後の仕掛けは、発動してから仕上がるまでに時間がかかる。もう発動している可能性を考えても、一分一秒でも長く耐え、時間を稼ぎたい。

耐えろっ……！ 耐えろ、耐えろ、耐えろ、耐えろっ……！

決まれっ……！ 決まれ、決まれ、決まれ、決まれっ……！

追い詰めていく『俺』も、心中で勝負が決まる事を願っていた。

二人が祈る中、闘いは決着に向けて急速に進む。

「これで……！」

「終わりじゃ……！」

鯉伴と羽衣狐が刃を構え、残り最後の右頭部を落とすに掛かる。

二人の一振りには、ケルベロスの首を斬った。三つ首の内、二ヶ所を血の噴水と化し、全ての頭を失った体は制御を無くしたロボットのように目茶苦茶に動き出す。

最後の頭は、あっけなく落とされた。

「あ、あああ……うあああああああああ！」

最悪な光景を目にした一鬼は、目に涙を浮かべ、精神は暗闇に落ちていった。深い深い、絶望と言う底の無い闇に落下していく。

「スゲー！ アイツ等、マジでスゲーぞ！」

「もうああなったら、勝ったも同然だろう！」

絶望のドン底に向かって沈んでいく一鬼とは対照的に、見物人のテンションは最高に高まっていた。頭を失ったケルベロスなど、見た事が無い事態に、盛り上がりは最高潮に達する。

も、もう駄目だ……！ ああなつたら、後は倒されるのみ……！ 万全の状態なら、あんな奴等敵じゃないのに……今の、あんな状態で耐えるなんて……とても無理っ……！ 耐え凌ぐなんて不可能だっ……！

自分の敗北を悟り、涙が溢れ出る。その場でガツクリと頂垂れ、地面に大粒の涙を滴り落とす。

戦場では、闘いが終わろうとしていた。

「首をはねても死なぬとは、気持ちの悪い奴じゃ……。人間、大丈夫か？」

「は、はい。何とか……」

変わり果てたケルベロスの姿に、吐き気が込み上げてくるが、『俺』は何とか抑えていた。

羽衣狐の言う通り、頭を潰しても倒れない生命力は気持ち悪い位に驚異的だ。しかし、全身で痙攣を起こして、もはや立っているのが精一杯の状態なのは明白だ。後一撃でも入れれば、容易く倒れるだろう。

「なら、とつと決めちまおうぜ」

鯉伴も長ドスを構え、最後の―撃の準備をする。

腕を回す土蜘蛛からも、早く終わらせようと言つ気配が感じられた。

もうすぐ終わる。最後の―撃を決めて終われば、再び現世に戻つて自由になれるのだ。

羽衣狐は、尻尾から三尾の太刀を取り出した。心臓を貫いて、確実に息の根を止めに掛かるつもりだ。

「これで終幕じゃ………！」

動かぬ^{まど}と化した死にかけの体にトドメを刺して、闘いの幕を降ろそうとした時だった。

突然、ケルベロスの体が大きく跳ねた。

「ん？」

異変を察した羽衣狐達は、動きを止めた。

ケルベロスの体は、今まで以上に大きな痙攣を起こしていた。いや、痙攣と言うより、体の中で何かが暴れ出ようとしているような、そんな感じだった。

一同に嫌な予感が走り、寒気を感じた直後、予感は現実と化した。背中が縦に割れ、血飛沫が地面に飛び散った。周囲に激しい血の雨を降らせる背中割れ目から、ソレは出てきた。

オオオオオオオオオオオオ！

空に上がる咆哮と共に現れたのは、悪魔だった。

信じられない驚愕の事態に、『俺』は血の気が失せた蒼い顔になり、絶望する。歯をガチガチと鳴らし、体は金縛りに遭ったように動けなかった。

絶望の咆哮を上げ、逆襲の牙を剥き、悪魔が甦るっ………！
絶望！

圧倒的絶望オオオ！

十七ノ怪：絶望の瞬間（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者：ライトさんからの質問。

『京妖怪と主人公に質問です。』

羽衣狐様に一番似合うと思う格好。もしくは、着てもらいたい服ってありますか？

ちなみに。私が着てもらいたいのはメイド服です』

しょうけら「マリア様には、是非、修道服を着て欲しいものだ！

シスター姿となり、容姿まで完璧に闇の聖母となられた姿を想像したら……！ おっと、私とした事が鼻血を……」

俺「メイド服もいいけど、俺的にはスク水姿が見たいな！」

狂骨「お姉様が穢れる……！」

感想・質問ありがとうございました！

質問は引き続き募集中です！

*

「終わり終わりっ！ 終戦、敗戦っ！ 敗者決定確定っ！」

「貴様の息の根を止めるのは、妾だっ……っ……！」

次回『十八ノ怪：決着の時』

死闘終結！

生き残るのは、誰だ……？

十八ノ怪：決着の時（前書き）

狂骨「羽衣狐様を穢すなアアア！」

俺・しょうけら「ぎゃああああああ！」

前回の質問に対する答えの件で、蛇縛りの刑に処せられた馬鹿二人。

十八ノ怪：決着の時

一鬼が仕掛けたケルベロスの三つの能力に対して、『俺』は羽衣狐達の力を借りた戦略で潰していった。

三つの能力を破られ、形勢は完全に逆転した。ケルベロスには羽衣狐達に畏れを抱き、呑み込まれて押されてしまう。

羽衣狐達の刃が、ケルベロスの三つの頭を落とす、残るは死に体に近づく胴体にトドメを刺すのみとなった。だが、しかし、ソレは叶わなかった。

傷だらけの胴体から、魂を揺るがす恐怖の咆哮が上がった。甦るは、地獄の番犬・ケルベロス！

悪夢。

今、目の前で起こっている事態を一言で表すなら、悪夢だ。

頭を失った胴体から、背中を喰い破って巨大な頭が姿を現す。それから前足、胴体と這い上がり、全身が見えてきた。脱け殻となった胴体は、地面に捨てられる。

脱け殻から出てきたモノは、黒い体毛に覆われ、巨大な胴体に三つの首を持っていた。見間違えるハズもなく、ソレは先ほど倒したと思われたケルベロスだった。

「お……おお……！」

崖上で戦場を見ていた一鬼は、さっきまで絶望していた様子とは一転して、安堵と喜びに満ちた顔になる。

やったっ……！ 間に合った……！ これで生き残れる……

！ もう俺に敗北は無いつ……！ 最後の仕掛け……甦生能力で、形勢逆転だっ……！

狂喜の笑みを浮かべ、一鬼は自身の勝利を確信した。

ケルベロスの隠された四つ目の能力とは、死に体の内から甦る甦生能力である。肉体に強烈な損傷を受けた場合、すぐさま今の体の中で新たな体を造り出し、脱け殻となった前の体から出てくるのだ。しかも、単に甦生するのではない。それまでに受けた攻撃に順応した、以前よりも強固な肉体を備えて出てくるのだ。

より長くケルベロスに従えようと、不死の下部を欲した一鬼が仕掛けた能力が、この土壇場で活きた。死の淵から、魔犬が甦った。

戦場で甦ったケルベロスと対峙してる羽衣狐達は、驚愕を禁じ得なかった。この土壇場での悪魔の復活など、誰も予想すらしていなかった。ほぼ勝ちを確信していただけに、そのショックは大きい。

上で見ている見物人も、あまりのショックに声を発する事も出来ずにいた。

直接対峙している羽衣狐達は、その比ではない。

ぐっ……！

『俺』はケルベロスから目を逸らし、崖上で狂喜染みた笑みをしてる一鬼を涙目で睨んだ。

あの野郎オオオ！ ふざけんじゃねーよ……！ 何だよ、何だよ……！？ 何なんだよ、コレは……！？ ここまで必死に辿り着いたのに、このクソゲーみたいな展開……っざけんなよ……！

殴りたい。

今すぐ、あのニヤけ顔を殴ってやりたかった。皆で力を合わせて、やっと勝ちを掴めると言った時に、あの復活した魔犬が奪い去った。希望と言う光を、呑み込んで闇の中に消した。

その原因を作った一鬼を殴り飛ばしたいが、今はそんな場合ではない。目の前に居る甦った魔犬から、生き残らなければならぬのだから。

恐らく、先の闘いで潰した能力も回復してるだろう。こちらは、負傷したり力を消耗させたり、決して良い状態とは言えない。最悪なタイミングで、復活してきたものだ。しかも、先の攻略法が、目

の前の新たなケルベロスに通用するかも怪しいところだ。陰陽師特
性の薬も、復活したケルベロスの体には回ってないかもしれない。
顔を最高に悪くしてる『俺』の胸中は、絶望で満ちていた。今
まで味わった中でも、最も強い“死の気配”を感じていた。

「おいおい、んなのアリかよ……？」

笑みを浮かべてる鯉伴も、復活したケルベロスの強大さに冷や汗
を流している。

復活したケルベロスは、迸る全身から畏が溢れ出て、威圧感も増
していた。

「おもしれえ……！ もう一回壊してやるぜえ……！」

バトルジャンキーな土蜘蛛は、臆するどころか逆に楽しんでいた。
普通なら、ココで土蜘蛛を頼もしく思うところなのだが、今の『
俺』には出来なかった。復活したケルベロスの存在が、あまりにも
大きすぎて、恐すぎるのだ。

そして、ケルベロスが動いた。三つの首が、同時に大きく口を開
いた。

瞬間、羽衣狐、鯉伴、土蜘蛛の三人は危険を察知した。

「人間っ！」

「やべえ！」

羽衣狐が『俺』を庇い、鯉伴と土蜘蛛も回避行動を起こした時、
ケルベロスが仕掛けた。

開かれた大口から、炎、雷、冷気の三つを同時に放射した。しか
も、三つの放射は螺旋を描くように混同し、一つの極太の閃光とな
って羽衣狐達に迫る。

直後、戦場に極光と轟音が広がった。地震のような揺れが起こり、地面に亀裂が走る。崖上の見物人の何人かは、足下に生じた亀裂に身を落としてしまう。

やがて、光と音、揺れの三現象が収まり、戦場は大量の砂煙に包まれていた。

放射と言うより、砲撃を放ったケルベロスは、砂煙の中を動かずにジツとしている。

その時、砂煙の一部が吹き飛んだ。

「ケルベロスウウウウウ！」

砂煙を割って現れたのは、土蜘蛛だった。砲撃を間一髪で避け、ケルベロスに迫っていたのだ。

拳を振り上げ、ケルベロスの顔面に突きを繰り出そうとする。だが、次の瞬間、ケルベロスの姿が消え、土蜘蛛の拳は空を突いた。

「何っ……!?!」

突然視界から標的が消え、土蜘蛛は声を上げた。

その直後、土蜘蛛は頭に強い衝撃を受けた。上からの衝撃に地面に伏した土蜘蛛が顔を上げると、頭上から噛み付いてこようとしてケルベロスと目が合った。土蜘蛛の突きを、強靱な脚力で跳んで避け、前足を振り下ろして頭上から土蜘蛛を叩き付けたのだ。

そして気付いた時には遅く、ケルベロスは土蜘蛛の頭を噛んで掴んだ。顎と太い首の力で土蜘蛛の巨体を持ち上げ、振りかぶって放り投げる。

「うおおおおおおお！」

声を上げながら土蜘蛛は、弾丸のような速度で壁に叩き付けられ

た。瓦礫の山に埋もれ、再び砂煙に包まれる。
砲撃による砂煙が消え、戦場全体が見えてきた。

「うっ……!!」

「な、何だありゃあ!？」

上に居る見物人は、戦場を見下ろして驚愕した。

戦場に、先程まで無かった大きなクレーターが出来ているのだ。
ケルベロスの砲撃によって作られたモノで、その威力は、京都の街を破壊した清明の一撃に匹敵する。

そして、そのクレーターの付近に、倒れている羽衣狐と『俺』、鯉伴の姿があった。

「ぐっ……!!」

片腕を押さえて、鯉伴は険しい顔で立ち上がった。押さえてる左腕からは、血が滴り落ちている。

三人共、直撃こそ免れたものの、強力な爆風を受けて負傷していた。

その様子を見て、一鬼は高笑いを上げた。

「ククク……クハハハハハハ！ 終わり終わりっ！ 終戦、敗戦っ

……!! 敗者決定確定っ……!! 処刑だ処刑っ……!! 公開処刑っ

……!!」

一鬼の狂喜に満ちた声が、場に響き渡る。

一時はヒヤツとしたが、ケルベロスの復活で最悪の事態だけは免れた。『俺』達を始末した後で、閻魔大王から多少の不始末を咎められるだろうが、最低限の信用は維持出来る。それで上出来だ。

我が身の安全を確保する為、一鬼は最後の命令を出す。

「ケルベロス……！ 魂の一片も残さず、喰らい尽くせ……！
無様な敗者をつ……！」

主の命を受け、ケルベロスが動き出した。圧倒的の死の雰囲気を感じ、弱った獲物へと近づく。

死神の足音が、ゆっくりと羽衣狐達に歩み寄る。

*

『俺』は、泣いていた。

羽衣狐の腕に抱かれて、泣いていた。

悔しかった。ここまで、勝つ仕組みを念入りに積み上げてきたのに、最後の最後に起こった不測の事態に押し潰された。全てが水泡に帰ってしまった。

嫌だ……！

『俺』は泣き続ける。

嫌だ……！ 死にたくない……！ 羽衣狐と離れたくない……！

羽衣狐を抱いて、『俺』はすがり付く。情けない格好だが、死んで羽衣狐と離れるのが、たまらなく恐いのだ。

当の羽衣狐は、そんな『俺』に呆れるでもなく、より一層力強く抱いて立ち上がった。

「安心せよ、人間……！ お前だけは、妾が必ず護るでな……！」

二度と愛しい人を失うまいと、羽衣狐は『俺』を抱き締める。

それからケルベロスに視線を向け、何やら覚悟を決めた顔つきに

なる。

「鯉伴……。人間を連れて、遠くに逃げよ……！」

「悪いが、ソイツは出来ねー相談だ……。アンタの身体は山吹のモンだ……。もう二度と、ソイツを失う訳にはいかねえのさ……。！　アンタが、その人間を死なせたくないように、な……」

これ以上の会話は無駄と悟り、二人は口を閉ざした。

最悪、二人が残って『俺』一人で逃げてもらう事になりそうだ。

羽衣狐と鯉伴の会話を聞いて、『俺』は泣くのを中断した。

駄目だ……。！　俺が死ぬのは嫌だけど、羽衣狐が死ぬのはもっと嫌だ……。！　クソオ……。！　何か……。！　何か無いのかよ……。！　勝てないまでも、せめてこの窮地を切り抜ける打開策を見つけたい。恐怖で半麻痺してる頭をフル回転させて、必死に『俺』は考える。

とりあえず、まずは整理だ。現状で闘えるのは、鯉伴と羽衣狐の二人のみ。その能力は。

そこまで考えが至った時だった。

あ、ああ……。ああああ……。！　あつたアアアア！

一筋の光明を見つける。

この最後の最後の土壇場で、起死回生の奇策を見つけた。

真正正銘、これが最後の手段だ。

急いで『俺』は、前の二人に声をかけた。

「羽衣狐……。！　鯉伴さん……。！」

「何じゃ？」

「ん？」

羽衣狐と鯉伴はケルベロスから目を離さず、前を向いたまま答えた。

背中を向けている二人に、『俺』は先程発見した最後の策を話す。聞いた二人は、思わず驚いた顔で振り返った。

「人間……お前、本気で言っておるのか……？」

「はい！ もう、これしか手は無いです！」

『俺』の意見に、羽衣狐は顔を顰める。

確かに、『俺』が見つけた策ならば、あの魔犬に対抗出来るかもしれない。だが、羽衣狐は迷う。直接の因縁が無いとは言え、かつての怨敵の息子とアレをやるなど、戸惑われる。

しかし、事が事だ。つまらない意地を張って、今ある大事なモノを失ってはもともこもない。

意を決して、羽衣狐は答えた。

「よかろう……但し、今回限りじゃ……！ お主もよいな、鯉伴？」

「おお。俺は歓迎だぜ……！」

希望を見出だしたからか、鯉伴は不敵に笑っていた。

そして、二人が『俺』の案を受け入れたと同時に、ケルベロスが襲い掛かってきた。太く鋭い牙を剥き、喰らい尽くさんと大口を開けて迫り来る。

魔犬の牙が届こうとした刹那、標的である羽衣狐と鯉伴が強い光に包まれた。二人から発せられる光に、ケルベロスはギョツとして牙を止めた。

「なっ……何だっ……！？」

上で様子を見ている一鬼も、突然の事態に驚く。

何事かと動揺する一鬼は、一瞬ゾクリッと悪寒を感じた。二人が居た、あの光から大きな畏を感じたのだ。

ま、まさか……！？

嫌な予感がして、心臓の鼓動が早まる。引きかけていた汗が、また大量に出てきた。

やがて光が収まり、一人の人物が姿を現す。

「鯉伴よ……鬼纏まといをするのは構わぬが、纏まといわれるのは妾ではない……。

貴様の方だ……！」

姿を現したのは、全身から迸る畏を溢れ出させ、右手に三尾の太刀、左手に長ドスを持った羽衣狐だった。

「いや、逆だろオオオオオ！」

予想外の事態に、九尾の内的一本に巻かれてる『俺』はシャウトした。久々のツツコミである。

「何で羽衣狐が、鯉伴さんを纏まとった形になってんの？ 普通逆ですよっ？」

「ふんっ。ぬらりひょん如きに纏まとわれる妾ではないわ」

声を荒げる『俺』に対して、羽衣狐は不敵にも似た笑みで返した。鬼纏まとい。奴良組二代目・奴良鯉伴が編み出した、半妖怪独自の業である。人の部分に下僕の畏をとりつかせ、力に変えて操る。

コレを成すには、互いの信頼関係が必要なのだが、今の鯉伴と羽衣狐に、そこまでの信頼関係は無い。その代わり、『この窮地を乗り切る』と言う共通の強い目的意識があり、足りない信頼関係を埋める事ができた。

この鬼纏は、鯉伴が人間部分に下僕の畏を纏うのだが、今回は逆に羽衣狐が鯉伴を纏まとってしまった。人間部分を羽織りとして、逆に

鯉伴を纏ったのか、それとも鬼纏の新たな形なのか、それは羽衣狐のみが知る。

とにもかくにも、鬼纏によって羽衣狐は新たな力を得たのだ。

「ケルベロス……貴様の息の根を止めるのは、妾だっ……！」

薄笑いで相手を睨む羽衣狐から、今までとは比べ物にならない凄みと威圧感があった。ソレに呼応するように、全身を纏う畏も、強く大きくなっていく。

相手を覆い喰らわんとするような強大な畏に、ケルベロスも息を荒げる。

「オ……オ……オ、オ、オオオオオオオオオオ！」

羽衣狐が発する畏に当てられ、極度の興奮状態に達したケルベロスは、咆哮を上げて襲い掛かった。

涎に濡れた牙が、羽衣狐の体に噛み付いた。

しかし、手応えは感じられない。

驚くケルベロスの前で、噛み付かれた羽衣狐の輪郭がボヤけ、徐々に姿が薄れていった。

「それは幻じゃ……！」

後ろから声が聞こえ、慌ててケルベロスは振り返った。

ソコには、さっき目の前に居たハズの羽衣狐が立っていた。

「なるほど……コレがぬらりひよんの能力……。こうして、ぬらりくらりと相手をやり過ぎすか……。自分がやると、なかなか面白くないモノだ」

ぬらりひよんの能力で、羽衣狐はケルベロスの攻撃をかわしたのだ。

すると、見物人が再び盛り上がりを見せた。鬼纏の力を見て、もしかしたら、と思ったのである。

上で騒ぐ見物人に、やれやれと羽衣狐は溜め息をつく。それから、尻尾で巻いていた『俺』を離して地面に立たせた。

「すぐに終わらせる。そこで待つておれ」
「は、はい」

答えた『俺』は悟った。羽衣狐は、全力を出すつもりなのだ。

そして、予想は当たった。

羽衣狐の九尾の先端に、火が生じた。

「九尾の炎 “狐火”！」

直後、九尾を振り上げ、先端に灯された火をケルベロス目掛け一斉に飛ばした。

九個の火の玉は、全弾命中する。火は消えずに炎となって広がり、ケルベロスの身体を焼いていく。

全身を焼かれて苦しむケルベロスは、羽衣狐を喰い殺そうと牙を剥く。噛み殺そうとした口は、しかし幻を噛むだけだった。またも後ろに回り込まれ、九尾の火を受け、炎の勢いと熱が強まる。

「スゲー！ ハハッ……スゲーぞ……！」

鬼纏をした羽衣狐の強さに、『俺』は笑って気力が戻ってくる。

一方、戦場を見下ろす一鬼は、半ば呆然自失とした状態になっていた。

バカな……！ 何なんだよ、アレは……？ 俺のケルベロスは最強の番犬……今まで、無敗伝説を築いてきた無敵の魔犬だ……！ 雑魚が束になってかかってきたところで、全て蹴散らせる……！ まさに恐竜対蟻……端から勝負にならない勝負だ……！ だが、この異常事態……！

涙目の一鬼の目が、羽衣狐の姿を捉える。

まさか……まさか、奴が鯉伴と鬼纏をするなんて……！ 信頼関係なんか無しに等しい奴等が……！ 強すぎる……！ 今回は、蟻がつ……！ 自分よりも遥かに大きな動物さえ仕留める、軍隊アリだっ……！

やがて溜まっていた涙は、目から流れ出る。頬を伝い、地面に滴り落ちた。

しかも、ケルベロスは甦生したばかりで、身体が出来上がっていない……！ そんな状態で、あんな強力な攻撃を受け続けたら……！

甦ったケルベロスは、以前よりも力を増している。だが、完璧ではない。肉体や骨の強度面が、まだ未熟なのだ。言うなれば、体が現世に馴染んでいない清明と同じ。

不完全。

未完成。

未成熟。

今のケルベロスは、耐久力では以前よりも劣っている。まだ不完全な仕上がりなのだ。更に、九尾の火は攻撃範囲が広く、予知の頭を以てしても回避しきれない。

無理だっ……！ 今の状態で、奴の攻撃を耐えられる訳が無いっ……！

「ぐっ……くうっ……！」

負けた時の最悪な未来が、一鬼の背に重くのし掛かり、頂垂れる。

どうすれば生き残れるか、一鬼は知恵を絞る。
そして、苦渋の決断をする。

「人間！ 提案だっ……！」
「え？」

突如声が降り、『俺』は顔を上げて一鬼を見る。
鬼気迫るような笑みで、一鬼は叫んだ。

「引き分け……！ 引き分けで手を打たないか？」
「はあ！？」

「ここまでケルベロスを追い詰めたのは、お前達が初めてだ……！
だから、その行為に敬意を称して、生き残らせてやるっ……！
お前達全員を、特別に……！ どうだ？ 悪い話じゃないだろう……
……？」

必死に『引き分け案』を押しってくる一鬼に、『俺』は迷う。
全員が生き残れるなら、確かに悪い話ではない。だが、今まで自
分達が味わってきた苦難苦汁を思い返すと、すぐに判断出来ない。
『俺』が迷っていると、戦闘中の羽衣狐が代わりに口を開いた。

「ふざけておるのか？」
「うっ……！」

一鬼の顔から笑顔が消え、蒼白になる。
横目で一鬼を睨み、羽衣狐は続ける。

「この鬪いは、どちらかが滅び、どちらかが生き残る……そういう
鬪いじゃ……！ 今さら命惜しさに、そんな甘い提案を出しても遅
いわっ……！」

「羽衣狐え……！」

情け容赦無い羽衣狐の冷徹な言葉に、一鬼は愕然となる。

「頼むっ……！ お願いだっ……！ そこを、そこを何とか……！」

必死に頼み込む一鬼だが、既に羽衣狐は聞く耳を持っていなかった。

容赦無く火の雨を降らせ、魔犬を焼き尽くそうとする。ケルベロスも、必死に抗いを見せるが、牙は虚しく空を切るだけで決して当たりはしない。

時、満ちる。

執拗に抗い続けてきたケルベロスに、死の気配が迫る。炎は既に全身を包み、無情に魔犬を焼き続ける。

「うう……！」

勝利が間近である事を悟り、『俺』の目から涙が溢れ出る。

やれっ！ やれっ！ やれっ！ やれっ！ やれっ！ やれっ！
と見物人からも声が上がっていた。

「やめろっ……！ やめろお……！ やめて……！ やめてくれ……！」

……！ 頼むっ……！」

やめろオオオオオオ！」

絶望の淵に立たされた一鬼は、悲鳴のような声で懇願する。
しかし、彼の願いが届く事は無かった。

「これで、本当に終幕じゃ……！」

火の攻撃を止め、羽衣狐は二本の刃を構えた。

「九尾の炎　　鬼纏流“紅蓮刀”！」
くれんとう

右の二尾の太刀と左の長ドスの刃に、九尾の炎が灯る。

地を蹴って跳躍して、ケルベロスの頭上で、上段に構えた二本の刃を振り下ろす。灼熱の炎の刃が、縦にケルベロスの巨体を一閃する。羽衣狐は地面に着地して、ケルベロスを見上げた。

一瞬の出来事に、見ている者は皆声を失った。

沈黙を破ったのは、ケルベロスだった。頭と胴は縦半分に分かれ、断面から夥しい量の鮮血を噴出させる。血の噴水の音を鳴らして、割れた体は地面に倒れた。炎に焼かれる体は、二度と立ち上がる事は無かった。

しばしの沈黙の後、『俺』は吠えた。

「うおおおおおおお！」

『俺』の歓喜の咆哮に触発されたように、見物人からも歓声が上がった。

「やったアアアア！」

「倒したっ！」

「本当に倒しちまいやがった、アイツ等！」

場が歓喜の声に包まれ、盛り上がる中、果てた人物が一人居た。

ケルベロス敗北にショックを受け、一鬼は地面に膝を着いて呆然自失となっていた。

*

『俺』達の勝利を不愉快に思う者が、地獄の城に居た。
他にもない、地獄の支配者である閻魔大王だ。

「さんざ期待させておいて……何じゃ、この決着はっ……!?」

嬉し泣きする『俺』や狂喜乱舞する見物人の姿が流れてる映像を見て、不機嫌を露にして立ち上がった。

「あゝ!? ええい、胸くそ悪いわっ……!」

怒りのあまり、映像が流れてる画面を殴り、破壊した。それでも怒りは収まらず、粉々になった画面の破片を踏み壊す。

後ろに控えてる部下達は、ただただ怯え、口を閉ざして見ているだけだった。

「クズがっ……! あんなゴミ共に、足を掬われおって……!」

しばらく物に当たった事で、いくらか気持ちが落ち着いてきた。

「ああ、忌々しい……! 中でも一番忌々しきは、あの人間……!」

脳裏に『俺』の顔を浮かび上がらせ、閻魔大王は歯を食いしばった。

ケルベロスと直接闘い、実際にトドメを刺したのは羽衣狐達だ。だが、勝つ要因を作ったのは他にもない、『俺』である。『俺』が居たからこそ、鯉伴と羽衣狐は手を組み、一匹狼の土蜘蛛まで仲間を引き入れた。そして一鬼の隙やケルベロスの三つの関門の突破口を見つけ、更には鬼纏を実行させるまで至った。

「なるほど、なるほど……あの晴明わかぞうが目をつけただけはあるわ……。
オイッ……!!」
「は、はい!!」

振り返って部下に声をかけると、慌てて返事がきた。

「確か、現世では百物語組とか言う連中が動いていたな……?」
「は、はいっ……!! その……奴良組を潰す為に、何やら暗躍して
いる模様で……!!」
「そうか……。クツクツクツ……。まあ、よいだろう……。地獄じごくを出
れても、奴等に待っているのは生き地獄だっ……!!」

部下からの話を聞いて、一転して閻魔大王は愉快げに笑う。
しかし、ソレもすぐに消えた。

「望み通りに、奴等は現世に還してやれ……。
そして、醜態を晒したあの一鬼クスは……地の底の底……地獄の最下
層 無限地獄行きっ……!!」

十八ノ怪：決着の時（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者：ミスターサーさんのキャラの四季からの質問。

『さて質問。』

皆さん地獄から蘇ったら何したい？

狐は将来的、主人公と死に別れるでしょ？（転生の意味で）その後はどうするつもり？』

俺「陽の光を浴びて昼寝したい。でも一番やりたいのは、羽衣狐とデートしたり、ニャンニャンする事かな」

羽衣狐「まずは、狂骨の相手をせねばな。あ奴は妖でありながら、愛い奴じゃからのう。それから人間イジメじゃな。コレ以上に楽しい事はない」

山吹「また皆さんと楽しく過ごせるなら、それ以上は望みません」

鯉伴「俺は、奴良組に戻るつもりだ。ハハッ、俺が戻ったらアイツ等ビックリするだろうな」

土蜘蛛「骨のある奴が居るなら、晴明が戻るまでの繋ぎに闘り合うか……。ああ、そっぴゃりクオはなかなか強かったな」

羽衣狐「二つ目の質問じゃが……。ふむ、そっぴゃのう……。おそろく、もう恋はせぬだろう。あの人間は、妖である妾を受け入れた男じゃ……。あの男を想うだけで、妾は充分じゃ……。」

次回『最終ノ怪：生還の時』

最終ノ怪・生還の時(前書き)

羽衣狐大好きです！

最終ノ怪：生還の時

どこぞの人気の無い公園。

気が付けば、『俺』は眩しい陽の光の下に居た。

「よお、目え覚ましたかい？」

声をかけられ、上を向けば鯉伴が立っていた。

「鯉伴さん。あれ？ 羽衣狐は……？」

キョロキョロと周りを見回して、隣で寝ている羽衣狐を見つけた。自分と同じように、地面の上で横になっている。

「羽衣狐。羽衣狐」

「ん……？」

軽く肩を揺すり、何度か声をかけると、羽衣狐は目を覚ました。うつすらと瞼が開かれ、黒い瞳が『俺』の姿を捉える。それから、ゆっくりと起き上がった。

「人間……ココは……？ 現世なのか……？」

「はい！ 帰ってきたんですよ、俺達！」

喜ぶ『俺』は、自然と声が大きくなる。

『俺』の言う通り、勝負に勝った全員が現世に生還された。唯一の死人であった鯉伴は、特別に生前と同じ肉体を与えられ、羽衣狐達と一緒に生還した。ケルベロスを敗つたのは彼等が初めてであり、又清明を除けば自力で生き返りを果たしたのも彼等が初めてだそう

だ。

生還を果たした『俺』は、ふとある事を思い出した。

「そういえば、土蜘蛛もちゃんと生還したかな？」

「俺達がこうして、ちゃんと戻ってるんだ。アイツも、人気の無い場所に居るだろうよ。あんな大物が街中に出たら、大騒ぎだからな」

ヘラヘラと笑いながら、鯉伴は言った。

鯉伴の言う通り、土蜘蛛も別の場所で生還されていた。他の三人と違い、外見的に人間の街中では騒ぎになる事は間違いないので、人里離れた山奥などに放たれていた。本人にとっても、弱つちい人間の群れはウザったいだけなので、ちょうどいい配慮だった。

「どうだい、二人共？ 生還祝って事で、組に戻る前に飲みにかねーかい？」

「おっ、いいですね！」

二人の男は肩を組み、喜びにテンション高くして公園を出ていく。その後ろを、呆れ顔でついていく羽衣狐だった。

*

明るかった空も、今ではスカリタ焼けに変わっていた。

「づぶっ……気持ち悪い……！」

「飲み過ぎっすよ、羽衣狐」

羽衣狐は顔色を悪くさせ、口を押さえて辛そうな顔をしている。

そんな羽衣狐を『俺』が支え、トボトボと道を歩く。

公園を出た後、鯉伴と一緒に飲み屋で酒を飲んだ。羽衣狐はセーラー服姿だと言うのに、堂々とだ。酒を二人分頼んで、『俺』の分を羽衣狐に回した。『俺』は以前の奴良組での宴会で飲み過ぎた一件で、自らに禁酒令を出していたのでちょうどよかった。幸い、店員の目にとまらなかったので、安心して飲んでいた。だが、グイグイ飲み続けた結果、羽衣狐はグデングデンに酔っ払い、足元も覚束ない状態になってしまった。これはマズイ、と判断した『俺』は即座に飲み屋を出ようと言った。すると鯉伴が、ぬらりひよんの能力で二人を連れて人知れず飲み屋を出た。

ようは、無銭飲食だ。

「ガキの頃は、よく親父に連れられてやったもんだぜ」
「いや、やったらイカンだろう！」

愉快げに笑う鯉伴に、『俺』は額に血管を浮かせて怒鳴った。
それから途中で別れ、鯉伴は奴良組に向かった。

『俺』と羽衣狐も、徒歩で羽衣狐の屋敷に向かっている。幸い、今度の帰還場所は京都だったので、さほど苦労はしない。仮生還の時のように、浮世絵町だったら大変な距離を歩くところだった。

肩を借りる羽衣狐は、顔を辛そうに歪めて言う。

「うう……妾が無銭飲食など、小さな悪行をするとは……」
「いや、まあ……ああでもしなかったら、羽衣狐の酔いがバレてましたし……。それに、俺等、今金持ってないし……」

結局、無銭飲食をする運命にあった事に、『俺』は苦笑いを浮かべた。

しばらく歩いて、見覚えのある屋敷が見えてきた。ああ、やっと帰れるんだと思った時、ふと屋敷の前に人影があるのを見つけた。

目を凝らして見れば、屋敷の門前に居るのは狂骨だった。心配した顔で、キョロキョロと周りを見回している。羽衣狐達の帰りを待っているのだろう。

狂骨の姿を確認した『俺』は、ニツと笑った。スウ、と息を吸い、

「狂骨ー！」

「えっ!？」

声が届き、狂骨がこちらを振り向く。

笑いながら手を振ってやると、狂骨は目に涙を溜めて駆け出した。小柄な少女が、人骨の髑髏を持って駆け寄ってくる姿は、なかなかシニールだった。

「羽衣狐様アアアア！」

「あつ、俺は無視？」

泣き声で羽衣狐に抱きつき、狂骨は再会を喜ぶ。

「ふふ、心配かけて済まぬのう」

「羽衣狐様〜！」

「ほんにお前は、愛い娘じゃのう」

いくらか気分が良くなったのか、羽衣狐は笑顔で狂骨の頭を撫でた。その顔は、本当に嬉しそうだ。

彼女の傍では、どうせ俺なんて、と『俺』が少しいじけていた。すると、

「人間……!」

「ん？」

狂骨に呼ばれ、『俺』は顔を向けた。
いまだ羽衣狐に抱きついて離れない狂骨は、頬を赤くさせ、照れ臭そうに言った。

「その……あ、ありがとう……！」

初めて狂骨から礼を言われ、不覚にも『俺』はドキツとした。

うっ……！ ちよつと可愛いじゃねーか……！

「あ、ああ。まあ、どういたしまして……」

妙に気恥ずかしくなり、『俺』も顔が少し赤くなる。

それから三人は、屋敷に帰った。中に入れば、しようけらを始めとする京妖怪に迎えられた。

京の屋敷に、千年を生きた妖狐が帰ってきた。

彼等は、再び現世に帰ってきた。未来あるこの世界に。
しかしそれは、百物語組と言う新たな敵との闘いの始まりでもあった。

最終ノ怪：生還の時（後書き）

なんとか、『地獄録篇』を完結させる事が出来ました。途中から、ちよつと駆け足になったり、物足りなさがあるかもしれませんが、それでも読んでいただき、ありがとうございます！

読者の皆様、感想・応援ありがとうございます！
また、いつかお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4059u/>

アヤカシ 地獄録篇

2011年10月2日01時57分発行